

赤ちゃんから  
おとなまで

# 聖書教育

2022年

1

2

3

月号

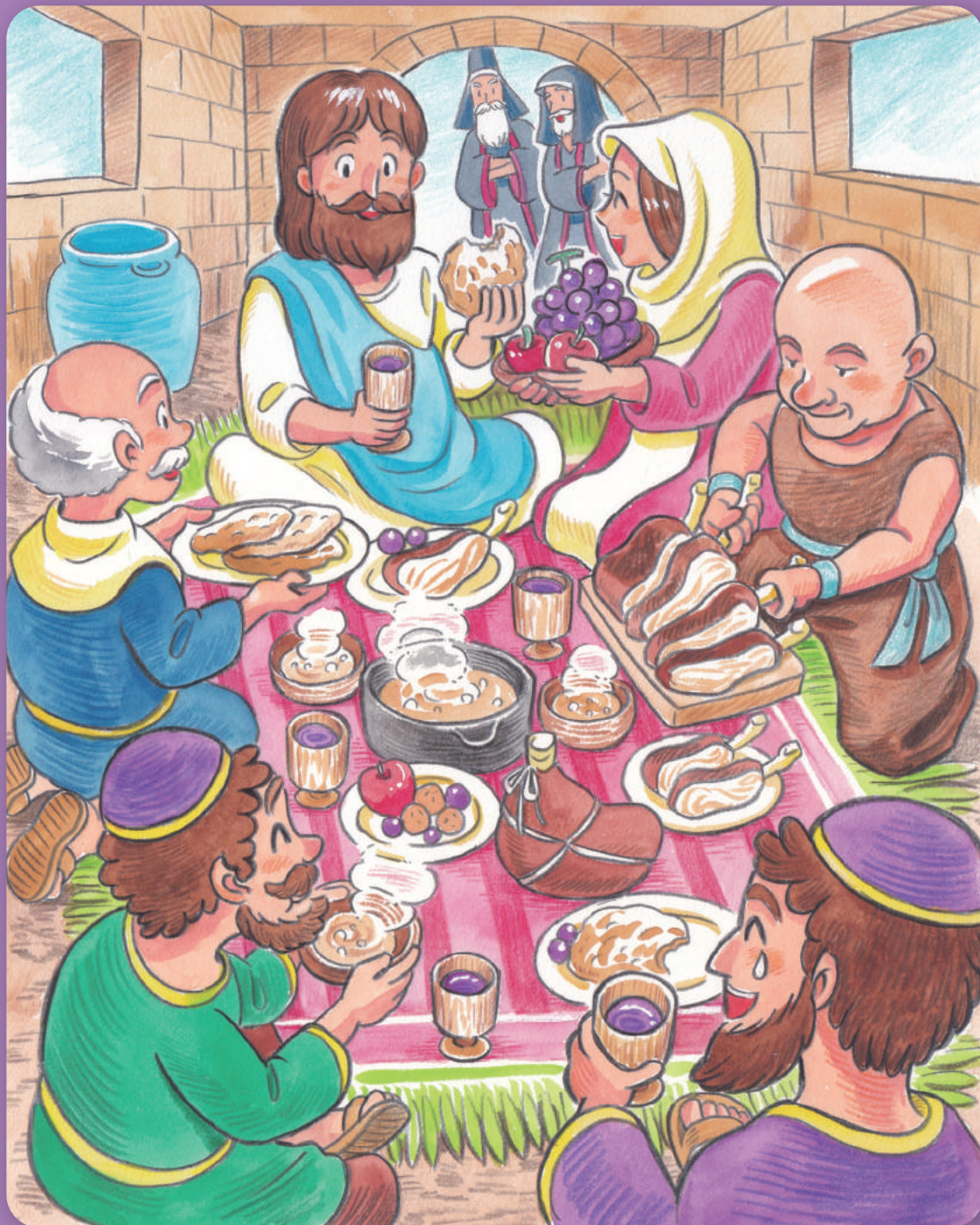
マルコによる福音書

絵主題

時代を生きる教会

テーマ

神の子イエス・キリストの福音



## テーマ 神の子イエス・キリストの福音

## 教会学校の目的

教会学校の目的は、その活動を通して、すべての人々がイエス・キリストを信じる信仰告白に導かれ、教会を形づくり、生の中領域において主に聞き、主を証しする生活を確立していくことにある。

日本バプテスト連盟 1971年制定、1999年改訂

聖書教育ホームページ <https://www.bapren.com/>

## 1 目次

## 2 プログラム表

## 3 準備のための聖書日課

川上敏夫

## 特集・連載

4～ **特集** レント・イースターメッセージ

マウマウタン

6～ **特集** 「信教の自由を守る日」を風化させないために

塚田正昭

8～ **連載** 協力伝道 再構築

宮本 恵

10～ **連載** とともに分かち、ともに生きる

坂元幸子

## 12 執筆者紹介

13 **概論** この時代に「マルコによる福音書」を読む

小田 衛

## 今号の展開例 ● 第40課～第52課

## 14～ 聖書の学び・成人科

小田 衛

## 16～ みんなで聴く聖書のおはなし

小田 衛

## 17～ 青少年科

西脇慎一

## 18～ 幼小科

杉山いずみ

## 92～ 暗唱聖句手話

塩山幸子

## 94～ 暗唱聖句カード 新共同訳・口語訳

## 99 「聖書教育」読者アンケート

## 100 次号予告

# 2021 年度 聖書教育 2020~2022年度プログラム

## 2022 年度 総主題 時代を生きる教会

課	月 日			週題	聖書箇所
40	1月2日		マルコ	福音のスタート	マルコ1:14~20
41	1月9日			罪人を招くために	マルコ2:13~17
42	1月16日			ここにわたしの家族がいる	マルコ3:31~35
43	1月23日			五つのパンと二匹の魚	マルコ6:30~44
44	1月30日	協力伝道週間		シリア・フェニキアで	マルコ7:24~30
45	2月6日	信教の自由		だから、目を覚ましていなさい	マルコ13:32~37
46	2月13日			メシアと告白しつつも	マルコ8:27~38
47	2月20日			信仰のない時代に	マルコ9:14~29
48	2月27日			神殿といちじくの木	マルコ11:12~26
49	3月6日			生きている者と共に	マルコ12:18~27
50	3月13日			裏切る者と共に	マルコ14:10~26
51	3月20日			心は燃えていても	マルコ14:27~42
52	3月27日			鶏の声を聞くたびに	マルコ14:66~72
1	4月3日		マルコ・使徒・コロサイ	ユダヤ人の王	マルコ15:6~20(参照15:1~5,21~32)
2	4月10日	受難週		あらわになった神	マルコ15:21~41
3	4月17日	イースター		約束のことば	マルコ16:1~8
4	4月24日			アテネでのパウロ	使徒17:16~34
5	5月1日			恐れるな、語り続けよ	使徒18:1~11
6	5月8日			それでもエルサレムへ	使徒20:17~38
7	5月15日			神の前で、人々の間で	使徒22:30~23:11
8	5月22日			鎖につながれながら	使徒26:19~32
9	5月29日			ともに元気に	使徒27:13~38
10	6月5日	ペンテコステ		聖霊は語り続ける	使徒28:17~31
11	6月12日			今や、明らかにされた!	コロサイ1:24~2:5
12	6月19日	沖繩命どっ宝の日		新しい人を着て	コロサイ3:5~17
13	6月26日	神学校週間		祈りの輪の中で	コロサイ4:2~6
14	7月3日		エフェソ・マタイ・ダニエル	ほめたたえられますように	エフェソ1:3~14
15	7月10日			かなめ石はキリスト	エフェソ2:14~22
16	7月17日			でっかい愛がうれしくて	エフェソ3:14~21
17	7月24日			心の底から新たにされて	エフェソ4:17~24
18	7月31日			愛されている子ども	エフェソ5:1~20
19	8月7日			神の武具を身に着けなさい	エフェソ6:10~20
20	8月14日	平和		平和を実現する人々	マタイ5:9
21	8月21日			それでも神さまに	ダニエル1:1~21
22	8月28日			ダニエルは思慮と知恵とをもって	ダニエル2:1~24(参照2:25~45)
23	9月4日			燃え盛る炉の中で	ダニエル3:13~30
24	9月11日	教会学校月間		獅子の洞窟の中で	ダニエル6:10~29
25	9月18日			ダニエルの祈り	ダニエル9:1~19
26	9月25日			その時まで、その時には	ダニエル12:1~13
27	10月2日		エブラ・ネハミヤ・ルカ	エルサレムへの帰還	エズラ1:1~11
28	10月9日			神殿建設の喜び	エズラ3:1~13
29	10月16日			神殿の完成	エズラ6:13~22
30	10月23日			神殿礼拝の整え	エズラ8:15~30
31	10月30日			ネハミヤ、エルサレムへ	ネハミヤ2:1~10
32	11月6日			城壁の建て直し	ネハミヤ2:11~20
33	11月13日			主を喜び祝う日	ネハミヤ7:72~8:12
34	11月20日			城壁の奉獻	ネハミヤ12:27~47
35	11月27日	世界祈祷週間		解放の福音	ルカ4:16~21
36	12月4日			ヨハネ誕生の予告	ルカ1:5~25
37	12月11日			イエス誕生の予告	ルカ1:26~38
38	12月18日			喜びを分かちあう女性たち	ルカ1:39~56
39	12月25日	クリスマス		イエスの誕生	ルカ2:1~20

2021年10月現在

2022年1月

準備のための聖書日課

1日㊥ マルコ1:1~13 神の子キリストの福音の初め  
**2日㊥ マルコ1:14~20** **福音のスタート**  
 3日㊥ マルコ1:35~39 ひとり祈られる主イエス  
 4日㊥ マルコ1:40~45 主イエスの秘密  
 5日㊥ ルカ18:9~14 義とされた徴税人  
 6日㊥ テモテ1:12~17 罪人を救うために  
 7日㊥ マルコ10:17~22 わたしに従いなさい  
 8日㊥ マルコ2:1~12 罪を赦す権威を持つ方  
**9日㊥ マルコ2:13~17** **罪人を招くために**  
 10日㊥ マルコ2:23~28 安息日は人のために  
 11日㊥ マルコ3:13~19 使徒と呼ばれた十二人  
 12日㊥ 創世記9:12~17 虹の契約  
 13日㊥ エフェソ2:14~22 わたしたちは神の家族  
 14日㊥ マルコ6:1~6前半 この人は大工ではないか  
 15日㊥ マルコ3:20~30 誰が主イエスを知るか  
**16日㊥ マルコ3:31~35** **ここにわたしの家族がいる**

17日㊥ マルコ4:35~41 なぜ、こわがるのか  
 18日㊥ マルコ5:21~34 あなたの信仰があなたを救った  
 19日㊥ マルコ5:35~43 少女よ、起きなさい  
 20日㊥ エゼキエル34:11~16 弱ったものを強くされる主  
 21日㊥ 詩編23:1~6 主は羊飼い  
 22日㊥ マルコ6:6後半~13 主に遣わされて生きる  
**23日㊥ マルコ6:30~44** **五つのパンと二匹の魚**  
 24日㊥ マルコ6:45~52 逆風に抗して  
 25日㊥ マタイ4:23~25 シリアに広まった主の評判  
 26日㊥ マタイ11:20~24 異邦人の地ティルス  
 27日㊥ ローマ9:1~5 肉としてのイスラエルの選び  
 28日㊥ ローマ10:5~13 ユダヤ人とギリシア人の区別はなく  
 29日㊥ マタイ15:21~28 御前にひれ伏して  
**30日㊥ マルコ7:24~30** **シリア・フェニキアで**  
 31日㊥ ルカ12:35~40 思いがけないときの到来

2022年2月

準備のための聖書日課

1日㊥ ルカ12:41~48 主イエスは帰ってこられる  
 2日㊥ ローマ13:11~14 主イエスを身にまとして  
 3日㊥ マルコ13:1~13 耐え忍ぶ者の救い  
 4日㊥ マルコ13:14~27 何に気をつけるのか  
 5日㊥ マルコ13:28~31 滅びることのない主の言葉  
**6日㊥ マルコ13:32~37** **目を覚ましていなさい**  
 7日㊥ マルコ8:1~10 感謝の祈りと賛美の祈り  
 8日㊥ マルコ8:11~21 まだ、分からないのか  
 9日㊥ マルコ8:22~26 主イエスへの開眼  
 10日㊥ イザヤ61:1 主なる神の霊の働き  
 11日㊥ ヨハネ1:35~42 わたしたちはメシアに出会った  
 12日㊥ マタイ16:13~20 あなたはメシア、生ける神の子です  
**13日㊥ マルコ8:27~38** **メシアと告白しつつも**  
 14日㊥ マタイ9:27~31 信じているとおりになるように

15日㊥ マタイ13:53~58 主イエスにつまずいた人たち  
 16日㊥ マタイ17:14~20 からし種一粒ほどの信仰  
 17日㊥ エフェソ6:18~20 根気強く祈り続けなさい  
 18日㊥ ヘブライ12:1~3 信仰の創始者を見つめながら  
 19日㊥ マルコ9:2~13 主イエスの栄光の輝き  
**20日㊥ マルコ9:14~29** **信仰のない時代に**  
 21日㊥ ルカ13:6~9 神は何を待つのか  
 22日㊥ イザヤ56:1~8 すべての民の祈りの家  
 23日㊥ マタイ6:9~13 御心が行われますように  
 24日㊥ ヨハネ5:13~15 神の御心に適うこと  
 25日㊥ マルコ4:26~29 豊かな実を結ぶために  
 26日㊥ マルコ11:1~11 子ろばに乗る王  
**27日㊥ マルコ11:12~26** **神殿といちじくの木**  
 28日㊥ 使徒言行録23:6~10 死者の復活の望みを抱いて

2022年3月

準備のための聖書日課

1日㊥ ヨハネ6:34~40 終わりの日の復活を信じて  
 2日㊥ 申命記25:5~6 亡き兄弟の名を残すために  
 3日㊥ 出エジプト記3:1~6 わたしはあなたの父の神である  
 4日㊥ 出エジプト記3:11~15 わたしは必ずあなたと共にいる  
 5日㊥ マルコ12:28~34 愛への集中  
**6日㊥ マルコ12:18~27** **生きている者と共に**  
 7日㊥ マルコ12:35~37 王を超えるメシア  
 8日㊥ マルコ12:38~44 献げて生きる  
 9日㊥ 出エジプト記12:1~14 主の過越の祭り  
 10日㊥ ヨハネ6:66~71 十二人のひとりには悪魔  
 11日㊥ ヨハネ13:21~30 サタンがユダの中に  
 12日㊥ マルコ14:3~9 彼女を記念して  
**13日㊥ マルコ14:10~26** **裏切る者と共に**  
 14日㊥ 詩編42:2~6 なぜ、うなだれるのか  
 15日㊥ ゼカリヤ13:7~9 羊の群れは散らされる  
 16日㊥ マルコ16:1~8 あなたがたより先にガリラヤへ

17日㊥ ローマ7:13~25 わたしは肉の人  
 18日㊥ ローマ8:12~17 アッパ、父よ  
 19日㊥ ヨハネ14:25~31 さあ、立て、出かけよう  
**20日㊥ マルコ14:27~42** **心は燃えていても**  
 21日㊥ マルコ14:43~52 まるで強盗にでも向かうように  
 22日㊥ マルコ14:53~65 死刑にするための裁判  
 23日㊥ ダニエル7:11~14 天の雲に乗る人の子のような者  
 24日㊥ マタイ26:69~75 言葉遣いで分かる  
 25日㊥ ルカ22:54~62 主のまなざしのなかで  
 26日㊥ ヨハネ18:15~18 ベトロともう一人の弟子  
**27日㊥ マルコ14:66~72** **鶏の声を聞くたびに**  
 28日㊥ マルコ15:1~5 お前がユダヤ人の王なのか  
 29日㊥ マルコ15:21~32 十字架の王  
 30日㊥ イザヤ53:1~10 屠り場に引かれる小羊のように  
 31日㊥ マタイ27:15~26 パラバ・イエスかメシア・イエスか



# レント・イースター メッセージ

## 欺あざむくことのない希望



バプテスト国分キリスト教会 牧師  
マウマウタン

高校入試で不合格となり前向きな気持ちが薄れていた時、教会学校のリーダーが慰めにくれた聖句を思い出します。「希望はわたしたちを欺くことはありません」（ローマ5：5）。

2020年3月以降、世界は新型コロナウイルス感染拡大によるパンデミックという激しい嵐の危害を大きく受けています。感染者がゼロという国も数カ国ありますが、世界のほとんどの国々が重大な課題を抱え、不安と戸惑いが私たちと教会の歩みに様々な影響を与えています。今まで経験しなかった制限を伴う日常生活や、礼拝堂で心を合わせて神さまに礼拝をささげることの困難。それでも慎重に働く信仰生活に、み言葉による真実の希望を求め祈りつつ生きることが、今の私たち一人ひとりと教会に与えられているつとめと思わされます。

キリスト教会は、2000年間の歴史の中で、み言葉により約束されている希望について語り続けてきました。初代教会の時代から現代に至るまで、キリスト教会が伝え続けてきた希望は、困難や苦難に苦しむ人々が、その時代を生き抜く力と勇気を豊かに受けることでした。とりわけ、初期キリストの群れが困難な状況に耐えて信仰生活を送ってきたその背後には、聖書の言葉が支えであったのが明らかでした。

ローマ人への手紙を通してパウロは、自分の信じる福音理解を示しながら、困難の中でも復活のイエスにこそ、生きる希望があることを忠実に語っています。パウロ自身も、福音宣教のために多くの患難や迫害を受け、試練の道を歩きました。このよう

な状況の中で、苦しみ悩む自分を支えた絶大な神さまの愛とゆるしにより現される栄光の希望について熱意を持って証しをし、「わたしたちは、このような希望によって救われているのです」（ローマ8：24）と力強く慰めの言葉を伝えました。復活の主イエスを救い主と信じる信仰を生きる者には、希望とは神さまが約束され、聖霊を通して保証されているものですので、どのような患難も決して私たちを傷つけることなく、導いてくださることを明確にこの言葉は指し示しているのです。

現代の世界と社会に目を向ければ、喜ばしく平穏な環境の向こう側には、苦しみや絶望や恐怖に覆われながら不安な日常生活を送っている人々や国々、そしてキリストの群れ及び教会が数多くあります。2021年2月にクーデターを起こした国軍の行動により平和と人権が損なわれているミャンマーの人たちと教会、また、同年8月の後半にイスラム主義組織タリバンがアフガニスタンの首都カブールを制圧して大統領府を掌握したことにより人権と命の危険に脅かされている国民とキリスト者及び教会が、苦しみと恐怖に曝されていることを思います。明日に保証される光がまだ見えていない現状の中に置かれながらも、ミャンマーバプテスト連盟がクーデター発生時に表明した声明文に目がとまります。『ミャンマーバプテスト連盟（以下MBC）は2021年2月1日、（中略）軍部が全土に非常事態を宣言して国家権力を奪取したことによってもたらされた、民衆のショック、悲しみ、そして失望を共有しています。（中略）MBCは、平和、正義、国民和解、非暴力、そして人権と尊厳を尊重し、促進する連邦民主制に基づくミャンマー連邦共和国が出現する希望をもって、この声明を発表します。』（翻訳／

須藤伊知郎教授・西南学院大学）。ミャンマーのキリスト者と教会は、自らの自由と命の危機を覚悟しながらも、十字架の主イエスが示してくださった正義の意志について、深い希望の信仰を明確に示していることが、言葉にならない感動を与え、キリスト教会が伝え続けてきた希望の豊かさが明らかに表されています。

神さまは、私たち一人ひとりの人生に生きる力を与えています。一人ひとりが人間らしく、神さまの愛に生かされている者らしく、その人が与えられている素晴らしい生涯を生き活きと生きることができることを望んでおられます。そしてその人が、人生の途上で色々な出来事に直面して、生きることに疲れを感じたり、或は生きる力に限界を感じたりする時にこそ、その人の人生に新しく生きる力という希望を与えてくださることを聖書の言葉が示しているのではないのでしょうか。

キリスト教会は、この季節を迎える時、毎年のようにレントとイースターの出来事を覚えます。私たち人類の罪の赦しのために十字架の上で痛みと苦しみを受けてくださった主イエスの贖いと愛、三日目に復活されたできごとにより与えてくださった希望の恵みに心からの感謝と悔い改めにより、自らの信仰を新たにする時として2000年の長い歴史の中で守り続けてきました。そしてそれは主イエスが、死の力に打ち勝たれたという力強い希望に満ちる神さまのご計画に心を向ける時です。復活の主の愛により、私たちの信じる心に生きる力なる希望を注いでくださいます。私たち自らが聖書の言葉を通して復活の主に立ち返り、心を静めるその時に私たちの人生に欺くことのない希望の光による更なる豊かな生きる力の恵みが約束されています。

# 「信教の自由を守る日」を 風化させないために

私が中学生の頃、教師たちがデモ行進に出掛け、授業が休みになったことがありました。デモは教職員の組合活動でなされたものであったと思います。そのデモ行進の折に掲げられたプラカードの言葉の一つに「教え子たちを二度と戦場へ送るな」との言葉があったことを授業が休みとなって喜んだ記憶とともに思い出します。この教師たちがプラカードの言葉に込めた思いと2月11日の「建国記念の日」を「信教の自由を守る日」として国家の制定の意図に対抗してきた思いとが重なりと私には思われるのです。

## 制定から半世紀を越えて

1967年から始まった2月11日「建国記念の日」は、2022年で56回目を迎えます。対抗して「信教の自由を守る日」と掲げて来た歩みも半世紀を越え、やがて還暦かんれき(!?)を迎えるわけです。これまで対抗して来た思いを風化させないためにも、2月11日「建国記念の日」を「信教の自由を守る日」として対抗して来たのはなぜかを振り返っておきましょう。

## 「紀元節」とは

「建国記念の日」は戦前、盛大に祝われていた「紀元節」が形を変えてあらわれたものです。この「紀元節」は歴史学的根拠もあいま

いで、実在も疑わしい初代天皇とされる神武天皇の即位日をこの国の始まりとした明治政府により1873年(明治6年)祭日と定められた日です。諸外国の独立記念日や革命記念日とは違って、事実ではなく観念によって作りだされた祭日です。この国は天皇によってつくられた「神の国」とする歴史観(皇国史観)を国民一人ひとりの心の中に植えつけ、国家への服従と国家精神の統一を図る意図をもって制定されました。

## 「紀元節」と「戦争」

「紀元節」が果たした大きな役割の一つ、それは1894年に始まった「日清戦争」、1904年(明治37年)には「日露戦争」、さらに十五年戦争敗戦に至る1945年までの50余年に亘って、戦争へと国民を駆り立てる役割を担ったということです。国民こそって国家のために命を惜しむことなく「勝ってくるぞと勇ましく」戦場(殺すこと、殺されることの起こる場)へと向かわせるための精神的柱となったのが「紀元節」であり、その日は戦争宣伝の日、国家主義と軍国主義の記念日となったのです。日清戦争から十五年戦争敗戦までの半世紀に亘り、学校教育を通して幼い時からこの国は天皇中心の「神の国」だと教え込んできました。結果、国民が奪い取られたものは自分の信じる宗教を選ぶ自由と国からの宗教の強制を拒む自由(現・日本国憲法

塚田 正昭

霊水キリスト教会 牧師



20条)でした。本来、教師たちは子どもたちにこの二つの自由の大切さを教え育てべきであったのに、率先して自由を奪い、戦争へと駆り立ててしまいました。その歴史的過ちへの悔いがプラカードの言葉となったのでしよう。

## 「誰に」にとっての「自由」？

「えらく息巻いているけど、そんなことは戦前の遠い昔のことであって今の時そんなことはない」と言われるかもしれません。しかし、今尚この国では変わることなく国家が国民の信教の自由を認めず、私たちの心を支配していることが顕わになった出来事がありました。それは「自衛官合祀拒否訴訟」と呼ばれた中谷康子さんという女性の訴えた裁判です。結婚十年足らずで自衛官であった夫の孝文さんを事故で亡くした康子さんは、息子さんと二人、取り残されました。キリスト者である康子さんは自身の通う教会の牧師とともに、聖書を通して夫の死の意味を尋ね、信仰によって乗り越えていきたいと願っていました。しかし、亡くなって四年経って突然、孝文さんを殉職自衛官として護国神社に祭神として永代、祀り続けるとの通知が届いたのです。その通知に対して康子さんは「キリスト

者としての信仰をもって夫の死を追悼したい」と合祀拒否の訴えを起こしたのです。信教の自由を守りたいとの訴えに最高裁判決(1988年6月)は「中谷さんは自らの信教の自由をいうのであれば、他人の信教の自由に対しても寛容でなければならず、護国神社への本都合祀を受忍すべきである」と康子さんの訴えを退けて敗訴を言い渡したのです(1、2審勝訴)。康子さんの自由より他人(国家)の自由を優先、無理やり従わせたのです。戦前と地続きの国家支配が続いていることが顕わになった判決でした。憲法20条のとんでもない誤用によって小さな願いが踏みにじられた判決を心に刻み「誰にとっての自由」となっているかを見極めなければなりません。

## 「休日」ではなく「求日」に

今、この国は「戦争しない国」から「出来る国・出掛ける国」に変質をしてしまいました。長く続くコロナ危機が教えてくれたこと、それは自分の身を守ることは隣人の身を守ることと繋がっており、自らの信教の自由を守るとは隣人の自由を守ることとつながることです。この日を信教の自由を求め続ける「求日」とし、自分の言葉のプラカードを掲げて過ごしたいものです。ぜひ、信教の自由についての森本あんり氏(国際基督教大学教授)一文「すべての自由の基に」を求めて検索してみてください。





# 協力伝道 再構築

日本バプテスト連盟(以下、連盟)が「協力伝道」を行なうために結成された伝道協力体であることは周知のことで、私たちが連盟に「加盟する」ということは『協力伝道』と一緒に担います」という各教会の意志表明なのです。ただ「協力伝道」という言葉を聞いて連想する事柄は、人によって、そして時代と共に変化してきています。

連盟がかつて「全国支援拠点開拓伝道」\*を推進していた頃、定期総会の場で「拠点開拓は協力伝道の華」という発言が聞こえることもありました。連盟結成の初期、「全日本にキリストの光」という標語のもとで県庁所在地にバプテストの教会を建てることを伝道施策の柱としていた頃から、新規に伝道拠点を開設すること、即「協力伝道」であるという認識が始まったのかもしれない。

かつては「伝道圏伝道」という名称で農村伝道が志された地域もありましたが、多くは、日本の社会が高度経済成長期を迎えたのと歩調を合わすかのように、全国各地の、特に新興住宅街や人口が多い都市部に教会を新規開設することが「協力伝道」の成果とされてきました。その原資の多くが米国南部バプテスト連盟からの多額の献金であったことは感謝と共に覚えなければなりません。私たちが献げた協力伝道献金だけでは成し得なかったことでしょう。また、教会活動の活発化

に伴って、『聖書教育』誌の発行に象徴される教会教育の充実や、『新生讃美歌』に代表される教会音楽の深化も協力伝道の豊かな実りでした。それらを、あえて表現するならば、「協力伝道」とは、伝道のための翼を大きく広げることであり、それが福音宣教の業そのものとみなされ、さらに、時代の流れの中で教会が社会の諸課題と接して、そこで痛んでいる人たちと共に生きることや、社会の現場でイエスさまの福音の言葉を分かち合うことも大事な宣教の業ととらえ直されて、「協力伝道」の実りに数えられるようになりました。

ところが、「少子人口減少社会」に入り、また近年の情報伝達の技術革新の影響から教会も無縁ではなく、時代の荒波の中で揉まれ続けています。私たちが伝えるイエスさまの福音は変わることはありませんが、その伝え方は明らかに変化しており、特にこの2年のコロナ危機によってそれは<sup>けんちよ</sup>顕著になっています。その波の中で、連盟結成以来、大事にしてきた「協力伝道」のあり方も変化とは無縁ではなく、形を変えるのは当然のことであると言えます。

四半世紀ほど前の連盟総会で、牧師給が十分に出せないことに由来する教会間格差解消の手立てとして、地方教会から「牧師給プール制度」という教会間の相互支援制度が提案されたものの、



それは協力伝道の課題ではない、自助努力が足りないという声にかき消され、否決されてしまいました。全国の教会が現在、直面している課題に真っ先に向き合うこととなった、地方からの悲鳴の一つであり、「炭鉱のカナリア」だったのではと想い起しています。同様の提案がいま出されたならば、大事な「協力伝道」の働きとして多くの共感を呼ぶのではないのでしょうか。地区宣教主事だった5年ほど前に、牧師謝儀がいわゆる「牧師基準給」に遠く及ばない教会が全体の半数以上であること、老朽化した会堂の更新や維持管理に回す費用の捻出が難しいという声を聞いていました。「協力伝道」=「拡げること」という考え方ではすくい取ることができない課題が山積している現状では、おのずと「協力伝道」の、協力の在り方は変わらざるを得ず、誤解を恐れずに言うならば、広げるだけ広げた翼をどのように畳んでいくのか。それがこれからの「協力伝道」を考える「肝」なのではないかと感じています。

とはいえ、潤沢な資金基金に基づいた経済的な支援ができない中、新しい「協力伝道」の姿を提示して取り組まなくてはなりません、そのためにどこから手を付けていけばいいのか。たとえば、全国におられる専門家のデータベースを連盟が管理し、諸教会からの要望に応じてチームを結成すべく支援ボランティアを募るとか、財務管理の専門

家を集めて教会財政の改善や支援ができる体制を側面から整えるとか。IT時代だからこそ、軽い負担で構築可能ではないかと考えます。これまでとは違う「協力伝道」を実行するだけの潜在的な力を、今の連盟なら、まだ持ち合わせているのではないのでしょうか。

困難と向き合っている諸教会を支え、形が変わったとしてもその活動を持続させていくための手立てを整えることは、これからの「協力伝道」に不可欠であり、「協力伝道」の理念を再構築することに直結します。ただし、その過程で、かつての成功体験は捨てなければなりません。「新しいぶどう酒は、新しい革袋に入れねばならない」のみ言に倣いつつ、「協力伝道週間」の時に、新しい協力伝道のあり方を早急にそして共に、考えたいものです。

\* 「開拓伝道」という言葉のとらえ直しが求められていることは承知していますが、当時の用語をそのまま用いています。

# 「一人ひとりが聖書を学び、 共に分かち合う」 バプテストの恵みを 感謝して

「来月から教会学校の助手をお願いします。聖書の準備はこれがあれば大丈夫」。バプテストを受けてまもないある日、手渡された一冊の冊子、それが『聖書教育』と私の最初の出会いでした。当時月刊誌だった『聖書教育』はやがてカラフルな季刊誌となり、バックナンバーが私の書棚の一角を彩るようになりました。近隣の教会を訪ねた時に、すぐ目に入るのもそこに置かれた『聖書教育』。次の日曜日には、この教会でも同じ聖書の箇所が開かれ分かち合われるのだと思う時、バプテストの協力伝道のつながりを実感します。

青年時代に一冊の『聖書教育』を渡された時にはまったく自覚していませんでしたが、やがて私は気づかされていきました。信徒一人ひとりが聖書を読み、互いに分かち合う共同学習は決してあたりまえのものではないことを。最近もそんな経験がありました。東京バプテスト神学校2020年度後期に開講された「教会学校論」のある受講生がこうレポートに記されました。「私たち〇〇派は神の言葉である聖書が正しく解き明かされ、正しく宣べ伝えられる働きは召命を受けた教職のみの働きであると理解しています」。大変興味深く感じました。そしてその時改めて再認識

させられたのです。「共同学習はバプテストの宝」なのです！ちなみにこの方はもともとバプテスト出身で、現在所属しておられる他派の教会でも信徒同士の共同学習を可能な形で実践されようとしています。私自身もバプテストに与えられた宝、共同学習の恵みをさらに大切にしていきたいと思いました。

「聖書を自分で読む人々…彼らはそれまで絶対視されていた教職者たちの語る『伝統的な教理』に素朴な疑問をぶつけ、(中略)『初代教会の姿』にならって真のキリストの教会を創り上げようと結集しました。つまりバプテストは、市民一人ひとりが自分で聖書を読み、聖書の真理を自らの信仰と生活の中に実践していくことを、真剣に追及する中に誕生した教会なのです」。(『いま、バプテストを生きる』P.10～11 日本バプテスト連盟)

何をしたら永遠の命を受け継ぐことができるかと、主イエスを試すために問うたある律法の専門家に主イエスは問い返されました。「律法には何と書いてあるか。あなたはそれをどう読んでいるか」(ルカ10:26)。暗記した律法の言葉をよどみなく返したこの人は、「正しい答えだ。それを実行しなさい。そう



日本バプテスト連盟宣教部長補佐

坂元幸子

(藤沢バプテスト教会 協力牧師・東京バプテスト神学校校長)



すれば命が得られる」という主イエスの返答にうろたえます。あわてた彼が自分を正当化して「では、わたしの隣人とはだれですか」と答えると、主はひとつのたとえ話をされました。追いはぎに襲われ半死半生で道端に倒れていた人の傍らを祭司もレビ人も通り過ぎて行きました。ところが一人のサマリア人が立ち止まって応急手当を施し、自分のろばに乗せて宿屋に連れて行ったのです。この人は宿屋の主人にデナリオン銀貨を2枚渡して言いました。「この人を介抱してください。費用がもっとかかったら、帰りがけに払います」。

主イエスは律法の専門家に改めて問いました「あなたはこの三人の中で、だれが追いはぎに襲われた人の隣人になったと思うか」。歴史的宗教的な経緯からユダヤ人のサマリア人への蔑視と差別は根深いものでした。サマリア人という言葉すら口にするのも拒否するかのように「その人を助けた人です」と彼が答えた後、主イエスの短い言葉をもってこの箇所は締めくくられます。「行って、あなたも同じようにしなさい」。

律法（聖書）を知識として学ぶことは大切です。その上で「あなた」（＝「わたし」）がそれをどう読み、どう解釈し、実際の生活の中でどのように生きようとしているのかを問うことが重要です。それはまた、「わたし」（＝「あなた」）は誰の隣人となって生きようとする

のかを互いに問い合うことでもあるでしょう。共同学習は、この主イエスの問いかけを互いに問い合う作業であり、聖書に問われつつ生きることなのです。

1953年、連盟結成から6年後に発行された『聖書教育』には他派に先駆けて戦後初めての「成人科テキスト」が掲載されました。「子どもからおとなまで」の『聖書教育』の歩みの始まりです。連盟結成から今年で75年、おりしも「第4機構改革」が進められているただ中です。「諸教会が主体となって」「ともにキリストを証しするために」との機構改革の理念にはバプテストがそれぞれの時代の中で、そしてあらゆる時代を超えて、大切に持ち運んで来た思い、すなわち「ますますバプテストになってゆきたい」との祈りが込められています。

こうした改革の中で『聖書教育』も今の時代の協力伝道の姿に見合った在り方で再出発しようとしています。これからの『聖書教育』は、その背後にある多様で豊かな教会教育のあり方を映し出しつつ、諸教会に置かれ続けてほしいと願います。み言葉に問い、問われ、互いに問い合う交わりが地域を超えてお互いにつながり合っていく、そんなバプテストの協力伝道の姿と『聖書教育』の未来を夢見ています。

## 執筆者紹介



概論・聖書の学び・成人科・  
みんなで聴く聖書のおはなし

おだ まもる  
**小田 衛**

大富キリスト教会 牧師

初めて担当させていただき、「聖書教育」がどれほど時間と手間をかけ、祈りの中で作成されているのか体験できただけでも感謝でした。二年越しの新型コロナウイルス感染拡大の中で、執筆者や編集委員の方々と共にみことばに向き合い、「孤読」にならず、みことばの広さ高さ深さを味わうことができました。また、校閲などで支えてくださっている方々の働きにも心から感謝いたします。用いていただければ幸いです。



青少年科

にしわき しんいち  
**西脇 慎一**

神戸バプテスト教会 牧師

新型コロナが流行を始めてから2年になりますね。みなさんの生活はどう変化したのでしょうか。私はストレス解消のために二つの楽しみを見つけました。一つは料理をすることです。昔タイにIMVで行ったときに覚えたタイ料理は得意なレパートリーの一つになりました。もう一つは完全に自分目線で聖書をじっくり読んでみることです。イエスさまのみ言葉が改めて心に響くことを感じます。是非「聖書」との対話も楽しんでください。



幼小科

さざやま  
**杉山 いずみ**

徳島キリスト教会 牧師

実り豊かで食べ物のおいしい2度目の幼小科執筆をさせていただきました。普段考えることのない仕事を考えるのに四苦八苦しなから、教会の方たちに祈り支えてもらい、アイデアやご協力をいただきながらなんとか終わることができました。ご活用いただければ幸いです。個人的なことですが7月20日より里子を迎えました。たくさんの人の祈りに支えられて、たくさんの愛を親子共々に受けながら幸せを感じつつ、主に感謝の日々を過ごしています。



表紙

みうら  
**三浦 あや**

藤沢バプテスト教会  
教会員

**表紙タイトル「罪人を招くために」**

弟子となった取税人レビの家で食事をしているイエスさまを描きました。嫌われ者だったレビが共に食卓を囲み楽しそうにしている様子を温かみのあるタッチで描きました。家の外では律法学者たちが驚いて見えています。中央には革袋に入ったぶどう酒があります。私たちもこの食卓に招かれていることを覚えていきたいと思います。

## 編集後記

\*私の属している教会は2020年1月から連続で主日礼拝宣教が「マルコによる福音書」でした。この号の編集終了と同時期に「マルコによる福音書」が終わります。執筆者会議で交わされる皆さまの解釈に、それぞれの教会の風景を垣間見していました。コロナ下にあっても「死んだ者の神ではなく生きている者の神」と言うくださる方と共になら、この時代を生き抜けると信じて歩みます。(N.T)

\*おはなしのイラストを考えるのは大事な仕事の一つです。おはなしの風景を思い描き、印象的な一場面やイエスさまのまなざしを想像して描きます。悲しいほど絵心のない私のラフ画を、全力でくみ取り素敵なイラストに仕上げてくださいる方が与えられています。感謝！みなさんなら、どんな風景を思い描きますか？(Y.I)

# この時代に 「マルコによる福音書」を読む

大富キリスト教会  
牧師 小田 衛

## 著者マルコ

著者マルコは、ギリシア語でマルコと呼ばれていたヨハネです。その名は他の書簡にも記されており、その内容からマリアの息子（使徒 12：12）と同一人物だと理解されています。

マルコはバルナバのいとこ（コロサイ 4：10）であり、パウロの助手として第一回伝道旅行に同行し（使徒 15：35）、第二回伝道旅行の際はパウロと仲違なかつがいしました（使徒 15：39）。その後ローマの獄中にいたパウロに「協力者」（フィレモン 24）と呼ばれるほど信任を得た人でした。また、ペトロとも親しく、通訳者であり、「わたしの子」（1ペトロ 5：13）とも呼ばれ、パウロ神学やペトロのイエス伝を踏まえて独自の福音書を記したと考えられます。

## 特徴

マルコ福音書には、系図やイエスさまの降誕に言及するような記述はありません。また、ヨハネ福音書のように象徴的な表現ではなく、「神の子、イエス・キリストの福音の初め」という明確な執筆意図を示す言葉で始まっています。イエスさまが神の子であることは、洗礼者ヨハネからのバプテスマ（1：11）や、山上での変貌（9：7）の時の天よりの証言、そして十字架に立ち会った百人隊長の

証言をもって権威者として表現します。その権威者が受難するという不条理を描くことによって福音を現実的、普遍的なものとして捉えているのです。マルコは伝承のイエスにではなく、神の子である所に立って、最も短く簡潔にイエスさまの言動と周りで起こる出来事を通して福音の意味を書き記すことに徹しています。そして福音が、イエスの受難と復活に留まらず、人々を抑圧していた宗教的伝統や宗教指導者たちからの解放の知らせでもあることを示すのです。

## 語りかけること

イエスさまは福音伝道のために弟子たちに悪霊追放の権能を与え、派遣されました。そして、「自分を捨て、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい」（8：34）と命じられます。しかし、弟子たちは誰も最後までイエスさまのことを理解することも従うこともできませんでした。それは、イエスさまの十字架への道が人間の理解や常識を超えていることを示しています。そして、復活についても明確な証言を避け、「あの方は、あなたがたより先にガリラヤへ行かれる。…そこでお目にかかれる」と告げるのみです。理不尽で不条理な時代にあっても、神の子イエス・キリストの福音は私たちに、神が共におられる善き知らせであり、希望であることを語りかけています。

## 時は満ち

イエスさまはバプテスマのヨハネからバプテスマを受け、天からの声により「わたしの愛する子」と宣言を受けられました。そして、荒れ野で試練を受けた後、公生涯の歩みを始められたのです。それは、旧約時代のメシア到来の予告と無関係ではなく、先駆者であるバプテスマのヨハネの出現と、彼の逮捕という事件が深く関わっていました。「時は満ち、神の国は近づいた」。「時」という言葉は、ギリシア語のカイロス、単なる時間の流れの中の一点ではなく、新しい救済の歴史が人によってではなく神の主導によって始まった時代のことを意味します。マルコ福音書では、「神の子イエス・キリストの福音の初め」と書き始められているように、イエスさまが神の子であることを証明することにではなく、神の子であることを前提として福音を語ることに重点が置かれています。古代社会における福音は、戦いの勝利を知らせるものでしたが、イエスさまの福音はイスラエルへの神の約束の成就であり罪の赦しと救いの到来を意味していました。また、奇跡もその裏付けのように語られます。「悔い改めて福音を信じなさい」との勧めの言葉は、岩波訳が「回心せよ、そして福音の中で信ぜよ」と訳すように、悔い改めが、人間を源にするのではなく、神を源とし、神の福音の中で起こる恵みの業であることを指し示していると言えるのです。

## 周辺の地域から

ガリラヤは捕囚の時代から「異邦人のガリラヤ」（イザヤ8：23b）と呼ばれ、エルサレムの人々からは軽蔑され軽んじられた地域でした。ガリラヤは「周辺」（ヘブライ語でガーリール）という意味があり、そこは、旧約時代の南ユダ王国、エルサレムの人々からすれば、アッシリアやバビロニアに支配され、人種や宗教文化が交じり合った異教の土地でした。エルサレムの人々にすればイエスさまとその弟子たちは田舎者でありよそ者の存在です。それだけでも差別の目で見られ、その言動も蔑まれたのかも知れません。しかし、イエスさまはその場所から福音宣教を開始されたのです。そして、ガリラヤは、復活後のイエスさまが向かわれた場所、弟子たちを世界宣教へと派遣する地となりました。

## 小さな者たちと共に

ルカ福音書（3：23）によれば、イエスさまが宣教を始められたときはおよそ30歳の時であったと書かれています。一説によれば、教師ラビとして認められるのがその歳だと言います。また、ユダヤ教では弟子を希望する者たちが教師であるラビを選ぶ習慣があったようですが、イエスさまは自ら弟子たちを選ばれました。それは、日常生活をおくっている小さな者たち、ペトロとその兄弟アンデレは漁師出身であり「無学な普通の人」（使徒4：13）と呼ばれるような人たちでした。

## 主の招きに応じて

イエスさまは、ガリラヤ湖でシモンとシモンの兄弟アンデレが網を打っているのをご覧になりました。世の中には「言葉」によって劇的に人生を変えられる人が時々存在しますが、ここでもイエスさまの呼びかけ一つによって人生の転換が起こされた様子が記されています。シモンとその兄弟アンデレは網を捨て、そしてゼベダイの子ヤコブと兄弟ヨハネは父ゼベダイや雇人たちも舟に残してイエスさまの後について行ったと言います。彼らは何故イエスさまの招きに応え、すぐに、すべてのものを捨ててイエスさまに従ったのかは分かりません。しかし、ヨハネ福音書の「あなたがたがわたしを選んだのではなく、わた

準備のための聖書日課			
27日	㊦	イザヤ8:23後半	栄光に輝く異邦人のガリラヤ
28日	㊦	ルカ3:21～23前半	主イエス、三十歳のとき
29日	㊦	使徒言行録4:5～22	無学な普通の人の証し
30日	㊦	マタイ22:1～14	選ばれる人は少ない
31日	㊦	ヨハネ15:11～17	わたしがあなたがたを選んだ
1日	㊦	マルコ1:1～13	神の子キリストの福音の初め

しがあなたがたを選んだ」(15:16)との言葉にあるように、弟子たちの召命には、人間の側の主体的決断の前に、神の導きがあったことを忘れてはならないと思うのです。



### 成人科

●この2年間、私たちは新型コロナウイルスの脅威にさらされて来ました

が、同時にその出来事を通して信仰のみならず今までの生活すべてについて振り返らざるを得ない大切な機会にもなっているとと言えます。そして、それは終わった訳ではなく、今後も続いていく課題です。伝道を開始するにあたってイエスさまは、「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」と語られました。あなたは、新たな年を始めるにあたり、どんな思いをもってこの言葉を受け止めるでしょうか。

●「召命」という言葉は、神さまから召しを受けて献身することを意味し、牧師や説教者や伝道者となる人のための特有な言葉だと思ってしまいがちです。しかし本来は、すべての人に向けられた神さまからの問いかけではないでしょうか。福音の言葉を通して主イエスに出会い、救われた者として、「わたしについて来なさい」とイエスさまから呼び出されたとしたら、あなたはどのように応えるでしょうか。また、感染症が蔓延する中で、召しに応えた私たちは、どのように誰と生きることが求められていると思いますか？



# 福音のスタート

聖書 マルコによる福音書1章14～20節

暗唱  
聖句

イエスは、「わたしについて来なさい。人間をとる漁師にしよう」と言われた。  
マルコ1:17

40  
課

1月2日

「はじまり、はじまり」紙芝居屋さんが語り始めるように、マルコは福音宣教のスタートをイエスさまの言葉をもって開始します。「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」。

その頃、ユダヤはローマにしたがう小さな国にすぎませんでした。税金は重く、人々の暮らしは楽になるどころか、飢饉などの自然災害も起こり苦しみの中がありました。そのような中でバプテスマのヨハネが荒れ野に現れて罪の悔い改めによる人々の救いを説いていました。ヨルダン川に集まった大勢の人ごみの中に、イエスさまがおられました。そして、ヨハネからバプテスマを受けられたのです。すると、霊が鳩のように降って来て、天から「あなたはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」と声が聞こえました。イエスさまが神の子と宣言されたこと、それがすべての始まり、イエスさまご自身が福音の始めでした。

イエスさまは毎日多くの人と出会い、福音を語り、奇跡の業を行っておられました。お年寄りや子どもたち、女性や病人、あらゆる人に分け隔てなく福音の恵みを分かち合い、人々はその言葉と業に驚きを隠せませんでした。

そして、その日イエスさまはガリラヤ湖のほとりを歩いておられました。そこではシモンとシモンの兄弟アンデレが網を打っていました。見ていると、どうもその日は不漁続きで二人の表情は優れません。イエ



スさまは神の定めを感じて二人に語り掛けました。「わたしについて来なさい。そうすれば、あなたたちを人間を捕る漁師にしよう」。すると、驚いたことに、二人はすぐに網を捨ててイエスさまに従いました。また、ゼバダイの子ヤコブもその兄弟ヨハネも同じでした。彼らは父も雇人たちも舟に残してイエスさまについて行きました。

イエスさまの呼びかけは、漁師であった兄弟たちの心を強く捉えました。こともあろうに、彼らは職場放棄どころか、父親や雇った雇人たちへの責任も捨ててしまったのです。何が彼らをそれほどの決断に駆り立てたのでしょうか。一つには、彼らの置かれた社会状況がその背景にあったのかもしれませんが、イエスさまの呼びかけは、今の職業を捨ててもあまりあるほどの使命感を彼らに与えたのではないのでしょうか。「すぐに」という言葉に、それが表れています。

イエスさまの中に神が共におられる、このことこそ彼らにとっての善き知らせであり、神によって始められた救いの業を彼らが止めることはできませんでした。

# 福音のスタート



聖書

マルコによる福音書1章14～20節

暗唱  
聖句

イエスは、「わたしについて来なさい。人間をとる漁師にしよう」と言われた。  
マルコ1:17

## 聖書から…

「福音」って、教会以外ではあまり使わない言葉ですよ。 「善き知らせ」とも言われますが、自分の言葉で「福音」を説明するとしたらなんと言うでしょうか？ 考えてみましょう。 イエスさまは「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」と言いますが、その言葉が自分の心に響くことで「福音」になるのだと思います。 ペトロとアンデレにとってはイエスさまの「わたしについて来なさい。人間をとる漁師にしよう」という言葉が心に響いたはず。 どうしてこの言葉が彼らの「福音」になったのでしょうか。

たとえば当時の社会状況では子どもは親の家業を継ぐことが一般的でしたが、彼らは漁師に代わる自分の夢を抱いていたのかもしれませんが、しかし踏み出せなかったそのときに、イエスさまの招きの言葉が心に響いたのではないのでしょうか。 それはあなたがあなたらしく生きてよいという言葉として響いたのではないのでしょうか。 その福音は、彼らにとってまさにいのちの回復の出来事、まさに神の国が一方的に近づいて来た出来事として、彼らの心を突き動かすほどの喜びになったのではないのでしょうか。

## 分かち合おう

- イエスさまの福音は、ペトロとアンデレを突き動かす招きの言葉となりました。 同じようにイエスさまの福音は今も私たちの心にも響き、新たな歩みへと導くものであります。 私たちもまた色々なものに制限される中を生きており、自分の道を踏み出せないことがあります。 しかしそんな時、イエスさまの「わたしについて来なさい」という言葉は自由と解放を与える福音となり、「独りで頑張りなさい」ではなく、イエスさまが共に歩んでくださるという招きの言葉にも聞こえます。

- イエスさまの招きの言葉「わたしについて来なさい」とは、イエスさまに従っていくということです。 それはある意味自分の思いを捨てることであり、イエスさまが私たちの主になることです。 世界には色々な価値観があり、私たちは迷ったり揺られたりすることがあります。 時に自分が神のようになることさえあります。 しかしイエスさまに従っていくときにこそ、私たちはより自由になれるのです。「イエスさまに従う」とはどういうことか考えてみましょう。

# 福音のスタート

聖書 マルコによる福音書1章14～20節

暗唱 聖句 イエスは、「わたしについて来なさい。人間をとる漁師にしよう」と言われた。  
マルコ1:17

40課

1月2日

## 聖書から…

「あなたが必要」「一緒に行こう」と呼ばれるとうれしい気持ちになります。シモンとアンデレ、ヤコブとヨハネはガリラヤ湖という所で漁師をしていました。生活は貧しくて大変でした。夢や希望をもつことが難しい状況でした。そんな時に突然イエスさまに声をかけられました。「わたしについて来なさい。人間をとる漁師にしよう」と。人間をとる漁師ってどんなことをするのでしょう？イエスさまに呼ばれてどんな気持ちになったのでしょうか。なんだか分からないけどうれしく希望がわいてきたのです。すぐにイエスさまに従う決心をしました。

イエスさまに呼ばれることがうれしい、イエスさまに必要とされることがうれしいと感じることがありますか。イエスさまに呼ばれて私たちは今ここにいるのです。

## 活動①

### 「あなたが必要」

●準備●ボールまたは風船

- ①みんなで円になり内側に向いて座りましょう。
- ②「イエスさまが言っています。〇〇さんが必要」と言いながら、ボールまたは風船を渡していきます。
- ③名前を呼び合いながらボールや風船を投げて遊びます。

④イエスさまに呼ばれるうれしさを体験できるといいですね。

### ●オンラインの場合

- ①みんなそれぞれに同じくらいの大きさのボールを用意します。もしくは、新聞紙一枚を丸めてボールを作ります。
- ②「イエスさまが言っています。〇〇さんが必要」と名前を呼んでボールを上へ投げます。
- ③名前を呼ばれた人もボールを上へ投げてキャッチします。
- ④ボールをキャッチしたら次の人の名前を呼んでボールを上へ投げます。
- ⑤自分の投げたボールですが、名前を呼ばれた時には投げてもらった気持ちで受け取り、名前を呼んだ時にはパスする気持ちで投げてください。

## 活動②

## ワークシート

### 「イエスさまの宣教地図を作ろう」

地図に、場所や出来事の絵を○の中に描き加えて、置いていきましょう。

- Q1 イエスさまが生まれた場所はどこでしょう。
- Q2 イエスさまが育った場所はどこでしょう。
- Q3 イエスさまが宣教を始められた場所はどこでしょう。
- Q4 イエスさまが十字架に架けられた場所はどこでしょう。

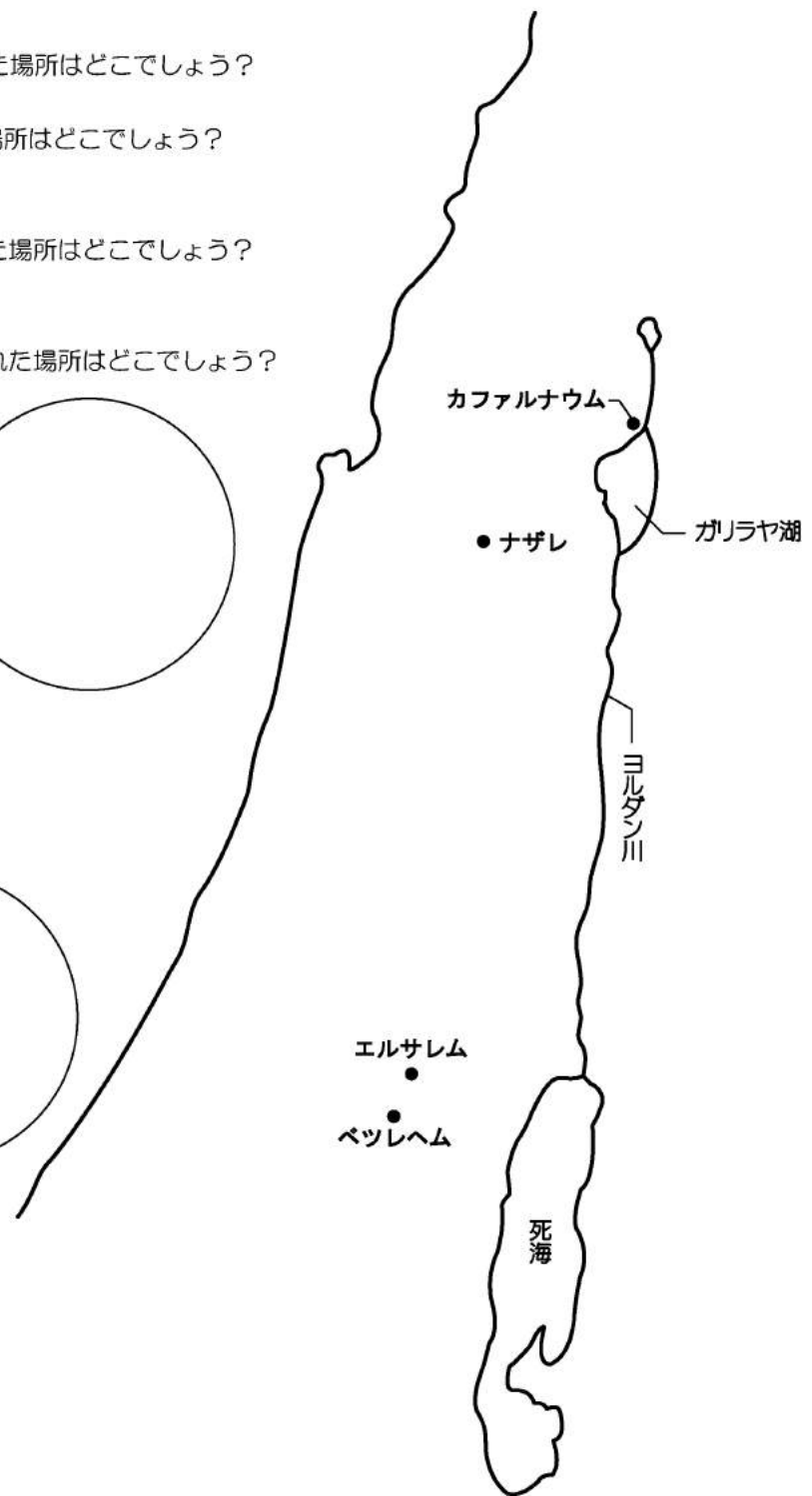
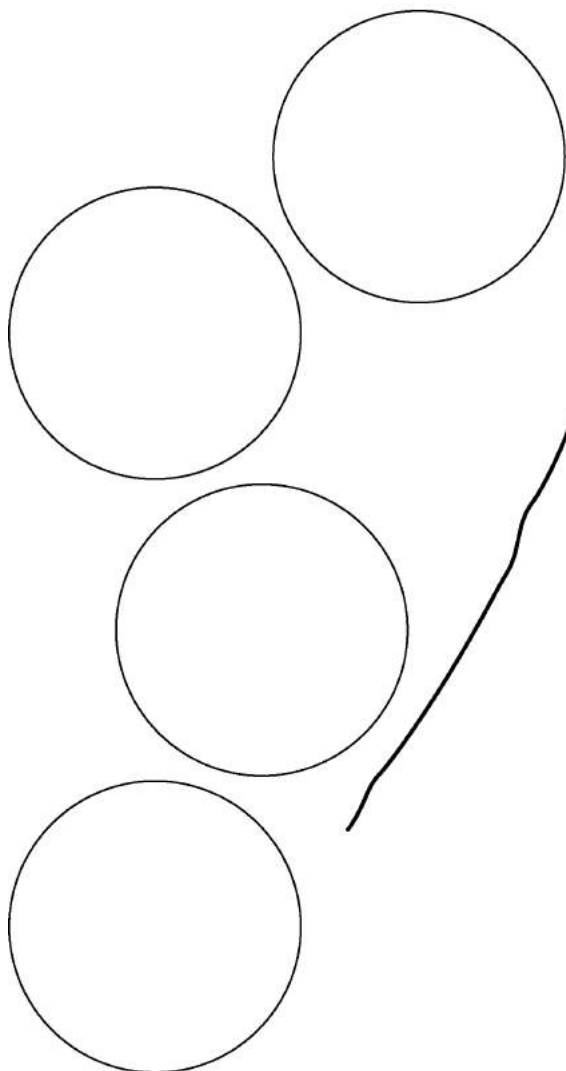
# イエスさまの宣教地図を作ろう



40課

1月2日

- Q1. イエスさまが生まれた場所はどこでしょう？
- Q2. イエスさまが育った場所はどこでしょう？
- Q3. イエスさまが  
宣教を始められた場所はどこでしょう？
- Q4. イエスさまが  
十字架に架けられた場所はどこでしょう？



# 罪人を招くために

聖書 マルコによる福音書2章13～17節

暗唱 聖句 わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招くためである。  
マルコ 2：17

41課

1月9日

## 主の眼差しの中で

イエスさまはガリラヤを巡り、再び湖に戻って来ました。そして通りがかりに徴税人<sup>ちようぜいにん</sup>でアルファイの子、レビに目を留められました。マタイ福音書では、それはマタイとなっていますが同一人物であるか否かは別にして、イエスさまが彼を弟子として招かれた理由はここでも分かりません。当時、徴税人は官吏<sup>かんり</sup>ではなく、一定地域で一定期間徴税の仕事をお願い負う者たちで、カファルナウムが貿易の要所であったことから徴収所では通行税と物品への課税の取り立てが行われていました。徴税人は、不当<sup>かじよう</sup>に過剰な税を取り立て、それに加えて異教徒との接触もあり、不浄<sup>ふじよう</sup>の者として軽蔑<sup>けいべつ</sup>嫌悪<sup>けんあく</sup>の対象だったようです。そんなレビにイエスさまは「わたしに従いなさい」と命じられました。徴税人レビにとってその招きは漁師と違って、万が一弟子をやめたとしても戻れる職業ではなく退路を断つことを意味していました。レビは徴税人として不正の富を得ていた日常の現場で、イエスさまの赦しと慈しみの眼差しに出会ったのです。

## 本当の奇跡

レビの家での食事がどのようなものであったのかは語りませんが、盛大であったことから、レビの悔い改めの大きさと喜びの深さが分かります。ユダヤ教のラビの教えによれば、徴税人が悔い改めるには、彼らが不当に取り立てた額にさらに5分の1を加えて民衆に返済しなければならないとの規定があったと

言います。本当の奇跡は、現象そのものよりも、人の生き方さえ変える内面の転換にあると言えます。ルカ福音書の徴税人ザアカイを思い起こさせます。

## 大勢の罪人と共に

レビの家には実に大勢の人がいて、その人々もイエスさまに従っていたと記されています。食事の席にはファリサイ派の人々も招かれていましたが、イエスさまの律法に対する自由な振る舞いは彼らにとっては大きなつまずきとなりました。彼らからすれば、徴税人や罪人たちは律法を守らない宗教的失格者であり、イエスさまと弟子たちは大勢の罪人の仲間と同じだったのです。

「医者が必要とするのは、丈夫な人ではなく病人である」とのイエスさまの言葉に含意<sup>がんい</sup>されているように、イエスさまの眼差しの中では、罪人とは単に律法を守らない人ではなく、神との生活から疎外<sup>そがい</sup>されている人でもありました。イエスさまの呼びかけは救いであり、それを分かち合うためには、癒<sup>いよ</sup>しの必要性の認識がなければなりません。自己正義の人は、その必要性を認識できないのです。ファリサイ派の人々は、人の目に正しく見える世界に生きることを選び、イエスさまの眼差しの中に生きることを選びませんでした。

## わたしが来たのは

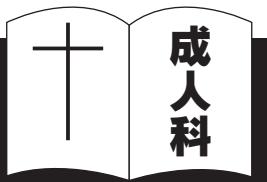
イエスさまはご自分がこの世に来られた理由を語られます。「わたしが来たのは、正し

い人ではなく、罪人を招くためである」との言葉は、イエスさまがキリストであることを意味しています。先立つ「中風の人の癒し」の箇所ではイエスさまは中風の人に、「子よ、あなたの罪は赦される」と言われました。するとそこにいた律法学者たちが「神を冒瀆している。神おひとりのほかに、いったいだれが、罪を赦すことができるだろうか」と心の中で考えました。イエスさまはその心を見抜いて「人の子が地上で罪を赦す権威を持っていることを知らせよう」と言って中風の人を起き上がらせたのです。

このことは、罪人を招き、赦すことができるのは「救い主」しかないことを私たちに知らしめます。そこにマルコの明確なキリスト論を見ることができます。しかしその告白は、ファリサイ派やヘロデ党との軋轢が深ま

準備のための聖書日課			
3日	㊦	マルコ1:35～39	ひとり祈られる主イエス
4日	㊧	マルコ1:40～45	主イエスの秘密
5日	㊨	ルカ18:9～14	義とされた徴税人
6日	㊩	テモテ1:12～17	罪人を救うために
7日	㊪	マルコ10:17～22	わたしに従いなさい
8日	㊫	マルコ2:1～12	罪を赦す権威を持つ方

り、イエスさまが、受難、すなわちご自身の死と復活について語り始められる時まで封印されていきます（8：31）。



## 成人科

● 徴税人レビは同胞のユダヤ人から税金を徴収し、敵であるローマや、ローマに加担していたヘロデ王に仕えていました。それ故に同胞からは「売国奴」として本来ローマに向けられるはずの恨みつらみを一身に背負っていたわけです。言わば、人間関係における板挟み状態です。今を生きる私たちも程度や質の違いはあるにせよ、板挟みに生きる苦しみがあり、それはあらゆる組織の中に存在しています。直接は自分のせいではないのに苦しみを覚えた経験はないでしょうか。そのような私たちをイエスさまは招いておられるのです。

● 「罪」をギリシア語でハマルティア(的外れ)と言うのは知られています。しかし、依然として「犯罪」的な意味合いで受け止められがちです。神の思いを知り、恵みを受けることよりも、自分の幸せを自分の力で得ようとするのが結果的に人間同士の争いや、地球の生態にアンバランスをもたらしてきたことを覚えます。いわば本質的に的を外した生き方を私たちはしていることとなります。本来いただくべき神の恵みを受けそこなっているとすれば、それこそ「罪」の状態にあると言えます。改めて「罪」とは何なのか考えてみたいものです。

# 罪人を招くために

聖書

マルコによる福音書2章13～17節

暗唱  
聖句

わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招くためである。  
マルコ2：17

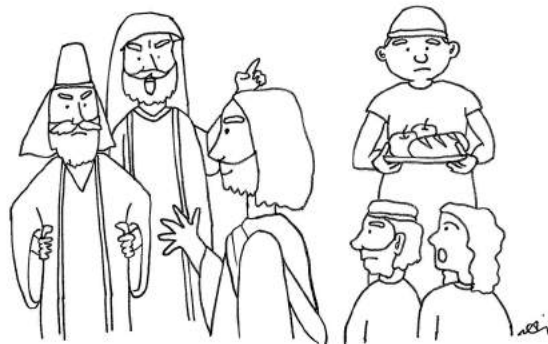
41課

1月9日

イエスさまは湖のほとりに出ていきました。そして、みもとに来る者は皆、一人として拒むことなく教えられたのです。そこには好みや差別はいっさいありませんでした。すでにイエスさまの弟子となっていたペトロやアンデレ、ヤコブとその兄弟ヨハネも一緒でした。

取税所を通りかかるとそこで忙しく税金の取り立てを行っているレビがイエスさまの眼に留まりました。彼はいつものように、町の外からやって来る商売人や旅行者から税金を集めていたのです。皆はレビが不当に水増しして税金を取り立てていることを知っていましたし、レビが領主ヘロデの手先であることもよく分かっていたのです。レビは税金の帳簿をつけながら、自分に向けられた眼差しに気が付きました。「ああ、また俺を馬鹿にして恨むような眼を向けているやつがいる」。そう思ってレビはその視線の方に眼を向けました。すると、その眼は彼を嫌悪するどころか、今まで見たことのないような優しく包み込むような眼だったのです。レビは驚きました。「いまだかつてこんな眼をした人を見たことがない。この眼は俺を拒絶していないし、否定なんかしていない…。」そう思った瞬間、その人はレビに思いもよらない言葉を投げかけたのです。「わたしに従いなさい」。

人々から軽蔑されていた徴税人の道をレビはなぜ選んだのでしょうか。それは、自分で選んだ道ではなく、そうならざるを得な



い事情があったのかも知れませんが、彼の心の内は分かりませんが、彼に向けられた眼差しの主、イエスさまはありのままの彼を受け入れ、共に生きるようにと招いてくださったのです。レビは生まれて初めて自分の生き方が神さまから問われていることを知って、応え立ち上がったのです。

ペトロたち、他の弟子たちもはじめはレビを軽蔑していたことでしょう。でも、自分たちもファリサイ派の律法学者たちから見れば同じ罪人で仲間でした。人から奪う者だったレビが人に与える者となった今、彼が招いた食事の席は罪人たちで一杯でした。でも、残念ながらファリサイ派の律法学者たちはその輪の中に入ることはありませんでした。イエスさまはそんな彼らに言われました。「医者が必要とするのは、丈夫な人ではなく病人である」。それは、彼らへの皮肉なんかではなく、美味しい食事を一緒にいただくための招きであり、気付きを促すイエスさまの配慮の言葉だったのではないのでしょうか。

# 罪人を招くために



41課

1月9日

聖書

マルコによる福音書2章13～17節

暗唱  
聖句

わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招くためである。  
マルコ2：17

## 聖書から…

イエスさまはなんでレビの姿に目を留めたのでしょうか。たとえば人は心配や怒りなどの感情が顔の表情や体の仕草に現われるように、心にあることが外面に出るものです。もしかしてレビは馬鹿にされる事に慣れてはいたけれども、本当は傷ついていたことをイエスさまは見抜いたのかもしれませんが。

レビが徴税人ちようぜいにんをしていた理由はわかりません。でもその仕事を続けることはまさに十字架を背負うようなものだったと思います。後ろ指を指されるたびに泣きそうになり、次第に周囲に心を閉ざしていく情景が浮かびます。

そんな中イエスさまは眼差しを彼に向け、声を掛けました。「わたしに従ってきなさい」。この言葉にはレビの心の痛みへの共感が伺えます。レビの喜びはどれほどのものだったのでしょうか。彼がイエスさまを食卓に招いていることを考えると、彼の冷えきった心は温かく包み込まれたのだと思います。イエスさまは「正しい人」から排除されていた罪人に伴い、招かれました。それは「徴税人や罪人、正しい人」というレッテルで人を判断するのではなく、むしろそのレッテルを剥がし、その人固有の人格や心を見つめていくようにと招いているように思えます。

## 分かち合おう

- 聖書の世界に徴税人への「職業差別」があるように、現代社会にも職業差別があります。それは差別される個人にではなく差別を生む社会の仕組みに問題があるように思います。私たちは「個人」を見ずに「属性」だけで人を判断してしまわないでしょうか？ そんな偏見が正しいはずはありません。だからイエスさまは私たちが「色眼鏡」を持っていることに気付かせ、その人自身と出会っていくように招くのです。私たちの中にある差別意識に気づいてそれをなくすためにはどうしたらよいか、イエスさまの言葉から考えてみましょう。
- イエスさまは「わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招くためである」と言われました。「罪人」と聞くとどんな人をイメージするのでしょうか？ 自分とは関係がないと思うのでしょうか？ 実は聖書の語る「罪」とは犯罪や律法違反のことではなく、そもそも神さまから離れて「ハマルティア（的外れ）」に生きることです。私たちはどうでしょうか。反対に、神さまを信じていれば「正しい」のでしょうか？ イエスさまから見た「正しさ」と「罪」とは何かを話し合ってみましょう。



# 罪人を招くために

聖書

マルコによる福音書2章13～17節

暗唱  
聖句

わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招くためである。  
マルコ2：17

41課

1月9日

## 聖書から…

レビは「あの人はずるい」「あの人はエラそうな人」「あの人が嫌い」「あの人は関わりたくない」と、みんなから嫌われていました。そんなレビにイエスさまは「わたしに従いなさい」と声をかけました。レビはどんな気持ちになったでしょう。とっても驚いただろうなと思います。うれしかったらうなと思います。

レビの家でイエスさまが食事をしていると、お金を取り立てる仕事の徴税人や罪人と呼ばれる人たちが一緒に食事をしていました。それを見た人たちは、イエスさまが嫌われている人たちと一緒に食事をしているので悪口を言いました。イエスさまは人の心を見ています。イエスさまを必要としている人にイエスさまは出会ってくださいます。そして声をかけてくださるのです。

## 活動①

### 「一緒に食事を」

●準備●紙コップ、小さなボールか丸めた折り紙

- ①一人一つ紙コップを持ちます。食べ物に見立てたボール、もしくは丸めた折り紙などを用意します。
- ②リーダーが「一緒に食べよう」と言って紙コップから紙コップにボールを渡します。
- ③ボールをもらった人は「一緒に食べよう」と言って次の人に渡します。
- ④紙コップを一人二つずつにします。右手側のコップにボールを入れます。

⑤円になるように座ります。

⑥「一緒に食べよう」と言って右側のボールを右側に座っている人の紙コップに入れます。同時に左側の紙コップで左側の人からのボールを受け取ります。

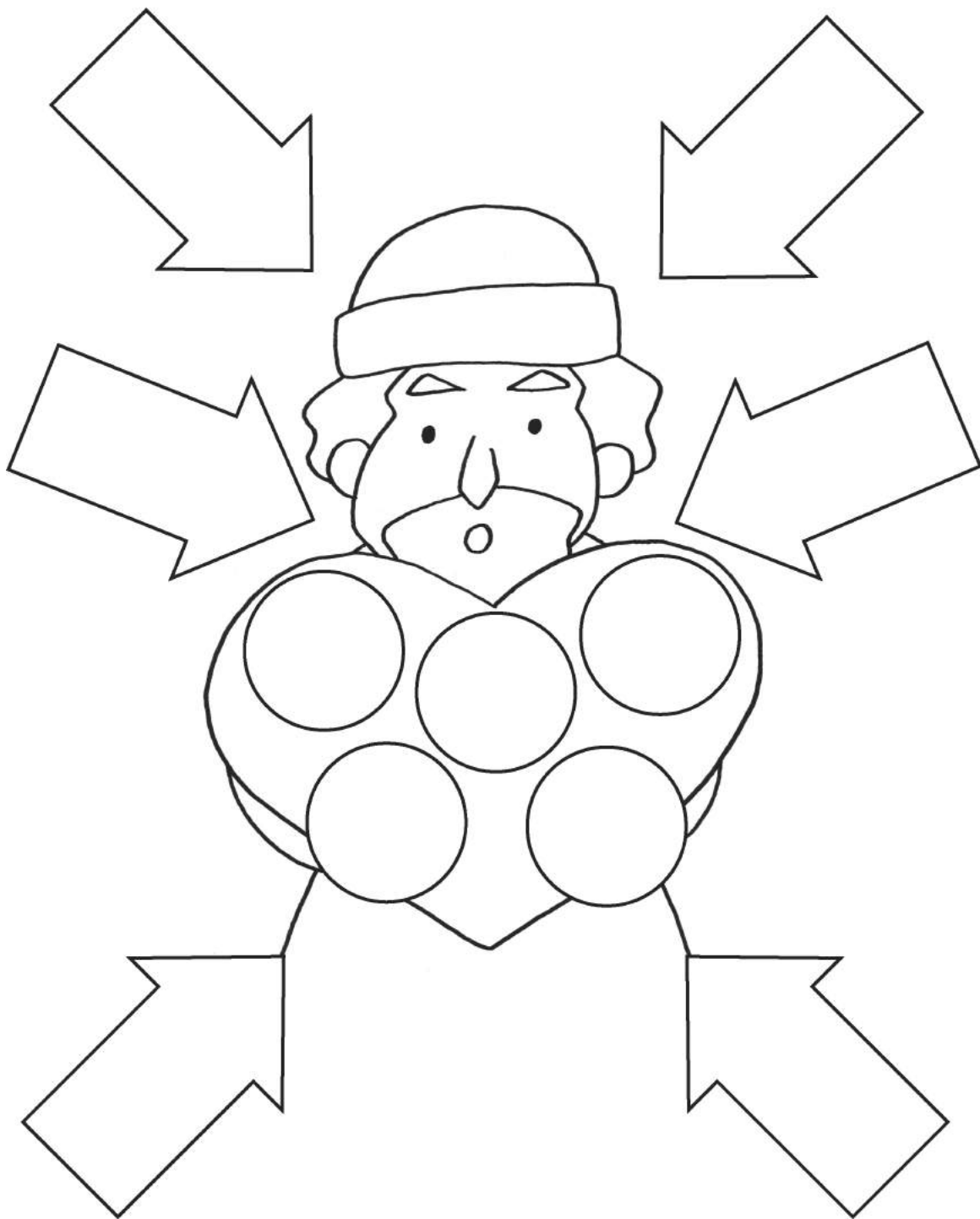
\*みんなで食事をするのは楽しいですね。イエスさまから「一緒に食べよう」と言われたらどんな気持ちでしょう。想像してみましょ。たとえば、一緒に食事ができなくても、オンラインで顔を合わせることがもできます。それぞれお菓子や飲み物を持ち寄ってお話しながら食べてみてもいいですね。

## 活動②

## ワークシート

### 「レビの心の中は…」

- ①レビの心の思いを考えてみましょう。ワークシートの○の中に、レビの心の思いを書いていきます。
- ②レビは人からどのように見られていたでしょうか。人からの評価を矢印の中に書いて切り取り、レビの上に置きます。
- ③レビの心の思いと人の評価を見て、どんなことを感じますか？
- ④では、私たちの心にはどんな思いがあるでしょう？ イエスさまを必要としているのでしょうか？ 『大切なきみ』（マックス・ルケード作のいのちのことば社フォレストブックス）という絵本を知っていますか？ 小人たちはダメ印や星印を付け合っていました。イエスさまはダメ印や星印ではなくその人の心の思いを見てくださいます。



## 受け入れられないイエス

マルコはイエスさまの幼少期のことや生育歴については一切触れません。ナザレという片田舎で育ったイエスさまは、成人して公生涯を始められました。イエスさまが再びカファルナウムに帰ってきた時のことです。神の国の福音を語り始めたイエスさまのことを故郷の人々は心から喜ぶことができず、いぶかしく思い、悪口を言い、制止しようとさえしました（3：20 以下参照）。6章では、イエスさまの生い立ちを知る故郷の人々が総じて「イエスにつまずいた」（6：3）ことが記されています。このような中、家族（母や兄弟たち）は人々の反感に気を遣い、イエスさまの言動に気をもんでいたと思われる。

## わたしの母、兄弟、姉妹とは？

イエスさまの母はマリアであることは間違いありません。しかし、イエスさまの兄弟たちというのは誰でしょう。いくつかの説があり、ヨセフと先妻との息子たちであるという説、イエスさまの従弟たちという説もあります。前述の場合、ヨセフは再婚となり、マリアとの結婚後は子どもがなかったこととなります。その説にはマリアの生涯処女性を擁護する意図があるにせよ、イエスさまの誕生後、二人には何人かの子どもたちが与えられたと考えるのが自然な解釈です。身内の者たちも故郷の人たちもイエスさまのことを、血のつながりに定義づけされた「家族」関係のことしか思いつくことはできなかったのです。そ

の家族関係の枠にはめ込んでイエスさまを否定しようとしたのです。

しかし、イエスさまにとっての家族とは、血縁や血統ではなく、救い主としてのイエスさまを受け入れ、イエスさまと共に生き、イエスさまのように神のみ旨に生きる者でした。

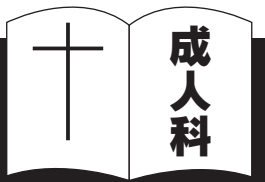
## 誰もが皆、母、兄弟、姉妹？

父祖アブラハムの時代、そして民族として形を成してきたイサクやヤコブの時代、家父長制度は一族が生き残っていくために必要なものでした。また、エジプトにおける奴隷の時代、出エジプトを果たし荒野で放浪した40年もの長い生活やカナンでの定住生活でも彼らは民族としてのアイデンティティを守り抜くために族長を中心とした家父長制度は無くしてはならないものでした。それは、アブラハム一族に限らず、古代社会ではどこにでも見られた男女不均衡の上に築かれた制度であったと言えます。そして、イスラエルはサウルによって王国となり、ソロモンの時代には最盛期を迎えますが同時に分裂に向かっています。そこには家族の分断があり王国の弱体化がありました。それは、アッシリアやバビロニアによる支配へとつながり、遂には二つの王国ともに崩壊してしまったのです。そんな時代を経てユダヤ人をはじめ初代教会の人々は、ローマによる支配を受け、いよいよ民族の解体の危機に直面し、民族のアイデンティティも失われようとしていたと言えます。そのような中、イエスさまの問いかけは、家

族の定義を超えた民族としての彼らの存在意義さえ問うものだったのかも知れません。

再び今日の箇所を目を向けましょう。イエスさまは、周りに座っている人々を見回して言われました。「見なさい。ここにわたしの母、わたしの兄弟がいる」。イエスさまとそれらの人々の間には、血縁の絆の家族よりもはるかに深い霊的な絆がありました。このイエスさまにある「家族」は、12弟子に限らず、神のみ心に適うすべての人が含まれているのです。当時のマルコ福音書の読者、特に罪人や徴税人、イスラエルの家族と呼ばれなかった人々には、その意味が良く理解されたことでしょう。そこには、迫害や差別によって壊された家族関係の代わりに血肉によらない主イエスにある赦しと解放によって結ばれた神の国の新しい家族関係が始まっていたからです。

準備のための聖書日課			
10日	㊦	マルコ2:23~28	安息日は人のために
11日	㊧	マルコ3:13~19	使徒と呼ばれた十二人
12日	㊨	創世記9:12~17	虹の契約
13日	㊩	エフェソ2:14~22	わたしたちは神の家族
14日	㊪	マルコ6:1~6前半	この人は大工ではないか
15日	㊫	マルコ3:20~30	誰が主イエスを知るか



## 成人科

●今まで、「家族」という定義は、婚姻こんいんによって成立した夫婦を中心に、血

縁や精神的な絆でつながって生活する集団だと理解されて来ました。しかし、今や様々な形で構成される「家族」や、性の多様性が認識されるようになり、それまで疎外されてきた少数者の存在が、家族のあり様に新たな視点を与えつつあります。

また、異種家族としてのペットの動物たちも共に生きる大切な家族と考える人もいます。それは、人間中心主義により生物の多様性を理解することなく、種の絶滅や環境破壊を進めてきた反省からのもので、神学界では、創造物語の読み直しが求められているといえます。神の祝

福は、人間のみならず被造物全体に及ぶものとの理解がなされつつあります。あなたにとって「家族」とは誰のことでしょうか。

- 近年、老々介護や様々な年代で一人暮らしの方々も増え、現代ゆえに顕在化ひんざいかした家族の課題があります。また、コロナウイルス感染拡大の影響を受け失職し住む場所を失う方々も増えていると聞きます。イエスさまはご自分の周りに座っている人々を見まわして、「ここにわたしの母、わたしの兄弟がいる」と語られました。私たちの周りにいる人々とは誰のことでしょうか。

# ここにわたしの家族がいる

聖書

マルコによる福音書3章31～35節

暗唱  
聖句

神の御心を行う人こそ、わたしの兄弟、姉妹、また母なのだ。  
マルコ3:35

42  
課

1  
月  
16  
日

イエスさまはガリラヤを歩き巡り、行く先々で大勢の人々に福音を宣べ伝えていました。弟子も12人に増え、一旦ご自身の故郷に帰って来ました。そこにもついて来た大勢の人々がいて、イエスさまたちは食事をする間もありません。すると、そこに「あの男は気が変になっている」という噂を聞いて心配になった身内の人たちがイエスさまを取り押さえて来ました。エルサレムから下って来た律法学者たちも、「あの男はベルゼブルに取りつかれ、悪霊の頭かしらの力で悪霊を追い出している」といいがかりをつけていたからです。しかし、「大工のヨセフの息子が、大先生になって帰ってきた」と、皆驚くやら戸惑うやら、あまりに大勢の人々が集まったので、家族さえ近づけない状態でした。そこで、イエスさまの母と兄弟たちは人をやって呼び寄せたのです。「イエスさま、ご覧ください。あなたのお母さんと兄弟姉妹たちがあなたを探しておられます」。するとイエスさまは思いがけないことを言いました。「わたしの母、わたしの兄弟とはだれか」。

それは、イエスさまが血縁関係を否定しているのではなく、「わたしを家族として探し求めている人はだれか」という、人々への問いかけであったと言うこともできます。イエスさまは、心配して会いに来てくれた肉親とすぐにでも面会したかったに違いありません。しかし、神さまからご自身に与えられた働きを全うすることを優先さ



れたのです。周りに座っている人々は、イエスさまによって癒され、赦された者たちでした。もとより彼らは、イエスさまとの血のつながりはなく、ただイエスさまを神が遣わされた方と信じ、従って来た者たちでした。そんな彼らを指してイエスさまは、「見なさい。ここにいます」と言われたのです。そこに、ユダヤ社会の常識を超えた新しい家族の創造がありました。

そして、それに続きイエスさまは、「神の御心を行う人こそ、わたしの兄弟、姉妹、また母なのだ」と言われます。当時の社会も、今と形に違いはあれ、「家族」の問題はあったと思われます。それは、どの国、どの時代でも見られる、平凡であっても最も重要で困難な、私たちが向き合わなければならない問題なのです。だからこそ、イエスさまがその場にいたすべての人々に言われたその言葉は、今を生きる私たちに対して向けられたものと言えます。イエスさまの言われる「家族」の意味を今一度考えてみたいものです。

# ここにわたしの家族がいる

聖書

マルコによる福音書3章31～35節

暗唱  
聖句神の御心を行う人こそ、わたしの兄弟、姉妹、また母なのだ。  
マルコ3:35

42課

1月16日

## 聖書から…

「周りの人に迷惑をかけてはいけません」と聞くことがあります。マリアがイエスさまのところに来たのは、「あの男は気が変になっている」と噂されていた息子を引き取る「親の責任」を果たすためでした。でもそれは「子の自由」を尊重するものではなかったようです。ここでは母も子も、社会に抑圧されているかのようです。

イエスさまは「わたしの母、わたしの兄弟とは誰か」と言われ、家族とはどういう関係であるかを問いかけます。家族には文化や民族的な背景などから色々な形があると思います。でも大切なことは「家系」や「親のメンツ」、「社会の秩序」を守るために子のいのちが存在するわけではないことです。

イエスさまは「ここにわたしの母、わたしの兄弟がいる」と言い、血筋や文化に拠らない家族像を示されました。その接点は神のみ心を行うことです。神のみ心とは、神が私たち一人ひとりに与えられた固有のいのちを生きていくことであると思います。イエスさまが示されたのは、個々人の主体的で自由な選び取りを尊重し共に喜び、生きようとする人の神の家族でした。

イエスさまは「わたしはすべての人のホーム（居場所）になる」と宣言しておられるように聞こえます。

## 分かち合おう

- 自分を心配して来てくれる家族がいることはありがたいことだと思います。でも、家族が来てちょっと困る場合もありますよね。たとえば親が学校まで来たとしたら、思春期にはちょっと恥ずかしいと思うかもしれません。まして青年期にはどうでしょうか。人を送ってイエスさまを呼ばせたマリアには配慮も感じられますが、本当に尊重すべきは子どもの自由です。子の自由を信頼し尊重することが、親子の信頼関係作りにつながると思います。それでは、皆さんは家族にどのように自分を尊重してもらいたいと思いますか？
- 家族関係の多様化が進む中で、家族内での抑圧や孤立も増えています。生活保護を受ける一番のハードルが「家族照会」です。「家族に心配をかけたくない、迷惑をかけたくない」と思うことがあります。でも「助けて」と言える関係が私たちには必要です。イエスさまの元に来た人々は、家族に受け入れられなかった人たちだったのかもしれませんが。イエスさまはそんな人々のホーム（居場所）となっておられました。教会は「神の家族」とも言いますが、どんな家族関係をイメージしますか。

# ここにわたしの家族がいる

聖書 マルコによる福音書3章31～35節

暗唱聖句 神の御心を行う人こそ、わたしの兄弟、姉妹、また母なのだ。  
マルコ3:35

42課

1月16日

## 聖書から…

「イエスさまの話を聞きたい、癒してほしい、一緒にいたい」とたくさんの方がイエスさまの所に集まってきました。それを見ていた人たちの中には、「あの男は頭がおかしくなったのではないか」「悪霊にとりつかれている」とイエスさまのことを悪く言う人たちがいました。イエスさまが悪く言われているのを聞いて、イエスさまの母マリアと兄弟たちがイエスさまの働きをやめさせようとしてやって来ました。

イエスさまの働きを理解しない家族に対してイエスさまは、「神の御心を行う人こそ、わたしの兄弟、姉妹、また母なのだ」と言いました。家族はびっくりしてショックを受けたかもしれません。でも、「神の御心を行う人」になってほしいというイエスさまの言葉の意味を理解して母マリアはイエスさまに従いました。また、イエスさまの働きを理解することができなかった弟ヤコブは、復活のイエスさまに出会ってイエスさまを伝える使徒となりました。イエスさまは、神のみ心を行うすべての人を「家族」と呼んでくださいます。私たちも神のみ心を行いたいと願うならイエスさまの家族です。イエスさまの招きに一緒に応えていきたいと思います。

## 活動① ワークシート

### 「ここにわたしの家族がいる」

今日の暗唱聖句を覚えましょう。  
穴埋めをして暗唱聖句を完成させます。

「〇の〇〇を行う人こそ、わたしの〇〇、〇〇、また〇なのだ。マルコによる福音書3章35節」

暗唱聖句の周りの枠に色を塗って、持って帰りましょう。

## 活動② ワークシート

### 「ここにいる家族」

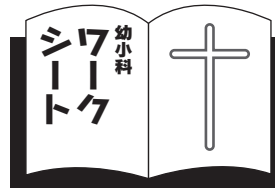
教会の集合写真があれば用意しましょう。教会の人の名前を知っているでしょうか。人数が多い教会ほど、みんなの名前を覚えることが難しくなるかもしれません。ここに集っている家族の名前をみんなで覚えましょう。

教会の人たちが写っている写真を集めます。大きな紙に教会の絵を描いて、その中に顔写真を貼ります。ワークシート下にある吹き出しに名前の他に好きな物や好きな聖句などをご本人に書いてもらうのもいいですね。無理はしないようにしましょう。

### ●オンラインの場合

家にある教会の写真を見せ合って「これ誰だ？」クイズをするのも面白そうですね。

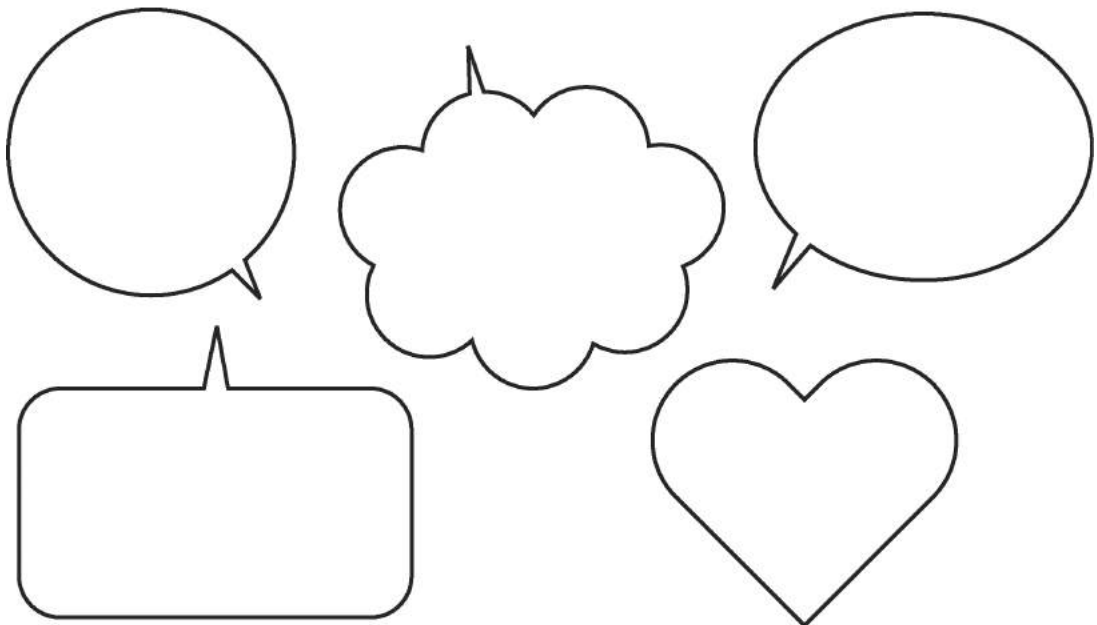




「 ○ の ○ ○ を  
 行う人こそ、  
 わたしの ○ ○ 、 ○ ○ 、  
 また ○ なのだ。」

マルコ 3 : 35

「 ここにいる家族 」





# 五つのパンと二匹の魚

聖書

マルコによる福音書6章30～44節

暗唱  
聖句

そして、パンの屑と魚の残りを集めると、十二の籠にいっぱいになった。  
マルコ 6 : 43

43  
課

1月  
23日

## 深く憐れんで

イエスさまの福音宣教の旅は忙しい毎日だったことでしょう。ある村に差し掛かった時、イエスさまは弟子たちを二人ずつ組にして遣わされました。そして、帰って来た弟子たちは自分たちが行ったこと、教えたことを残らずイエスさまに報告しました。みんなで分かち合っていたのです。イエスさまは語るだけでなく、良く聴いてくださる方でした。そして、人の働きをねぎらう方でもあったのです。それは、人間の肉体的な弱さにも配慮し、育てていくという現代のリーダーにも通じる姿です。イエスさまは、疲れた弟子たちに、舟に乗って人里離れた所で休むように指示されました。しかし、群衆はそれに気付き、一行の後を追い、先回りして待ち受けていました。イエスさまは、飼い主のいない羊のような有様を見て深く憐れみ、いろいろと教え始められました。イエスさまはこの時、何よりもまず人々の霊的な欠乏に同情し、教えられたのです。イエスさまは今を生きる私たちの霊的飢え渇きにも憐みの眼差しを向けておられるのではないのでしょうか。

## あなたがたが与えなさい

日が暮れ夕食時となった時、弟子たちは、人々が自分たちで近くの里や村へ行き食料を調達させようとイエスさまに提案しました。これに対し、イエスさまは「あなたがたが彼らに食べ物を与えなさい」とお答えになりました。弟子たちは驚き、即座に「わたしたち

が二百デナリオンものパンを買って来て、みんなに食べさせるのですか」と反論しました。それは「無理です。不可能です」と言っているのと同じです。二百デナリオンという大金を彼らが持っているはずありません。それにいったい何処に行けば、それほどのパンを手に入れることができるでしょう。しかし、イエスさまは今持っているものを見出すようにと弟子たちに勧めます。弟子たちはイエスさまが言われた通り、人々が持っているパンの数を調べて報告しました。「五つあります。それに魚が二匹です」。それを元に、弟子たちは大勢の人々を養うことになります。イエスさまは私たちの手にあるものから奇跡の業を起こされるのです。

## 青草の原で

イエスさまは弟子たちに、皆を組に分けて、青草の上に座らせるようにお命じになりました。「五千人の給食」の奇跡は、詩編 23 編の「主はわたしの羊飼い」という歌を思い起こさせます。イスラエルの民を養い、導く羊飼いの到来の知らせです。「主はわたしを青草の原に休ませ憩いの水のほとりに伴い、魂を生き返らせてくださる」(詩編 23 : 2, 3)。まさに私たちの霊肉を満たし養ってくださる救い主が人として来られたのです。まことの救い主は、羊たちを休ませ養う羊飼いなのです。

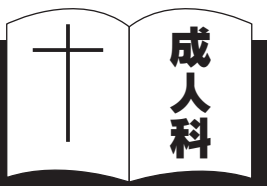
## 天を仰いで賛美の祈りを唱え

イエスさまは天を仰ぎ、賛美の祈りを唱え、パンを裂いて弟子たちに渡しては配らせました。それはイスラエルの民の普通の食事の所作であり、特別なことではありません。しかし、この出来事の重要性は、そこにいた飢え渴くすべての人が食べて満腹し、パン屑と魚の残りを集めると、十二の籠にいっぱいになるほどに満たされたということなのです。マルコは単にパンや魚が増えたことを強調したいのではなく、主イエスが人々の霊肉を養ってくださる神の子であること、そして飼う者のない羊のような人々の飼い主であることを証しするのです。

また、この物語は、受難と復活以外に共通して四福音書に記録された唯一のもので、そして、様々な解釈がなされて来ました。だ

準備のための聖書日課			
17日	㊦	マルコ4:35～41	なぜ、こわがるのか
18日	㊧	マルコ5:21～34	あなたの信仰があなたを救った
19日	㊨	マルコ5:35～43	少女よ、起きなさい
20日	㊩	エゼキエル 34:11～16	弱ったものを強くされる主
21日	㊪	詩編23:1～6	主は羊飼い
22日	㊫	マルコ6:6後半～13	主に遣わされて生きる

からこそ、この物語は、どの時代にあっても、主イエスこそ、パンを取り祝福し命の糧を与えてくださる方であり、その方を信じ分かち合って生きることの大切さを伝え続ける奇跡の物語と言えるのです。



● 「五つのパンと二匹の魚」の物語は、信仰の大切な部分を成すものと言

えます。それ故に、様々な解釈や理解があるのも事実です。それを「奇跡」と捉えるのか、何かを伝えるための「象徴」とみなすかで解釈は違ってきます。ただ、私たちにとっての信仰の土台は、「奇跡」そのものではなく、主イエス・キリストによる救いにあり、み言葉にあることに違いはありません。「五つのパンと二匹の魚」の物語を通して、どのように「奇跡」を受けとめ、なぜそのように考えるのか分かち合ってみるのは大切なことだと思います。

● 新型コロナウイルス感染拡大対策で「主の晩餐」を自粛した教会も多いと思いますが、主のパンと杯を分かち合えない辛さやもどかしさはあったにしても、その大切さを再認識する機会にもなったはずです。「五つのパンと二匹の魚」は直接的に「主の晩餐」を定義づけたり、象徴するものではありませんが、この2年間、「主の晩餐」をあなたの教会ではどのように捉え、どのようにして来られたでしょうか。分かち合ってみましょう。

# 五つのパンと二匹の魚

聖書 マルコによる福音書6章30～44節

暗唱 聖句 そして、パンの屑と魚の残りを集めると、十二の籠にいっぱいになった。  
マルコ6:43

43  
課

1月  
23日

伝道のために周辺の村々に派遣された弟子たちが帰って来ました。一日中歩き回って皆疲れていましたが、自分たちがそこでいき、教えたことを一つ残らずイエスさまに報告しました。そんな彼らの話をイエスさまは熱心に聞いてくださいました。そして、弟子たちをねぎらうように「人里離れた所に行って、しばらく休みなさい」と勧めました。そこで、皆はイエスさまに言われた通り、舟に乗って離れた場所へと向かいました。人々もそれに気づいて彼らを追いかけてきました。その様子を見ていたイエスさまは、人々がそれほどまでに神さまの癒しや慰めを求め、みことばに飢え乾いていることを知り、憐れんでいろいろと教え始められたのです。どれほど、人々は救いや慰めを求めていたことでしょうか。人々は熱心にイエスさまのことばに聞き入りました。その後、弟子たちは日が暮れて来たことに気が付き、夕食の心配をし始めます。そして、イエスさまに、人々の夕食について相談をしました。しかし、驚いたことにイエスさまは、弟子たちに皆の食事の準備を命じられます。弟子たちは、自分たちにはできないと断りました。二百デナリオンものパンが必要だと答えたのは彼らの言い訳です。

すると、イエスさまは弟子たちにできることを命じました。人々の持っているパンはどれだけあるか、調べて来ることです。何千人もの人たちからそれを確かめるのは



大変だったことでしょう。でも誰も持っていないと言うのです。そんな中から何人かの人たちが正直に持っていたパンや魚を差し出します。調べ回ってようやく集まったのが五つのパンと二匹の魚でした。弟子たちは心の中で思ったでしょう。「大勢の人たちがいるのに、こんなわずかなパンと魚が何になるだろう」。しかし、イエスさまは何も気にせず、五つのパンと二匹の魚を取り、天を仰いで賛美の祈りを唱え、パンを裂いて、弟子たちに渡しては配らせ、渡しては配らせたのです。弟子たちは不思議でしたが、イエスさまがおっしゃった通り人々に配ると、それは皆に行きわたりました。弟子たちは、イエスさまに命じられた通りにしただけです。皆も受け取ったパンと魚をお腹いっぱい食べただけで、それがどこから来たのか知りませんでした。そして、皆満腹し、沢山のパンくずと魚が残ったのです。どのようになさったのかは分かりませんが、ただ言えることは、イエスさまがそれをなさったということだけでした。

# 五つのパンと二匹の魚



聖書

マルコによる福音書6章30～44節

暗唱  
聖句

そして、パンの屑と魚の残りを集めると、十二の籠にいっぱいになった。  
マルコ6:43

## 聖書から…

この物語を読むたびに「パンの大きさはどうだったのだろう」とか「この魚って鯨だったのかなあ」とイメージします。もちろん人々の持ち合わせの食事だったわけですから、そんな大きなものであったわけではないでしょう。じゃあいったいどうやって増えたのでしょうか。物質は分けたら減るだけですから不思議なお話です。もしかしてこれはパンと魚が増えるお話ではなく、神さまの恵みが広がるお話なのかもしれません。

「5つのパンと2匹の魚」だけで、男性だけで5000人のお腹を満たせると思う人はいませんよね。弟子たちも「200デナリオンものパンがなければ、これっぽっちじゃどうしようもない」と思っています。こんな取るに足りないもの、誰が差し出したのでしょうか。私なら出すのさえ恥ずかしいし、自分の分として隠しておきたくなります。

でもイエスさまはこれを感謝して受け取られました。そこから奇跡が始まっていったのです。もしかして奇跡とは、私たちがちっぽけで何の役にも立たないと思う小さなものでも、イエスさまに用いてくださいと献げる思いに、他の人の心が動かされることなのかもしれません。それが5000人のお腹も心も満たす出来事になったのではないのでしょうか。

## 分かち合おう

- 「5つのパンと2匹の魚」が取るに足りないものだと思うように、私たちのいのちも小さなものでなにもできないと思うこともあるかもしれません。でもイエスさまはそんな小さなものでも献げてみたら奇跡が起きるよと言っているように思います。絵本『クリスマスのかね』（原作：レイモンド・M・オールデン 教育画劇）では、神はその人が献げた物の価値や大きさではなく、献げようとするその心を喜んでいます。「奇跡」とは、人の思いに自分の心が動かされることではないのでしょうか。他人の思いに心が動かされたことはありますか？
- 食事をするとき食前の感謝の祈りをします。神さまへの感謝とは、この食事も神さまが分かち合ってくださいという恵みへの応答であります。私たちはその恵みを誰と分かち合っているのでしょうか。その恵みを独り占めしてはいませんか。近年、食事が食べられない子どもたちのために「子ども食堂」やそれを支える「フードバンク」などの活動があります。与えられている食べ物を分かち合うために、直接ボランティアできなくても多様な支援の在り方が出ています。今、自分にできることを探すことから奇跡が始まっていくのではないのでしょうか。

# 五つのパンと二匹の魚

聖書

マルコによる福音書6章30～44節

暗唱  
聖句

そして、パンの屑と魚の残りを集めると、十二の籠にいっぱいになった。  
マルコ6：43

43  
課

1  
月  
23  
日

## 聖書から…

何日も食べないで、おなかがぺこぺこになったことがありますか？ 世界中には食べ物が無くて苦しんでいる人がたくさんいます。私たちの周りでも、毎日3回の食事を食べることができなくておなかをすかせている人がいます。それなのに、食べきれないほどの食べ物を買ってしまい捨ててしまう人もいます。最近では、「フードバンク」と言って、スーパーなどで売れなくなった食品を集めて必要な人に届ける活動が行われています。食べ物を必要としている人に届け、捨てられる食べ物を減らす取り組みです。

イエスさまが食べ物を分けられたように、みんなが満腹になるように、食べ物が分かち合われる世界になるようにと願います。私たちにできることを考えてみましょう。私たちは食べ物だけではなく、イエスさまの言葉で元気をいただきます。イエスさまの言葉を届けることで、元気や励ましを一緒にいただきたいですね。

## 活動①

### 「分けっこできるかな？」

●準備●年齢に応じた個包装の小さなお菓子、かご二つ

- ①お菓子を一つのかごに入れます。
- ②クラスで一番小さいメンバーに、クラス全員へ分けてもらいます。上手に分けられない時には「〇〇さんにもあげてほし

いな」「わたしにもちょうだい」と声をかけて、みんなの手元に分けてもらいます。

- ③お菓子をもどし、今度は二つのかごに分けます。一つはたくさん、一つは少しにします。
- ④これを2人のメンバーに分けてもらいましょう。「あなたがたが彼らに食べ物を与えなさい」というイエスさまの言葉を聞き、みんなにどうやって分けることができるでしょうか。一緒に考えてやってみましょう。

## 活動②

## ワークシート

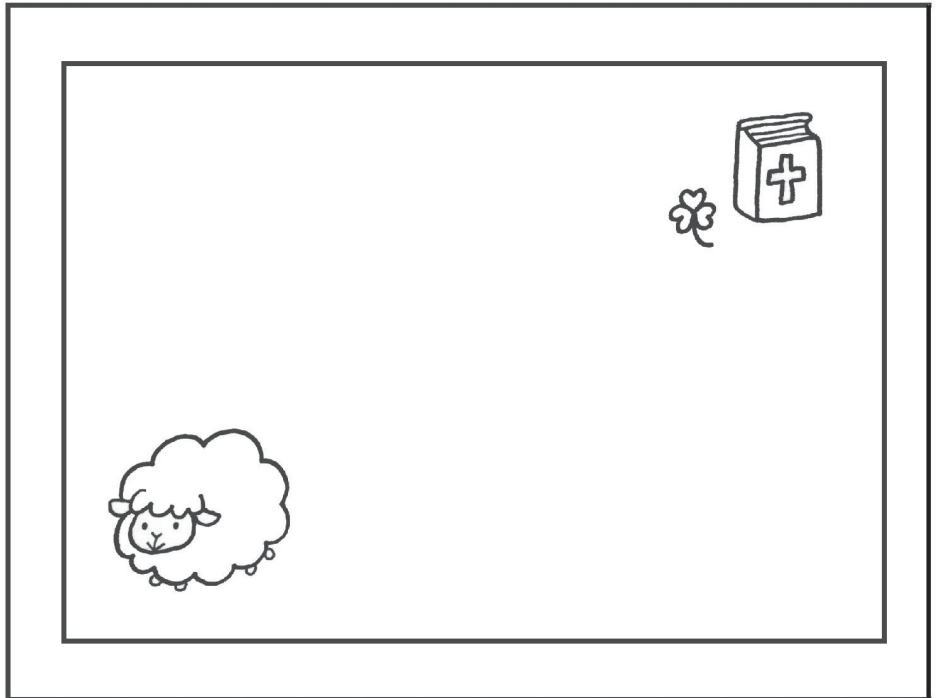
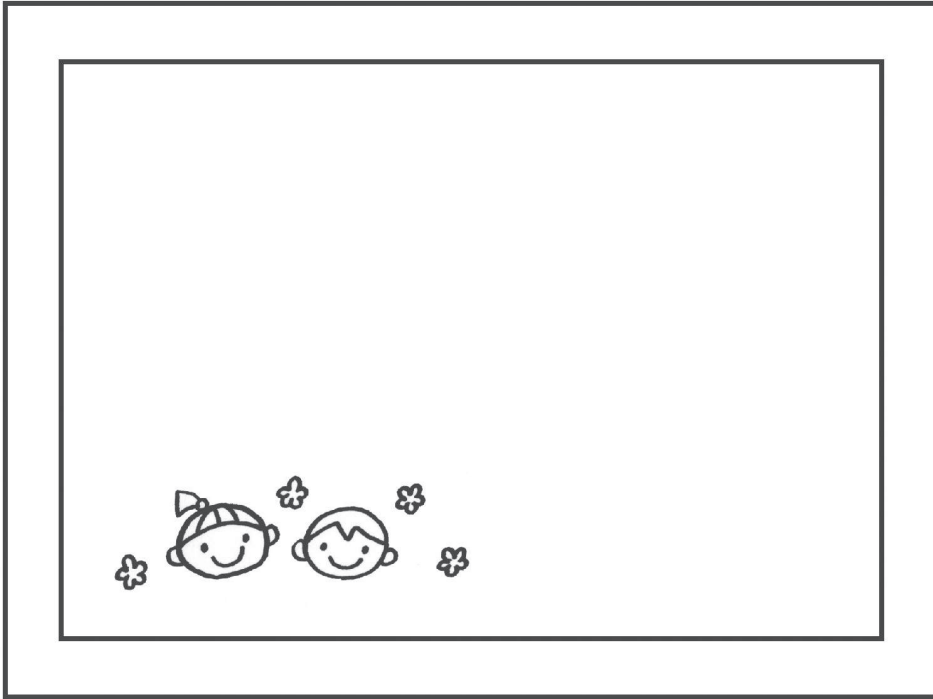
### 「イエスさまの言葉で心がいっぱい」

イエスさまのどんな言葉を聞いてうれしかったか？イエスさまの言葉に力づけられたことがありますか？イエスさまのうれしい言葉を書き出して壁かけを作りましょう。

暗唱聖句カードを使用してもいいですね。

●準備●ワークシート、台紙、糸、マスキングテープ、マジック、のり、ひも

- ①ワークシートを好きな大きさにコピーして、各自が好きなイエスさまの言葉や聖句を書き入れましょう。
- ②①の聖句カードをはり付ける厚紙の台紙をすてきな布で覆い、額縁になるようにマスキングテープや糸で飾り付けをしましょう。
- ③台紙の上に①の聖句カードをはり付け、壁に飾れるようにひもをつけましょう。



## 異邦の地にて

イエスさまとファリサイ派や律法学者たちとの軋轢は深くなりつつありました。ユダヤの昔からの言い伝えや律法に即した生活態度を重んじる人々から排斥はいせきされることも多くなっていました。そのような中、イエスさまはシリア・フェニキアにある地中海沿岸ティルス地方に行かれました。そこで、人を救うのは律法の遵守じゆんしゆなのではなく、心からイエスさまに期待して呼びかけることにあるということを決定的に明らかに示してくれる出会いが起こったのです。イエスさまが活動を始めた時、ユダヤ全土とエルサレムから、また、ティルスやシドンの海岸地方からも人々がイエスさまの教えを聞くため、病気を癒いよしていただくために来ていたと言いますから、イエスさまの評判は広く知れ渡っていたのでしょう。

イエスさまがティルスを訪れた理由は分かりませんが、病気の娘を持った女性もイエスさまのことを耳にしていたのでしょう。すぐに聞きつけて、イエスさまの足もとにひれ伏しました。何という行動力でしょう。その態度は、いかに彼女の苦しみ悩みが深かったのかを物語っています。しかし、彼女はギリシア人でシリア・フェニキアの生まれ、つまり「異邦人」でした。

## 「主よ、そこを何とか」の信仰

女性は、イエスさまの足もとにひれ伏すやいなや、娘を苦しめている悪霊を追い出して

くださいと頼みます。当時のシリア・フェニキアとユダヤとは敵対関係にあり、もとより異邦人との接触を嫌うのがユダヤ人であることを知っているこの女性にとっては、よほどの壁を乗り越えることでした。イエスさまはその関係上の建前を承知の上で答えられました。「まず、子供たちに十分食べさせなければならぬ。子供たちのパンを取って、小犬にやってはいけない」。「子供たち」と言うのはユダヤ人のことであり救いはユダヤ人にあることは明白で、犬はユダヤ人にとっては不浄とみなした異邦人を示しています。しかし、この女性の優れた信仰（信実・ピストゥス 偽りなく信頼する姿）は、イエスさまの言葉に潜ひそんでいる可能性を見逃しませんでした。「主よ、しかし、食卓の下の小犬も、子供のパン屑はいただきます」。愛する娘を助けるためにこの女性はイエスさまのたとえを逆手に取ってでも、イエスさまに食い下がります。

思い出すのですが、東日本大震災の折、発生当初から、海外ボランティアの方々延べ3000人以上を受け入れ、お世話をされた宮城県の吉岡伝道所（現在閉鎖）の野口直樹牧師（故人）の祈りの口癖は、「主よ、そこを何とか」でした。それは、願いを聞いてくださると信じるが故のあきらめない粘り強い祈りでした。

## 「それほど言うなら」

もしかすると、「子供たちのパンを取って、小犬にやってはいけない」とのイエスさまの

言葉は、当時のユダヤ人の異邦人に対する差別意識を皮肉ったものだったかも知れません。イエスさまがわざわざティルス地方まで足を延ばされたのは、福音がその初期の段階からユダヤ人に留まらず、異邦人に及ぶことを教える画期的な出来事とも言えます。そして事実、歴史や宗教的なものが作り上げてきた人と人との壁が、このような真剣な向かい合いを通して乗り越えられていくことになりました。福音を伝えることや受け取ることに、ユダヤ人もギリシア人もカナン人も関係がないことを福音書はこのように記しているのです。

ひるがえって私たちの信仰を考えると、現代社会には昔とはまた違った様々な壁が立ちだかっています。しかし、私たちには、フェニキアの女性の前に立たれた、同じイエ

準備のための聖書日課			
24日	㊦	マルコ6:45～52	逆風に抗して
25日	㊧	マタイ4:23～25	シリアに広まった主の評判
26日	㊨	マタイ11:20～24	異邦人の地ティルス
27日	㊩	ローマ9:1～5	肉としてのイスラエルの選び
28日	㊪	ローマ10:5～13	ユダヤ人とギリシア人の区別はなく
29日	㊫	マタイ15:21～28	御前にひれ伏して

スさまがおられます。私たちもまた、この女性のように私たちの願いを超えて応えてくださる神に信頼して歩みたいものです。



## 成人科

● イエスさまが異邦の地に行かれた理由は分かりませんが、どこにでもイエスさまの癒しや救いを必要とし求める人々が存在することに気づかされる物語です。そしてこの旅は、救いの領域をイスラエルに留まらず異邦人に拡大する出来事になったばかりでなく、フェニキアの女性が示したねばり強い信仰がイエスさまをたじろがせるほどのものとして表現されているように、私たちの宣教の働きにもまだまだ多くの可能性と、チャレンジしていく領域があることを示していないでしょうか。私たちが、その可能性を阻む壁や限界と思っているものは何でしょうか。そして、それを打ち破るには何が必要だと考えますか。

● 東日本大震災から11年になりますが、日本バプテスト連盟の諸教会伝道所は、世界中の同信の友と共に、文字通り「協力伝道」の原点に立って支援活動を続けています。その働きを通して先立って働かれる主との出会いを経験して来た私たちは、それを忘れることなく、これからの諸教会伝道所にとっての「協力伝道」について共に考えていきたいものです。また、廃炉の先が見えない東京電力福島第一原発をはじめとする、原発問題にも関心を持ち続けていきたいものです。



# シリア・フェニキアで

聖書 マルコによる福音書7章24～30節

暗唱 聖句 主は、従う人に目を注ぎ 助けを求める叫びに耳を傾けてくださる。  
詩編 34：16（口語訳 34：15）

44課

1月30日

イエスさまは地中海沿岸のティルス地方に行きました。そこは、ユダヤ人のイエスさまたちが気安く行けるところではありません。昔から敵対関係にあった地域だったからです。でも、その人たちの中に、ユダヤでイエスさまに出会ったことのある人たちが大勢いて、イエスさまは評判になっていたのです。イエスさまはティルスで騒動にならないように、そっとある家に入りました。ところが、人々はイエスさまに気付いて、大騒ぎ。それを知った一人の女性がいました。ギリシア人の女性で、重い病気に罹った娘を持って苦労している人でした。手を尽くして娘の病気を治そうとしましたが、どうにもならなくて途方に暮れていたのです。そこに、ユダヤ人のイエスさまが来られたことを聞きつけたのです。

すぐに女性はイエスさまのもとに向かいました。ギリシア人として面子や建前にこだわりの、迷っている場合ではありません。イエスさまに何と言われようと、断られようと、娘の病が治るのであれば何でもしようとして心を決めてイエスさまのもとへ行ったのです。

女性は、イエスさまのお顔を見るやいなや、その足もとにひれ伏しました。それは、彼女にとっては恥ではありませんでした。そうではなく、おそれるべき方をおそれ、その方の前にへりくだることでした。そして、正直にイエスさまに自分の娘から悪霊を追い出してくださいようお願いした



のです。当時は、病気の原因は悪霊の仕業だと思われていたからです。しかし、イエスさまは、「まだあなたの順番じゃないし、あなたの願いを聞くためにわたしは来たのではない」と言わんばかりに、彼女の願いを退けました。ところが、女性は、「主よ、しかし、食卓の下の小犬も、子どものパン屑はいただきます」と答えます。彼女は機転を利かせて、小犬だって大事な家族、おこぼれにだってあずかるとイエスさまに訴えたのです。

イエスさまは、しばしばたとえを使って弟子たちや人々に聖書の本当の意味を教えてくださいましたが、今回はイエスさまがこの異邦人の女性に一本取られる形になりました。イエスさまは言われました。「そう言われてはかなわない。行きなさい。悪霊はあなたの娘から出て行った」。彼女の切なる願いと信仰は、娘の癒しをもたらした。ユダヤ人だけのものと思われていた救いの福音が異邦人にも及び、その後の異邦人伝道へと拡大して行ったのです。

# シリア・フェニキアで

聖書

マルコによる福音書7章24～30節

暗唱  
聖句

主は、従う人に目を注ぎ 助けを求める叫びに耳を傾けてくださる。  
詩編 34：16（口語訳 34：15）

44課

1月30日

## 聖書から…

さすがのイエスさまでも疲れることがあるのですね。「誰にも知られたくない」なんてただ事じゃありません。でも心も体も疲れきったとき、誰にも会いたくない気持ちは共感できます。ましてそんなときに誰かが来たら、冷たくそっけない対応をしてしまうこともありますよね。イエスさまもそうだったのかもかもしれません。でも、そんな時は諦めず、「ユーモア」と「機転」で対応することが大切だということをこの女性は教えてくれます。

彼女はいい意味で「空気を読まない人」でした。子どもの癒しのためになりふり構わない、まさに自分自身の事柄としていた親の姿として、「求めなさい。そうすれば、与えられる」（マタイ7：7）を地でを行っています。

イエスさまの「小犬発言」には差別的なイメージもありますが、この女性は「小犬」と言われても諦めず、「小犬は主人の憐れみがなければ生きていけない」と言うわけです。イエスさまは彼女の言葉を聞いて、かつてご自分が山上の説教で「あなたがたのだれが、パンを欲しがる自分の子供に、石を与えるだろうか」（マタイ7：9）と言ったことを思い起こし、「こりゃあまいった」と、苦笑したのではないのでしょうか。

## 分かち合おう

- これは、福音書で数少ない「人間くさいイエスさま」の姿が描かれているお話です。特に疲れた時に「自分とは関係がないギリシア人（異邦人）」に冷たく接するところなんて非常に人間そのものです。でも、そんなイエスさまの冷たい心を解きほぐしたのは、この女性の諦めない心とユーモアでした。これは人の思いを忖度するばかりでは辿り着けないところです。諦めないで祈り続けることは大変なことですが、「そこをなんとか」と祈り求めることの大切さを学びます。皆さんは諦めないで祈り求めた経験はありませんか？ あれば分かち合ってみましょう。

- イエスさまと女性には多くの点で「違い」がありました。ユダヤ人と異邦人、男性と女性、独身と子持ち。人は違いがあると近づきづらさを感じます。ところがこの女性はその違いを乗り越えてイエスさまに出会いに行きました。つまり彼女は自分もイエスさまに願っていいのだという信頼を持っていたのです。私たちは自分に願うことがあっても諦めてしまうことがあります。この女性の姿から、忖度せずに自分の求めることをはっきりと口にすることが大切であることを感じます。この女性に見習いたいポイントがあれば話し合ってみましょう。

# シリア・フェニキアで

聖書 マルコによる福音書7章24～30節

暗唱 聖句 主は、従う人に目を注ぎ 助けを求める叫びに耳を傾けてくださる。  
詩編 34：16（口語訳 34：15）

44  
課

1  
月  
30  
日

## 聖書から…

イエスさまは誰にも知られたくないと思  
うほどに緊張をしていたのか、疲れていた  
のかもしれませんが。助けを求めてきたのが  
仲間であるユダヤ人だったら対応が違った  
のでしょうか。助けを求めてきたギリシア  
人の異邦人女性に「子どもたちのパンを取  
って、小犬にやってはいけない」と言って  
追い返そうとしました。イエスさまの冷たい  
対応にも負けず、助けを求める女性の強い  
思いと信頼、願いにイエスさまも「それ  
ほど言うなら」と女性の娘を癒なぐさされました。  
女性の強い願いと祈りがイエスさまの心を  
動かしたようです。イエスさまは私たちの  
祈りや願いに耳を傾けて聞いてくださって  
います。時には私たちの祈りや願いによっ  
て心を変えてくださる方です。異邦人の女  
性がイエスさまの心を動かしたことで異邦  
人への宣教が広がっていきました。イエス  
さまは人との出会いの中で心を動かされる  
お方なのです。私たちは、イエスさまの心  
に届くことを信じて、イエスさまに向き合  
って祈っているでしょうか。

## 活動①

### 「祈りよ届け」

- ①祈りを込めて紙飛行機を作ります。願い  
事を書いてもいいですね。
- ②少し遠めの場所に目標を定めます。箱を  
用意してもいいですし、窓や扉、椅子な

ど場所を決めてもいいです。または、注  
意しながら受け取る人の所に向かって飛  
ばすのもいいと思います。

- ③目標の場所を目指して祈りの紙飛行機を  
飛ばします。
- ④思ったところに届かなかったらどんな気  
持ちになりますか？がっかりする、つま  
らない、やめたくなる…。
- ⑤なかなか思う場所には飛んでいきません  
が、祈りが届くようにと願いながら何度  
も飛ばしましょう。

\*今日のおはなしの諦めずに願い続けた女  
性はどんな気持ちだったでしょう。  
がっかりしないで、諦めないで願い続け  
たのは、「どうしても」という思いと、「こ  
の人なら」という思いが強かったからで  
はないでしょうか？ そんな風に強い思  
いを持ってイエスさまに祈ることがあり  
ますか？ そんな時には、初めから叶わ  
ないかもと思わずに、一生懸命に心から  
何度でも祈ってみましょう。

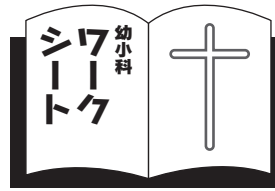
## 活動②

## ワークシート

イエスさまの旅路を地図で追ってみよう。  
(マルコによる福音書における旅路)

地図を拡大コピーして、その土地、その  
土地で何が起こったか調べたり書き込んだ  
りできるといいですね。

# イエスさまの旅路を地図で追ってみよう (マルコによる福音書における旅路)



44課

1月30日

- 【1:9】 ナザレからヨルダン川へ
- 【1:21】 カファルナウム
- 【2:1】 カファルナウム
- 【5:1】 向こう岸 ゲラサ
- 【6:1】 故郷 ナザレ
- 【6:45】 ベトサイダ
- 【6:53】 ゲネサレト
- 【7:24】 ティルス
- 【7:31】 シドンを経て  
デカポリス地方を通り抜け  
ガリラヤ湖へ
- 【8:22】 ベトサイダ
- 【8:27】 フィリポ・カイサリア
- 【9:33】 カファルナウム
- 【10:1】 ユダヤ地方
- 【10:46】 エリコ
- 【11:1】 ベトファゲ、ベタニア
- 【11:11】 エルサレム



# だから、目を覚ましていなさい

聖書 マルコによる福音書13章32～37節

暗唱  
聖句 その日、その時は、だれも知らない。…父だけがご存知である。  
マルコ 13 : 32

45  
課

2  
月  
6  
日

## 大切なこと

イエスさまがオリーブ山で神殿の方に向いて座っておられると、ペトロ、ヤコブ、ヨハネ、アンデレが神殿の崩壊の時期について尋ねました。終末の徴については共観福音書に並行記事がありますが、イエスさまの告別の言葉と捉えることができます。弟子たちの関心はその時期や前兆にありました。それは、いつの時代でも人間に共通するものではないでしょうか。様々な終末予言らしきものが世界中を騒がせました。しかし結局何も起こらず、世の中は過去を問うこともなく危機感も薄れ日常に戻って行ったのです。

「その日、その時はだれも知らない」とイエスさまは言われます。「その日、その時」と言葉を重ねることで、「終末や人の子の到来」が必ずおとずれるということを表わしています。33節は「その時」（カイロス＝神が定められた時）を用いて、時間的な「いつ」という関心よりも「何がどのように到来するか」が強調されています。

とかく私たちは過去や現在、そして将来の出来事の意味や、悟らなければならない事柄に無頓着になってしまいがちですが、大切なことは、「その時」に込められた神の思いは何なのかということなのです。

## 子も知らない

イエスさまは、「天使たちも子も知らない。父だけがご存じです」と言われます。神の子であり、神同然であるイエスさまがどうして

知らないと言われるのでしょうか。それは、地上に生きるものにはどうにも触れることのできない神の意志という領域があり、イエスさまご自身もその神のご支配の中に生きる存在であることを意味します。神だけが知っている。このことに信頼を置き、知ることができないからこそ、どのようなことがあったとしても、時を見分け、希望を持ち、誠実に生きることが許されていることを、イエスさまは身をもって教えておられるのです。

## だから 「目を覚ましていなさい」

「気を付けて」という言葉には「見分ける」という意味があり「目を覚ましていなさい」と合わせて、つねに世を見分ける態度や姿勢を問う言葉として四度も繰り返されています。いつとは分からない時間に心を奪われるのではなく、今という時を神さまの時として見つめ、大切な徴を見落とさず、み旨を見失わないように生きるのです。

## すべての人に

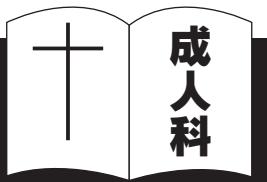
「旅に出る主人」のたとえば、イエスさまと弟子たちの関係の比喩と考えられます。福音を宣べ伝えたイエスさまは、十字架を前にしておられました。イエスさまはたとえを通して弟子たちに、宣教という働きや門番（見張り）という働きを託しました。その働きのすべての時間は、もはや主人が帰ってくる時に結びつけられた「時」となるのです。

イエスさまは、13章3節以下で終末の徴の中「人に惑わされないよう気をつけなさい」と語り、この世の騒動や戦争、あるいは災害などを終末に結びつけて誤った騒ぎ方をする人たちのことに警鐘を鳴らします。また「旅に出る主人」のたとえでは、終末が遅れているからと気を緩めたり、忘れてしまったりする者たちへ警告を与えておられます。「主人が戻ってくる」という約束は確実なのですが、人間は時間（クロノス＝流れいく時）の中で予知することはできず、神の時（カイロス）だけが現在という「時」に緊張と希望と意味を与えるのです。

そして、イエスさまはたとえの最後に「あなたがたに言うことは、すべての人に言うのだ。目を覚ましていなさい」と言われます。

準備のための聖書日課			
31日	㊦	ルカ12:35~40	思いがけないときの到来
1日	㊧	ルカ12:41~48	主イエスは帰ってこられる
2日	㊨	ローマ13:11~14	主イエスを身にまとって
3日	㊩	マルコ13:1~13	耐え忍ぶ者の救い
4日	㊪	マルコ13:14~27	何に気をつけるのか
5日	㊫	マルコ13:28~31	滅びることのない主の言葉

それは、「人の子の到来」がペトロたち4人の弟子たちだけでなく、時代を超えてすべての人に及ぶ招きであることを示しています。



## 成人科

- イエスさまのたとえ話には、真実を「明らかにする」面と「隠す」面が

あります。一般的にはたとえ話は、伝えたいことを分かりやすくするものですが、イエスさまのそれは、心のかたくなな者には益々分からなくさせてしまうという側面があることに気づかされます。私たちの目前に起こる様々な問題、特に終末を思わせるほどの大災害や世界的な感染症などに直面した時、それをどのように受け止めるかは、神さまと私たちとの関係がどうあるかによって捉え方が違って来ると思われます。「目を覚ましていなさい」と

と言われる神さまとあなたとの間にはどんな関係にあるのでしょうか。

- 今週は「信教の自由」を覚える日ですが、世界では依然として「言論の自由」さえ奪われている国も存在します。しかし、民主主義を標榜する日本は、平和憲法を変えるために意思決定の脆弱な国民投票法改正に舵を取りました。一見、自由に見えますが、言論の自由を奪い平和憲法を失うという取り返しのない選択になりかねません。「目を覚ましていなさい」との主の声を聞いた者として、何ができるのでしょうか。

# だから、目を覚ましていなさい

聖書 マルコによる福音書13章32～37節

暗唱聖句 その日、その時は、だれも知らない。…父だけがご存知である。  
マルコ 13:32

45課

2月6日

イエスさまが神殿の境内を出て行かれる時、弟子のひとりが神殿のすばらしさを誉めました。すると、イエスさまは「一つの石もここで崩されずに他の石の上に残ることはない」、すなわち神殿は徹底的に破壊されてしまうであろうと言われたのです。それは実際、紀元70年に現実のことになりました。

弟子たちはイエスさまがオリーブ山を眺めておられるのを見て、その言葉を思い出しました。そしてイエスさまに、「そんなことが起こるのはいつでしょう。そして、その時にはどんな徴しるしがあるのでしょうか」と尋ねたのです。イスラエルの人たちにとっては再建されたエルサレムの神殿が再び無くなってしまふなんて、世の終わりと同じことだったのです。

イエスさまは、世の終わりの徴として、偽のキリストが現れ、戦争や戦争のうわさを聞かだろが慌ててはいけないと言われます。そして、地震があり飢饉きんが起こっても、それは始まりでしかないとおっしゃるのです。それに加えて、「あなたがたは地方法院に引き渡され、会堂で打ちたたかれる。また、わたしのために総督や王の前に立たされて、証しをすることになる」と、あたかも今すぐにも起こるかのようによイエスさまは語られるのです。それを聞いた弟子たちはどれほど不安になったことでしょう。

しかし、その前兆はあり、備えることは



できるとイエスさまは言います。それだけでなく、それまではこの時代は決して滅びず、天地は滅びてもイエスさまの言葉は決して滅びないと約束してくださいました。

そして、大事なことは、「その日、その時」はだれも知らない。天使たちも子も知らないと言われます。それは一見私たちに不安を与える言葉ですが、真実なのです。

また、イエスさまは「父だけがご存知である」と、もう一つの真実を示します。その言葉は、神さまに信頼する者にとっては安らぎで、神のご支配のもとにある平安です。「気をつけて、目を覚ましていなさい。その時がいつなのか、あなたがたには分からないからである」それは、逆説的に、「その日、その時」を唯一分かっておられる方に信頼し、その方の帰還まで終わりの前兆を見極め、与えられ委ねられた働きを誠実に努めることなのではないでしょうか。終末を、イエスさまは主人が帰って来ることにたとえます。僕しもべを愛し、守り、大事にしてくれる、信頼に足る主人です。私たちは恐れ不安をもって待つのではなく、希望と喜びをもって日々を大切に生きたいものです。

# だから、目を覚ましていなさい

青少年科



聖書

マルコによる福音書13章32～37節

暗唱  
聖句

その日、その時は、だれも知らない。…父だけがご存知である。  
マルコ13:32

## 聖書から…

イエスさまは神殿を誉め讃えていた弟子たちに神殿の崩壊<sup>ほうかい</sup>を予告します。弟子たちは動揺したことでしょう。そんな彼らが神殿に見ていたものは、建造物の素晴らしさに象徴されるイスラエルの栄光でしょうか。でもそんな「神話」は崩壊することがあります。変わらないのはイエスさまの言葉だけです。だからイエスさまは言います。「その日その時は誰も知らない。気を付けて目を覚ましていなさい」。

ずっと目を覚まして生き続けるのはしんどいと思います。「その日その時」に救われることばかり考えていたら神経質になりますし、「今」を生きることを無意味と思い、雑にになってしまうかもしれません。でもイエスさまが言うのは「その時がいつ来るかわからないからと不安にならず、今この日この時を私と共に生きていこう」ということだと思えます。

宗教改革者マルチン・ルターは「たとえ明日、世界が滅亡しようとも今日私はリンゴの木を植える」と言いました。明日世界が滅亡するならリンゴの木を植えても収穫できません。でもこれは、まさに今この時私たちにできることをしていくときに希望が示されるということなのではないでしょうか。

## 分かち合おう

- 「いつか必ず来る日」に備えることは大切なことです。たとえば地震や災害などに備えておくことは大切です。でもそれより大切なのは心の備えです。世の終わりのときには、人々の心には不安が募り、あらゆる情報が飛び交い、混乱が起きることでしょう。そんなときに心に留めたいのは、イエスさまがどんな時も私たちと共にいてくださる（インマヌエル）ことです。そのためにイエスさまは来てくださったのです。私たちは神の時を生きているのです。隣人と共にこの時（カイロス）を生きるためにどうしたらよいか話し合ってみましょう。
- 神殿崩壊とは、「イスラエルの神の敗北」であり人々の信仰の土台が崩された出来事です。神殿崩壊を招いたユダヤ戦争（紀元70年）は、ローマ帝国とその支配に対抗するイスラエルの神の守りを信じていた人々とによって引き起こされました。果たして戦争は神のみ心だったのでしょか。他の道があったのではないのでしょうか。今週2月11日は「信教の自由を守る日」です。バプテスト教会が「建国記念の日」を「信教の自由を守る日」として記念しているのは、実は戦争と深い関わりがあります。調べてみて、私たちの信仰とは何か考えてみましょう。

45課

2月6日



# だから、目を覚ましていなさい

聖書

マルコによる福音書13章32～37節

暗唱  
聖句

その日、その時は、だれも知らない。…父だけがご存知である。  
マルコ 13：32

## 聖書から…

世の終わりの時が来ると聞いたら、どんな時を想像するでしょうか。悲しいニュースや恐い出来事がたくさんあると、世の終わりが近いのだと言う人がいるかもしれません。でも、「その日、その時は、だれも知らない」のです。「目を覚ましていなさい」というのは、不安と恐れの中で眠らないでいなさい、ということではありません。その日、その時を神さまはご存知です。その日、その時にもイエスさまの言葉は決して滅びることがありません。イエスさまが言われている「目を覚ましていなさい」とは、どのような時代の中にあっても神さまを信じて神さまの言葉を聞いていなさいということです。すべてをご存知の神さまに信頼することで、私たちは希望と平安をもって生きることができますね。

## 活動①

### 「賛美しましょう」

『新生讃美歌』（日本バプテスト連盟）75番「陽昇り 朝に目覚め」を歌いましょう。

目覚めて朝の光を見ると、鳥の音が聞こえたとき、美しい自然を目にしたときに、共におられる神さまを思いましょう。神さまが光をくださったこと、神さまが力をくださったことを思って賛美しましょう。振り付けをみんなで考えて歌ってみましょう。

## 活動②

## ワークシート

### 「神さまだけが知っている」

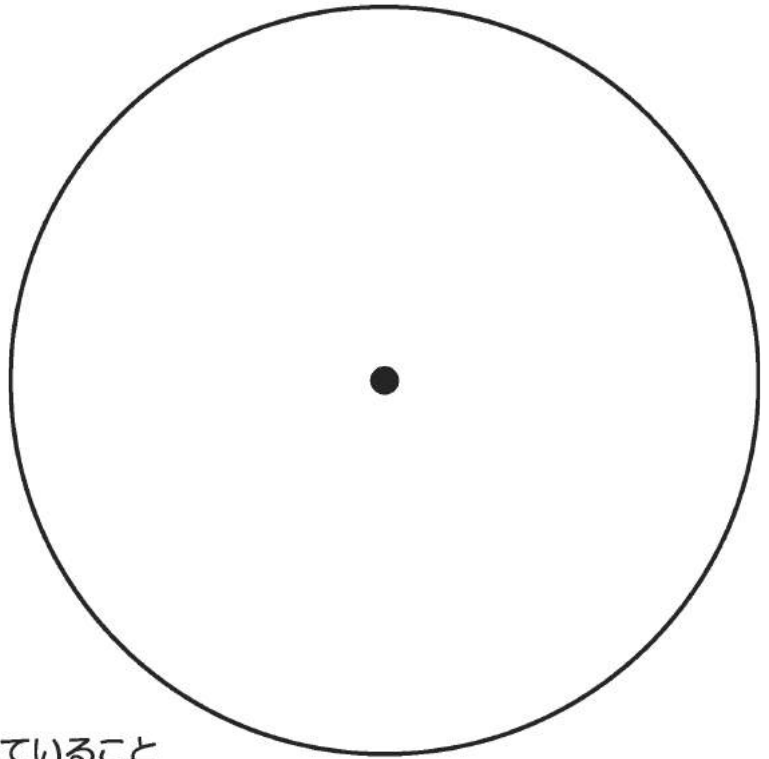
●準備●ワークシート、はさみ、ストロー、つまようじまたは画鋲（取扱い注意）、セロテープ

- ①ワークシートの円を二つ、はさみで切りとります。下の円には切り込みが入っています。
- ②欠けていない円に、神さまだけが知っていることを書き出してみましよう（例：命の始まり、未来、出会い、地球の始まり、世の終わり…）。
- ③欠けている円には、私たちに見えていることを書きだします。
- ④②の円の中心にストローを短くして貼ります。③の円の中心にはつまようじをさします（画鋲などでも代用できます）。②が下で、③が上に重なります。
- ⑤②のストローに③のつまようじを差し込み、欠けていない円を動かさず、欠けている円をクルクルとまわしてみましよう。
- ⑥神さまが知っておられることと、私たちに見えていることの違いを考えてみましよう。私たちに分からないことも神さまが知っているのだと思うと安心しませんか？





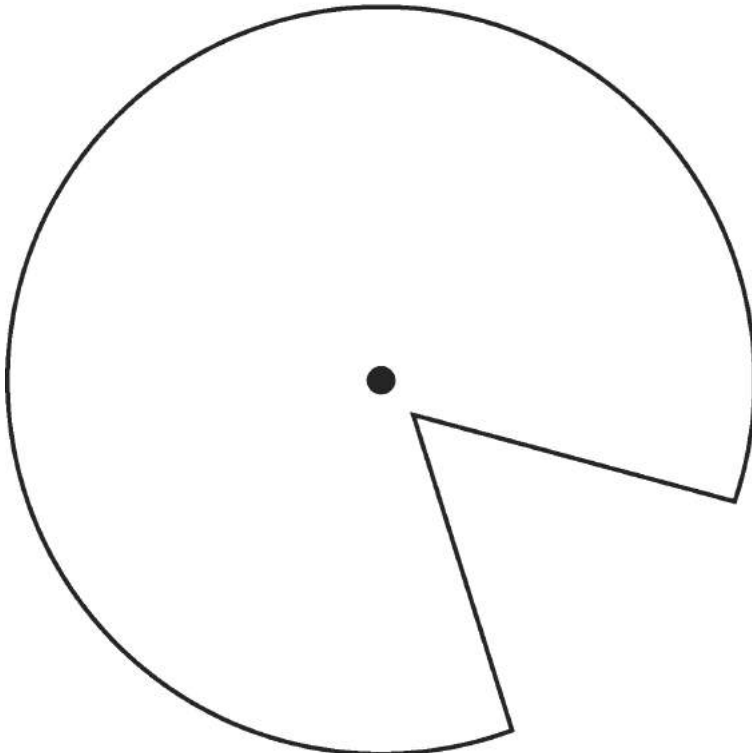
神さまだけが知っていること



45課

2月6日

私たちに見えていること



# メシアと告白しつつも

聖書 マルコによる福音書8章27～38節

暗唱聖句  
そこでイエスがお尋ねになった。  
「それでは、あなたがたはわたしを何者だと言うのか」マルコ8：29

46課

2月13日

## 異教の地にて

フィリポ・カイサリア地方はヨルダン川源流を見下ろす場所にあり、そこには多産神パンの聖所やヘロデ大王が建てた皇帝アウグストゥスの神殿がありました。その後、大王の子フィリポがその土地をカイサリアと名付けました。マルコ福音書におけるペトロの告白とイエスさまの受難の予告はユダヤと異教の地の境にあって行われたのです。まさしく、これからエルサレムへの道の苦難を想定してなされたものです。

## それでは、あなたがたは

救い主イエスの本質に迫る、ペトロの開眼とも言える主告白の出来事はイエスさまご自身の質問から始まりました。「人々は、わたしのことを何者だと言っているのか」。それは第三者の見解を求めるもので、弟子たちは人々が「洗礼者ヨハネ」「エリヤ」、そして「預言者の一人」と言っていることを報告します。するとイエスさまは質問を二人称に変えられました。「それでは、あなたがたは私を何者だと言うのか」。それは、イエスさまとの関係を他人事とせず、主の救いの物語への参加を促す言葉だったのです。

ペトロの告白、「あなたは、メシアです」とのメシアは「油注がれた者」で、救い主を差します。しかし、預言者イザヤは油注がれた者とは「罪からの救い」と同時に、「貧しい人に良い知らせを伝えさせるために。打ち砕かれた心を包み 捕らわれ人には自由を

つながれている人には解放を告知させるために」(イザヤ61：1) 遣わされた者だと語ります。

## メシアと告白しつつも

その後、イエスさまは弟子たちに受難を告知されます。しかも、はっきりとおっしゃったのです。すると、その言葉に驚いたペトロはイエスさまをわきへお連れして、いさめ始めました。それに対してイエスさまは振り返って、弟子たちを見ながら、ペトロを叱って「サタン、引き下がれ」と強い口調で言われました。メシアと告白したペトロの想いは、それまで考えられていた「ユダヤ民族の王的な救い主」としてのメシア像がイメージされていきました。ですから、ペトロは受難の予告を受け入れられなかったのです。イエスさまの叱責は、人間の願望の上にメシア像を振り回す傲慢ごうまんに向けられています。

ペトロを「サタン」とさえ呼ばれたイエスさまの言葉は岩波訳では、「サタンよ、私の後ろに失せろ」となっています。イエスさまを差し置いてイエスさまの前に出るなという意味です。それほど、イエスさまの受難と復活は人が立ち入ることも理解することもできない神のみ心だったと言えます。同時に「神のことを思わず、人間のことを思う」という指摘は、イエスさまをメシアと告白しつつも信仰生活のあらゆる場面で人間の思いに囚われてしまう私たち人間の弱さを自覚させるものです。

## 共に歩み、 共に生きる者として

それから、イエスさまは群衆と弟子たちに向けて「わたしの後に従いたいものは、自分を捨て、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい」と命じられました。それは、この世にあってイエスさまに従う道には、十字架を負うような苦難や迫害が伴うことを意味します。しかし、「背負う」「従う」というギリシア語には、それぞれ、「支える」「共に行く」という意味もあります。イエスさまは必ずしも勇ましい「殉教」を求めておられるのではなく、主イエスに信頼し、共に歩み共に生きる道を歩み続けるようにと願っておられるのだと思います。そしてイエスさまは、「人はたとえ全世界を手に入れても、自分の命を失

準備のための聖書日課			
7日	㊦	マルコ8:1~10	感謝の祈りと 賛美の祈り
8日	㊧	マルコ8:11~21	まだ、分からないのか
9日	㊨	マルコ8:22~26	主イエスへの開眼
10日	㊩	イザヤ61:1	主なる神の霊の働き
11日	㊪	ヨハネ1:35~42	わたしたちは メシアに出会った
12日	㊫	マタイ16:13~20	あなたはメシア、 生ける神の子です

ったら、何の得があるか」と、一人ひとりの命が全世界より重いこと、イエスさまに従う道こそ命を得る道であることを明示し、私たちが本末転倒した人生を歩むことがないよう勧められています。



成人科

● 「人々は、わたしのことを何者だと言っているのか」と、イエスさまは弟子たちに問われました。それは、イエスさまが人の評価を気にして問われた言葉ではないことは明らかです。イエスさまが知りたかったのは、弟子たちのイエスさまに対する主体的な応答であったと推察されます。数々のしるしとみ言葉によって示されたイエスさまのメシアとしての本質を、寝食を共にした弟子たちが信じているのか、今一度確かめたかったのかも知れません。イエスさまが、弟子たち一人ひとりに問われたように、あなたに問われたとしたらイエスさまを何者だと答えるでしょうか？

● ペトロは、弟子たちを代表するかのよう「あなたは、メシアです」と答えました。しかし、後にペトロも他の弟子たちもイエスさまを裏切ることになってしまいます。彼らは十字架を目撃し、復活のイエスさまにまみえ、聖霊を注がれる時まで、その告白の内実を認識することはできなかったのです。その弱さを私たちは克服していると言えるでしょうか。益々混迷を深めるこの時代において、「あなたは、メシアです」と、告白できるでしょうか。また、その根拠はどこにあるのでしょうか。

# メシアと告白しつつも

聖書 マルコによる福音書8章27～38節

暗唱聖句  
そこでイエスがお尋ねになった。  
「それでは、あなたがたはわたしを何者だと言うのか」マルコ8：29

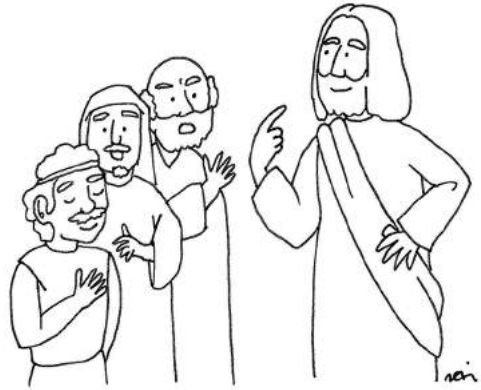
46課

2月13日

イエスさま一行は、ガリラヤから遠く離れた北の地、フィリポ・カイサリアに出でいかれました。その途中、イエスさまは何を思われたのか、ご自身のことを人々が何者だと言っているのか弟子たちにお尋ねになったのです。弟子たちはそれぞれに人々からイエスさまについて聞いていることを告げました。「『洗礼者ヨハネ』とっています」。「『エリヤだ』と言う人もいます」。それに、「『預言者の一人だ』と聞きました」。そこで、イエスさまは直接弟子たちに尋ねられました。「それでは、あなたがたはわたしを何者だと言うのか」。急に質問が自分たちに向けられて弟子たちは驚きました。しかし、一番弟子のペトロが答えました。「あなたは、メシアです」。するとイエスさまはそのことを誰にも話さないようにと戒められたのです。異教の地であり、まだご自身の正体を表す時でもなかったのかも知れません。

ところがその後、イエスさまはご自分がユダヤ教の指導者たちから迫害を受け、殺され、そして三日後に復活すると教え始められたのです。弟子たちは驚き、イエスさまがメシアだと告白したペトロは、イエスさまをいさめ始めたのです。そんなひどい話、誰だって理解できるはずはありません。ところが、イエスさまは、今まで聞いたことのないようなきつい言葉でペトロをしかりつけました。「サタン、引き下がれ」。

まるで荒野でイエスさまを誘惑したサタ



ン以上に厳しくペトロを扱われたのです。ペトロはイエスさまのためを思っていさめに違いありません。でも、それはイエスさまにとってはご自分がなさろうとしていることを邪魔すること、神さまが神さまであることを捨て世の救いを達成するためにどうしても通らなければならない道を妨害することだったのです。ペトロはイエスさまのことをメシアと告白しつつも人間の思いを優先してしまったのです。

イエスさまは気を取り直してペトロや弟子たち、ついて来た人たち皆に「わたしの後に従いたい者は、自分を捨て、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい」と言われました。それは、主イエスが仕えられるためではなく、仕えるために、そしてご自身を献げるために来られたように、私たちもまた神さまに対して心を開き、そのイエスと共に歩み生きる者となることを意味していると言えるのです。そうしてはじめて私たちは死者を復活させることのできる神の力を知るのではないのでしょうか。

# メシアと告白しつつも

青少年科



聖書

マルコによる福音書8章27～38節

暗唱  
聖句

そこでイエスがお尋ねになった。

「それでは、あなたがたはわたしを何者だと言うのか」マルコ8：29

## 聖書から…

フィリポ・カイサリア地方は他宗教の神殿がある異教の地でしたので、イエスさま一行は、村々を回るうちに他宗教の礼拝や人々の信仰生活などを見かけたことでしょう。

そこでイエスさまが「わたしのことを何と知っているか？」と弟子たちに問いかけたことを考えると、「あなたにとっての神とは何か？」を考えさせようとしているのかもしれない。

「それでは、あなたがたはわたしのことを何者だと言うのか」。イエスさまが面と向かってこう聞いてこられたら、ドキッとしませんか。

この質問に答えるには、私個人のイエスさま理解（イエスさまとの関係性やイエスさまに期待していることなど）が反映されるからです。ペトロは「あなたはメシア（救い主）です」と答えましたが、ペトロはメシアをどう理解していたのでしょうか。

その後イエスさまを諷<sup>いさ</sup>めていることを考えると、「ローマの支配からユダヤ人を解放する救い主」であったのでしょうか。同じ「メシア」でもその意味合いは違います。イエスさまの語るメシアとは何でしょうか。それは人々の罪のために血を流される救い主、つまり「一人一人のいのちを徹底的に愛しぬき、共に生きていくように招かれる救い主」であったのではないのでしょうか。

## 分かち合おう

●あなたはイエスさまを何と告白しますか？長年教会に通っていると、イエスさまは「キリスト」であるとか「救い主」とか、聞いて覚えた言葉で答えを得た気になり、自分自身にとってのイエスさまが分からなくなることがあります。他にも教会でよく使われる「祈り」や「救い」も、表面的な言葉で終わってしまうことがあります。そんなとき、自分自身の言葉で言い換えてみませんか。そうすると、自分にとってのイエスさまが見えてきます。自分の言葉でイエスさまを紹介してみましよう。

●今日の箇所から、「イエス・キリストを信じる」とは、教会に来て礼拝を献げて宣教を聞いて終わりなのではなく、自分自身の出来事として生きていくことであることが分かります。でも私たちが時々ペトロのようにイエスさまを自分で理想化してしまうことがあります。それは偶像崇拜に他なりません。「サタン、引き下がれ」は岩波訳聖書では「サタンよ、私の背後に失せろ」です。私たちがイエスさまを偶像としないためには、イエスさまの前には出てはいけません。むしろしっかりとイエスさまの歩みと言葉に背後から目を留めていきたいですね。

46課

2月13日

# メシアと告白しつつも

聖書 マルコによる福音書8章27～38節

暗唱 聖句  
そこでイエスがお尋ねになった。  
「それでは、あなたがたはわたしを何者だと言うのか」マルコ8：29

## 聖書から…

人々がイエスさまのことを様々な言葉で言い表して噂をしていました。イエスさまは弟子たちにたずねます。「人々はわたしのことを何者だと言っているか」。それに対して弟子たちは聞いたことを伝えます。するとイエスさまは「それでは、あなたがたはわたしを何者だと言うのか」とたずねました。ペトロは「メシアです」と答えました。

イエスさまはどんな思いでたずねたのでしょうか？ はじめから答えを思いえがき、弟子たちが正解することを期待しておられたのでしょうか？

「それでは、あなたがたはわたしを何者だと言うのか」と私たちもイエスさまに問われています。イエスさまはあなたにとって、私にとってどんな方でしょうか。「あなたがたはわたしを何者だと言うのか」と、イエスさまに問われたら何と答えるでしょうか。考えてみましょう。

## 活動①

### 「わたしはだあれ？」

隠しているものが何かヒントを聞いて当てるゲームです。

- ①箱の中、もしくは布の下に何か物を入れます。
- ②「わたしは誰でしょう？」と、モノになりきってヒントを出していきます。

例1：「みんなによく読まれています」「世界で一番売れている本です」「神さまからのラブレターと言われることがあります」「66巻1セットです」…[答え：聖書]

例2：「みんなによく叩かれます」「合奏するとき叩かれることが多いです」「歌を歌う時にたたかれます」「一緒にリズムをきざむのが好きです」…[答え：カスタネット]

例3：「わたしはいろんな色があります」「いろんな形に変身します」…[答え：折り紙]

## 活動②

## ワークシート

### 「イエスさまはどんな人？」

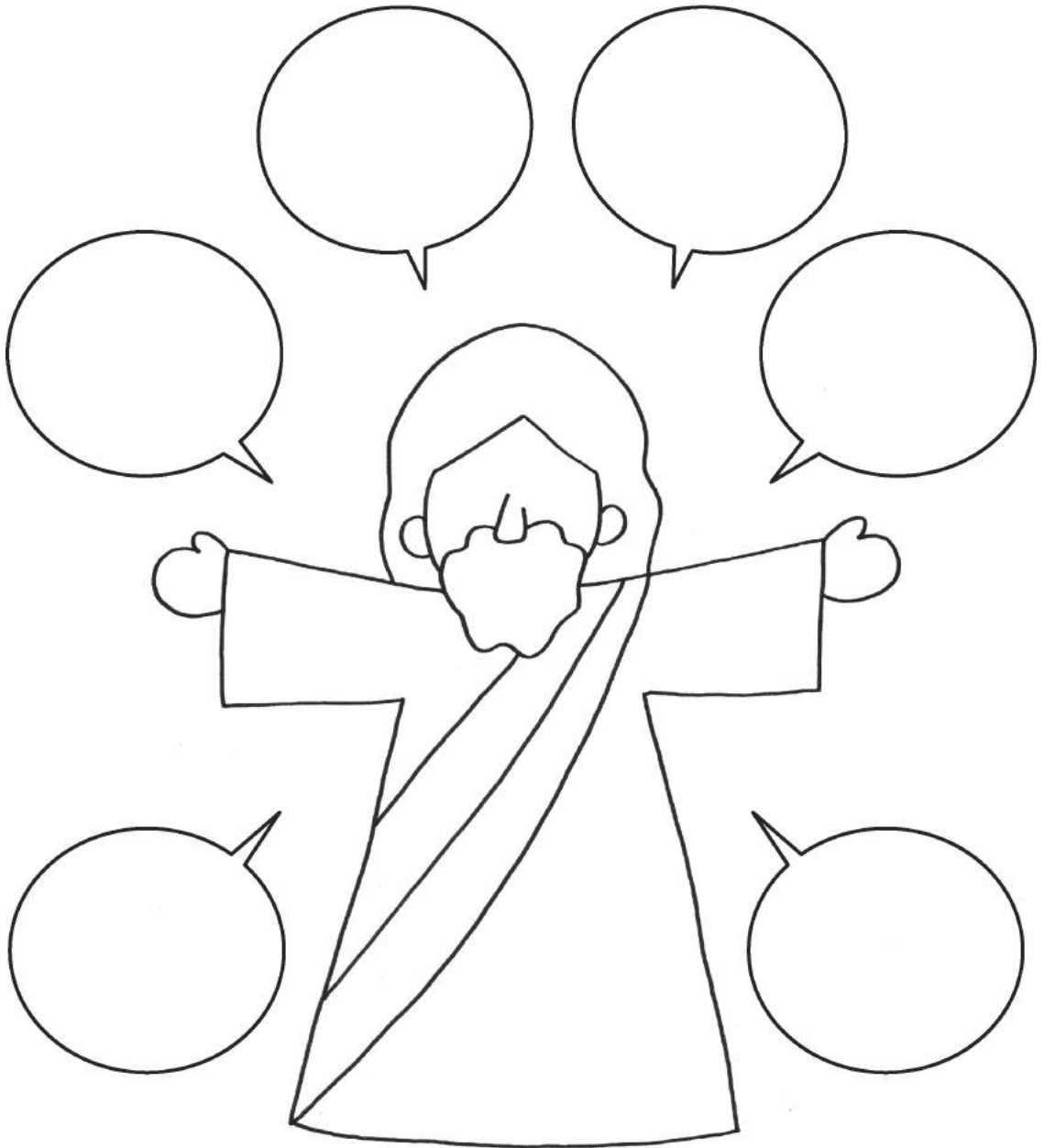
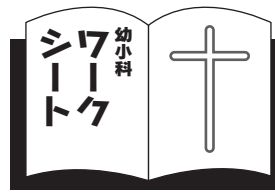
●準備●ワークシートコピー人数分、筆記用具

イエスさまはどんな人？ イエスさまを言い表す言葉を出してみましょう。

「あなたがたはわたしを何者だと言うのか」みんなと同じ答えじゃなくていいのです。

あなたにとってイエスさまはどんな存在だと思いますか？

- ①イエスさまの顔を書きましょう。
- ②イエスさまをイメージする言葉を吹き出しに書いてみましょう。
- ③「わたしにとってイエスさまは〇〇です」自分なりの答えを考えてみましょう。



わたしにとってイエスさまは  です。



## 切なる願いにもかかわらず

イエスさまが山から下りて来られると、残っていた弟子たちが大勢の人々に取り囲まれ、律法学者たちと議論していました。人々はイエスさまを見つけて非常に驚き駆け寄りました。その議論は、弟子たちがある人の息子の病気を癒すことができなかつたことでした。

その息子の状態は、ものが言えず、霊が取りつくと、所かまわず地面に引き倒され、口から泡を出し、歯ぎしりして体をこわばらせるというひどいものでした。共観福音書の中でマルコ福音書のみが、そのようになった時期が幼い時からであり、親子の苦しみ<sup>きょうい</sup>が長期に渡ったこと、何度も死の脅威<sup>きょうい</sup>にさらされ深い苦しみを味わってきたことを表現しています。

父親の切なる願いにもかかわらず、弟子たちは息子を癒すことはできませんでした。律法学者たちはそれを咎<sup>とが</sup>め、弟子たちを偽善者呼ばわりし、ひいては教師であるイエスさまを誹謗<sup>ひぼう</sup>していたのかも知れません。

## 主イエスの悲嘆と苦悩

イエスさまは答えになりました。「なんと信仰のない時代なのか。いつまでわたしはあなたがたに我慢しなければならないのか」。このイエスさまの言葉は、かつての出エジプトを経験したイスラエルの民が、神の力を知りつつも不平を言い、自分の力に頼り、背信の民となったように、神に信頼することもなく、親子の苦悩をよそに自分たちのわざ<sup>わざ</sup>に終

始し、議論している彼らに嘆いておられるイエスさまの姿を想像させます。

弟子たちは、神への信頼と祈りを忘れ、自分の経験に寄り頼み、その息子を癒せると思ったのでしょうか。彼らは、信じることも、祈ることも、癒しさえ、それを実現してくださるのは神のみわざであることを忘れていたのです。改めて、「いつまで…我慢しなければならぬのか」との言葉は、ご自身がこの「信仰のない時代」に属する者ではなく、神に寄り頼む側におられるがゆえに迫害され十字架に向かわざるを得なかつたイエスさまの深い苦悩を私たちに伝えるのです。

## 「できれば」と言うのか

連れて来られた息子はすぐにその症状に襲われました。父親は、「おできになるなら、わたしどもを憐れんでお助けください」とイエスさまに懇願<sup>こんがん</sup>しました。するとイエスさまは、『『できれば』と言うか。信じる者にはなんでもできる』と父親に向かって言われました。それは、「神にはできないことはない」ということを父親が信じるようにとのイエスさまの願いであったと言えます。父親は「信じます。信仰のないわたしをお助けください」と、自分の不信仰を認め、助けを求めました。それは、「御心ならば、わたしを清くすることがおできになります」と、重い皮膚病の人が、イエスさまのもとに来てひざまずいて神ご自身にその身を委ねた時、即座に癒された出来事と対比できます（1：40）。彼が癒されたのは、彼の信仰が強かつたからではなく、

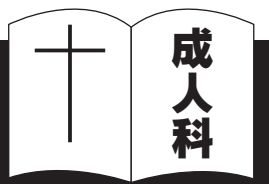
彼が信頼し委ねた神ご自身がその願いに答え、実現することのできる力ある神であったからなのでした。その信仰こそ神に由来するものなのです。

## 信じて祈るのでなければ

なぜ弟子たちは霊を追い出すことができなかったのでしょうか。イエスさまは、「この種のもは、祈りによらなければ決して追出すことはできないのだ」と答えられました。「この種のもの」とは代名詞で、「この悪霊は」祈りによってしかできないということで、信仰の結実としての祈りの必要を示していると思われま。弟子たちの不信仰とは、自分の信仰を過信し、神への信頼を欠き、祈りを忘れた信仰と言えます。「神には何でもできる」

準備のための聖書日課			
14日	㊦	マタイ9:27～31	信じているとおりになるように
15日	㊧	マタイ13:53～58	主イエスにつまずいた人たち
16日	㊨	マタイ17:14～20	からし種一粒ほどの信仰
17日	㊩	エフェソ6:18～20	根気強く祈り続けなさい
18日	㊪	ヘブライ12:1～3	信仰の創始者を見つめながら
19日	㊫	マルコ9:2～13	主イエスの栄光の輝き

と確約されたイエスさまの言葉に促され、神に心を開いた時、父親の願いが聞かれたように、弟子たちに必要だったのは主に委ねる信仰の祈りでした。



- イエスさま不在の場所で、群衆や弟子たちは息子の病を癒そうとしました

が、それは叶いませんでした。その時弟子たちや律法学者たちは、長い間苦しみを背負って生きてきた親子をそっこのけで、癒せなかったことについて議論をしていました。その態度を見てイエスさまは「なんと信仰のない時代なのか」と言われたと考えられます。今を生きる私たちは、いつも当事者に寄り添い歩まれたイエスさまの姿に何を見るでしょうか。

- 「奇跡」を祈りの答えとして捉えることや信仰の有無や強弱を表す指標とはならな

いと信じますが、私たちは目に見える結果で信仰や祈りを評価しがちです。息子と共に苦しんできた父親の祈りや願いに足りなさや弱さがあつたとは思えませんが、「できれば」と答えた父親に対するイエスさまの対応も信仰がないことへの叱責だったとは言えません。むしろ、「癒し」はどれほど強い信仰をもってしても人間にはできず、神にしかできないことを示すものです。私たちが求めているのは、自分の願いを実現させる神さまの力なのか、それともそれが叶わずともみ旨に委ねることで得る心の平安なのか考えてみる必要があります。

# 信仰のない時代に

聖書

マルコによる福音書9章14～29節

暗唱  
聖句

信じます。信仰のないわたしをお助けください。  
マルコ9：24

47  
課

2月  
20日

ペトロの告白の後、イエスさまはペトロ、ヤコブ、そしてヨハネだけを連れて高い山に登られました。すると、イエスさまの姿が変わり、雲の中から声がしました。「これはわたしの愛する子。これに聞け」。イエスさまがヨルダン川でバプテスマを受けた時以来の、イエスさまが神の子であることのしるしでした。

一行が残してきた弟子たちのもとへ戻ると、彼らは大勢の人たちに取り囲まれて律法学者たちと議論をしていました。いや、議論していたというよりも弟子たちは責められていたのです。なぜなら、そこにはある父親が連れて来た病気の息子がいて、弟子たちに癒<sup>いや</sup>してもらはずだったのに、誰もその息子を癒<sup>いや</sup>することができなかったからです。弟子たちは混乱していました。確かに以前、イエスさまから汚れた霊を追い出す力を授かり癒<sup>いや</sup>することができたのに、今度は9人がかりでもできなかったのです。自分たちの何が間違っているのか、弟子たちにも人々にも分かりませんでした。

そこへ、イエスさまが来られたのです。病気の息子の症状は今まで会った人の中で最も重いものでした。当時の人々にとって病気は悪霊の仕業だと信じられていましたから、その息子が癒されなかったのは、弟子たちよりも悪霊の方が強かったと思われるでも仕方なかったでしょう。人々はイエスさまに事の次第を説明しました。するとイエスさまは、「なんと信仰のない時代なの



か。いつまでわたしはあなたがたと共にいられようか」と憤<sup>いきどお</sup>って言われました。あれほど彼らが信じている神が力ある方であることをお示しになったのに、弟子たちも群衆も、その神に委ねる信仰の大切さを、そしてその神を証ししているイエスさまを信頼していなかったからです。弟子たちは、この世の基準で神をとらえ、自分たちの力で癒せると思い違いをしていたのです。

父親は必死にイエスさまに助けを求めましたが、それは「おできになるなら」と迷いながらの願いでした。イエスさまは、「『できれば』と言うのか、信じる者には何でもできる」と「神にできないことは何もない」こと、癒<sup>いや</sup>す力を持っておられる神に信頼し委ねるよう促されました。それは、父親を責めるのではなく、憐れみに満ちた言葉だったはずで、「信じます。信仰のないわたしをお助けください」。切ないほどの父親の信仰を見て、イエスさまは霊を叱り息子は癒されました。信仰のない時代にこそ主の憐れみがあふれています。

# 信仰のない時代に



聖書

マルコによる福音書9章14～29節

暗唱  
聖句

信じます。信仰のないわたしをお助けください。  
マルコ9：24

## 聖書から…

癒<sup>い</sup>しの奇跡物語をどう読んでいるでしょうか。イエスさまは「なんと信仰のない時代なのか」と嘆き、「信じる者には何でもできる」と言われます。本当にそうならばよいと思えます。でも、私たちは信じて祈っても願ひ通りにならないことがあることを知っています。それは私たちに信仰がないからなのでしょう。果たして「信仰」とは何なのでしょう。難しいですね。

悪霊に取りつかれた息子の父親は「おできになるなら、わたしどもを憐れんでください」と言ったことに対し、イエスさまは『『できれば』』と言うか、信じる者には何でもできる』と言います。でも「信じます。信仰のないわたしをお助け下さい」とあるがままの信仰を告白する父親をイエスさまは憐れんでくださっています。つまり私たちに求められている信仰とは「岩のような堅い信仰」なのではなく「共におられるイエスさまを信頼し、その方に憐れみを願うことができること」なのではないでしょうか。

このお話の最後にイエスさまは「祈り」の大切さを教えています。つまり、私たちが願ったようになるとは限らないけれど、すべてを委ねることができる方がいるということに心を留めることが「信仰」なのかもしれません。

## 分かち合おう

- 「悪霊を追い出す権能」を授けられていた弟子たちは、「成功体験」があったからでしょうか、「自分たちでできる」と思い込みイエスさまを呼びに行ったり祈ったりしなかったようです。悪霊が追い出せなかった彼らは焦ったことでしょう。もはや息子のためではなく自分たちの名誉のために必死になっているように思えます。イエスさまが「この種のものは、祈りによらなければ決して追い出せない」と言うのは、私たちが自分にはできないことを認め、神さまに委ねることが大切だということを感じます。
- 父親が「おできになるなら」と言った気持ちに共感します。多分父親はこれまでも息子のために助けを求め、その度に期待が裏切られていたと思うからです。期待しすぎない方が心は傷つきません。「12年間出血が止まらない女性」(マルコ5章)を連想します。しかし、それでもイエスさまなら何とかしてくれる(かもしれない)という「信じたいけれど信仰のない私」の期待を向けるとき、イエスさまはその思いに応えてくださるのでしょうか。さて私たちはどう祈っているのでしょうか。また何を祈っているのでしょうか。共に考えてみませんか。

47課

2月20日

# 信仰のない時代に

聖書 マルコによる福音書9章14～29節

暗唱 聖句 信じます。信仰のないわたしをお助けください。  
マルコ9：24

## 聖書から…

弟子たちは霊に取りつかれた子どもを癒すことができませんでした。人々は弟子たちが癒せないことを責めたのかもしれませんが、どうして自分たちにはできなかったのだろうか、と弟子たちは落ち込みます。

「おできになるなら助けてください」という父親にイエスさまは「『できれば』と言うか。信じる者には何でもできる」と言いました。イエスさまにできるかできないか、それを決めるのは私たちではありません。それを評価するのも、私たちではありません。病を癒すことができるのも、弟子たちの力でも私たちの力でもありません。私たちにできるのは、イエスさまならおできになる、イエスさまがしてくださる、と信じて祈ることです。でも、信じて祈ることすら私たちには難しいことがあります。イエスさまならできる。神さまにできないことは何もない、と信じて頼って任せて祈ること。そのことの大切さをイエスさまが教えてくださっています。

## 活動①

### 「一緒に立てるかな？」

- ①背中を合わせて座ります。できれば同じくらいの背の人が良いです。
- ②背中合わせのまま両方の腕を絡めます。
- ③息を合わせて立ち上がってみましょう。  
一人ではできないことも祈ってくれる人、支えてくれる人が居ることによってできることがあります。私たちを支えてくださるイ

エスさまがいつも私たちと一緒にいてくれることを思いつつ…。

## 活動②

## ワークシート

### 「誰を見ているの？」

●準備●ワークシート、厚手の画用紙、糊、はさみ、割り箸や棒（取扱い注意）、色鉛筆など

- ①ワークシートでペープサートを作ります。
- ②セリフを言いながら登場人物が誰を見ているのかを考えます（神さまの力？ イエスさまの奇跡？ 苦しんでいる人？ 弟子たちの力？ 群衆の目？ 律法学者の批判？ イエスさまは苦しむ人を見ずに批判をし合っている信仰のない人々を見て悲しんでいます）。

**律法学者**「弟子たちにはこの霊は追い出せないのか」

**群衆**「あっ、イエスさまだ」

**父親**「先生、息子が苦しんでいます。弟子たちには霊を追い出すことができません」

**イエスさま**「その子をわたしのところに連れてきなさい」

**父親**「できるなら助けてください」

**イエスさま**「『できれば』と言うのか。信じる者には何でもできる」

**父親**「信じます。信仰のないわたしをお助けください」

**イエスさま**「わたしの命令だ。この子から出て行け」

**弟子たち**「なぜ、わたしたちには追い出せなかったのでしょうか」

**イエスさま**「祈りによらなければ追い出すことはできないのだ」



群衆



弟子たち



苦しむ息子



イエスさま



律法学者



父親

## 明らかにされていく信仰

受難に先立ち、イエスさまはエルサレムに入城し、人々は戦いに勝利した王の凱旋を迎えるように熱狂的に歓迎しました。四福音書のどれもがその様子を克明に描き、続く神殿での出来事も記録していますが、ヨハネ書だけは宣教一年目の過越し祭の時の出来事として書き留めています。また、いちじくの木の出來事は、マタイ書とマルコ書にしか記されていません。ただ、ルカ書には、神の忍耐を願うたとえとしていちじくの木が登場しています（13：6）。

神殿の出來事といちじくの木の出來事の両方をつなげることによってマタイとマルコは、イエスさまと祭司長や律法学者、長老たちとの対立が深刻さを増し、イエスさまの受難が決定的になる様子を描いていくのです。

神殿境内での宮清めの出来事と、いちじくの木を呪う話は難解な出来事として受け止められています。なぜなら、イエスさまの驚くようなふるまいや、いちじくの実がなる時期ではないのにその実を求められたこと、エルサレム入城から受難までの唯一の奇跡がいちじくの木を枯れさせるという呪いの奇跡であったことなど、理解に苦しむからです。そのことから、この一連の記事は、いちじくの木にまつわる伝承の批判的解釈が神殿境内での出来事と結び付けられた物語と考えられています。

どちらの出來事も神の民であるイスラエルの信仰の実態を明らかにし、その不信仰に対する主の裁きを象徴しているのではないかということです。

## 神殿の境内にて

まず、神殿境内での宮清めは、イスラエルの神が一つの民族宗教を越えた、すべての国民の神であることを象徴し主張しているように思われます。それは、イザヤ書 56：7からの引用である、「わたしの家は、すべての国の人の祈りの家と呼ばれるべきである」（11：17）との言葉に見ることができます。境内での売り買いの様子は、ユダヤの民とその祭儀が本来の役割を果たしていないことを示し、いちじくの木の奇跡はそのイスラエルの信仰に対する裁きを象徴しているといえます。両替人は、巡礼の人々にとって神殿税を納める際に外国の貨幣を両替するため、鳩や動物は罪を贖う犠牲の代用として必要でした。しかし、祭儀そのものが宗教的搾取でしかなかったのです。イエスさまの「強盗の巣にしてしまった」との厳しい言葉は、イスラエル神殿の体制や指導者たちの靈的墮落への批判だったのです。

## いちじくの木に起こったこと

イエスさまが空腹となられたことを、イエスさまがイスラエルの信仰の内実を知ろうとされたことと考えれば、遠くから見た時いちじくの木が葉を茂らせていたことは神の民としてのイスラエルへの期待を持っていたことになります。そして、その木に実を見つけられなかったことは、期待への失望を意味し、イエスさまの呪いはその裁きを表していると言えます。それは、神殿でのイエスさまの行動が示している通り、民の救いのための祭儀

には何の意味もなく、彼らの信仰が形だけのものになっていることへの糾弾きゆうだんだったとも理解されます。つまり、それはユダヤ教に留まらず、神への礼拝ということは神に何かを捧げて何かを神から得るというものではなく、救いが一方的な神の恵みによることに作新されたことを意味しているのです。

根元から枯れたいちじくの木にとっての理不尽さは、十字架に向かわれた主イエスが受けられた理不尽さにつながります。しかし、その先には神の救いは必ず実現するという信心への希望があります。「祈り求めるものはすべて既に得られたと信じなさい」とのイエスさまの勧めは、主の祈りに「みこころの天になるごとく、地にもなさせたまえ」とあるように、神さまへの信頼を土台としているのです。

準備のための聖書日課			
21日	㊦	ルカ13:6~9	神は何を待つのか
22日	㊧	イザヤ56:1~8	すべての民の祈りの家
23日	㊨	マタイ6:9~13	御心が行われますように
24日	㊩	ヨハネー5:13~15	神の御心に適うこと
25日	㊪	マルコ4:26~29	豊かな実を結ぶために
26日	㊫	マルコ11:1~11	子ろばに乗る王



## 成人科

● 「いちじくの木のかい」と「神殿での出来事」には、共通して宗教指導者やイスラエルの民の信仰に対するイエスさまの厳しい批判的態度を見ることができません。それは、象徴的に神さまからの裁きを示していると言っても過言ではありません。ひるがえって自分自身の信仰を顧みると、彼らのことを非難かえりすることはできません。私たちはイエスさまに従って生きているのでしょうか？ 実を結ぶ信仰とはどんなことでしょうか？

● ルカ福音書では、実を探しに来た主人が園丁に、実を結ばなかつたいちじくの木を切り倒すように命じるたとえがあります(13:6~9)。しかし、園丁は、「手入れをするから来年まで待ってもらいたい。それでもだめなら切り倒してください」と主人に懇願します。そのたとえでは、「裁き」を迫る主人よりも、滅びをまぬかれるよう執り成す園丁の姿が強調されています。マルコ福音書の、「祈り求めるものはすべて既に得られたと信じなさい」や、「祈るとき、恨みに思うことがあれば、赦してあげなさい」と言われるイエスさまの言葉は、あなたにどのように響いてくるでしょうか。恵みによって救われた信仰に生きる大切さを思います。



# 神殿といちじくの木

聖書 マルコによる福音書11章12～26節

暗唱 聖句 わたしの家は、すべての国の人の祈りの家と呼ばれるべきである。  
マルコ 11:17

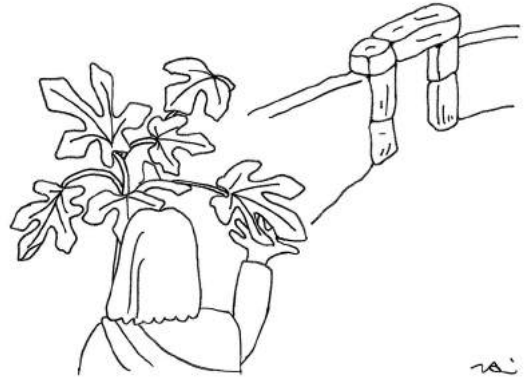
48課

2月27日

イエスさまは、多くの人々の歓迎を受けてエルサレムに入城されました。人々は、かつてイスラエルの民が王たちを迎えた時のように自分の服を道に敷き、野原から葉のついた枝を切って道に敷いて喜んでイエスさまを迎えたのです。町に入られてからイエスさまは、神殿の様子を見た後、ベタニアに退けられました。

あくる日、都に上る途中でイエスさまは空腹を覚え、遠くにいちじくの木を見つけ、実がなっていないか確かめられました。しかし、木には葉のほかは何もありませんでした。いちじくの季節ではなかったからです。ところが、イエスさまはそのいちじくの木に向かって「今後、いつまでもお前から実を食べる者がないように」と呪いの言葉をかけられたのです。一説には、いちじくの木はユダヤ王国を象徴しているといわれています。そこにはイエスさまの思いがあったのでしょうか。

一行はエルサレムに入るやいなや神殿の境内に入りました。そして、イエスさまはそこで売り買いしていた人々を追い出し、両替人の台や鳩を売る者の腰掛をひっくり返されました。また、境内を歩いて物運ぶこともお許しにならなかったのです。弟子たちがそんな激しいイエスさまを見たのは初めてで、彼らも動揺したに違いありません。そして、イエスさまは聖書の言葉を引き、教えて言われました。「『わたしの家は、すべての国の人の祈りの家と呼ばれるべきである』ところが、あなたたちはそれを強盗の巣にしてしまった」。



エルサレムの神殿を司る者たちは、信仰の名のもとに人々から財産を奪い取っていたのです。それは天国から盗みをしているのと同じだとイエスさまは言われたのです。実をつけないいちじくの木、それは彼らのことだったのです。それを聞いた祭司長や律法学者たちは激怒し、イエスさまを殺そうと考えました。群衆がその教えに心を打たれ、自分たちの立場がなくなると恐れたからです。

あくる日、イエスさまの教えの正しさが証明されたかのように、言葉の通り、いちじくの木は根元から枯れていました。「先生、ご覧ください…いちじくの木が枯れています」。この出来事の中心は、いちじくの木に起きたことにではなく、神のみ心は必ず実現することにあるようです。イエスさまがおっしゃった「祈り求めているものはすべて既に得られたと信じなさい」という意味は、神のみ心にそった祈りは聞かれるということ、祈ることの原点は主に信頼してみ心を求めることなのです。

# 神殿といちじくの木

青少年科



聖書

マルコによる福音書11章12～26節

暗唱  
聖句

わたしの家は、すべての国の人の祈りの家と呼ばれるべきである。  
マルコ 11：17

## 聖書から…

季節ではない時期に実がなっていないからといちじくの木を呪うなんて理不尽な言いがかりにしか思えません。やっぱり空腹だと怒りやすくなるのでしょうか。イエスさまは「人はパンだけで生きるものではない。神の口から出る一つ一つの言葉によって生きる」(マタイ 4：4) と言っていますから、何かの理由があるはずです。もしいちじくがイスラエルの信仰の内実を象徴しているなら、実を結んでいないことは民衆が身体的にも信仰的にも飢餓状態になっていたということです。だから人々はイエスさまに「ホサナ (今こそ救い給え)」と期待したのではないのでしょうか。人は体も心も満たされることを求めます。そのために神殿(教会)にできることは何でしょうか。

神殿は「すべての国の人の祈りの家」であると言いますが、本当にそうしようと思うとかなり大変です。神殿での動物売買は地方に住む人々が犠牲を捧げるためであり、両替商は神殿に納める献金を換金するためにありました。それらはむしろ「すべての国から集う人」のために必要なことであつたと言えます。でもその背後にはやはり神殿から排除される人々がいたのです。イエスさまはその人々のために悲しみ嘆かれたように受け取れます。

## 分かち合おう

- イエスさまはなんでベタニアを出た時に空腹だったのでしょうか。エルサレムとの距離は3kmくらいですから、朝や昼にごはんを食べなかったからだとしか思えません。もしかして宿泊されたベタニア(貧しい者の家)には、日ごとの糧にも瀕するほどの状況があつたのかもしれない。華やかな賑わいの神殿から無視されたようなベタニアにイエスさまは心を寄せて憤られたのかもしれない。富は集中し格差は広がります。みんなで共に食べられるようになるためにはどうしたらよいでしょうか。
- イエスさまの「宮清め」は一見暴力的な行動のようですが、造られた制度や構造を一度壊し、「祈りの場」とは何かを考え、新しく建て上げようというイエスさまの強烈な招きの声にも聞こえます。この言葉を教会で実現させるためにどうしたらよいでしょうか。歴史ある教会を変化させていくことは簡単ではありません。覚悟が必要です。「変わりたくない」という抵抗もあるかもしれませんが、イエスさまの招きに向かい合っていく時、まさに山をも動かすことができるようになるのではないのでしょうか。

48課

2月27日

# 神殿といちじくの木

聖書 マルコによる福音書11章12～26節

暗唱聖句 わたしの家は、すべての国の人の祈りの家と呼ばれるべきである。  
マルコ 11:17

## 聖書から…

教会に行く時に何を持っていますか？ 礼拝に必要な物はなんですか？ どのような思いで礼拝に行きますか？ 今日の聖書箇所は、いちじくの木に実がなっていないかったことと、神殿に礼拝のために来た人たちの見た目だけの信仰を重ねて問いかけています。いちじくの木に大きな葉っぱがついています。でも、木が大きくても葉が大きくても実がなければ意味がありません。立派な服を着て神殿で偉そうにしている人たち、物を売ったり買ったりすることで商売をする人たち、物を買って献げることで神さまの祝福や赦しまでも買えると思っている人たち。イエスさまはこのような神殿を見て悲しくなり怒りました。「わたしの家は、すべての国の人の祈りの家と呼ばれるべきである」。礼拝に必要なのは神さまを愛し信頼して祈る心です。私たちの礼拝も、見せかけの形ばかりの礼拝になっていないでしょうか。心からの礼拝が期待されています。

## 活動①

### 「礼拝に持っていく心」

●準備●模造紙、スタンプ台

- ①いちじくの木は手のひらの形と似ています。模造紙に大きな木を描いて、手のひらにスタンプ台で色をつけていちじくの木のように手形をつけましょう。
- ②いちじくの実に礼拝に持っていく心を書いて貼りましょう。

- ③いちじくの実に今の思いや祈りの課題を書いて貼ってもらいましょう。



## 活動②

## ワークシート

### 「正しい暗唱聖句はどれでしょう」

●準備●ワークシート、はさみ

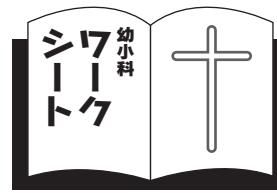
- ①ワークシートを線にそって切り離し、聖句カードをつくりましょう。
- ②カードを正しく組み合わせ、暗唱聖句を完成させましょう。
- ③完成させた暗唱聖句を覚えましょう。

## 活動③

### 「すべての人の祈りの家を描く」

教会は私たちにとってどんなところでしょう？ コロナの影響で教会に集うことが難しくなり一緒に食事をする、一緒に賛美することも難しくなっているかもしれませんね。

イエスさまが願っておられる教会の姿はどのような姿でしょうか。「すべての人の祈りの家」と呼ばれる教会の姿を絵に描いてみるのもいいですね。どのような人がそこには集っているのでしょうか。



わたしの家は	あなたの家は	イエスさまの家は	神の家は
祭司の家は	弟子の家は	ユダヤ人の	ギリシア人の
異邦人の	日本人の	すべての 国の人の	交流場と
学びばと	祈りの家と	献金所と	遊び場と
しょくじどころ 食事処と	呼ばれる べきである。	宣伝する べきである。	なるべき である。

## 最後の問答

エルサレムに上られた後、神殿から商人たちを追い出すというイエスさまの行動は祭司長や律法学者たちの強い反感を買ってしまいます。彼らとの問答が終わると、今度はサドカイ派の人々が近づいて来ました。サドカイ派は、貴族階級や大祭司によって構成され、モーセの律法を唯一の規範とし、復活を否定していました。イエスさまは受難について三度も予告されましたが(8：31、9：31、10：33、34)、それは弟子たちに対してだけで、他の者は知らなかったはずで、ですから、サドカイ派が復活について言及したのは、彼らと対立し復活を信じているファリサイ派を封じ込めるためであったと思われます。もし、イエスさまが復活を肯定すれば、イエスさまをファリサイ派に仕立てて糾弾することができたのです。これに対し、イエスさまは彼らの間違いを明確に正されました。そして、それを聞いていた一人の律法学者は、最も重要な掟について質問をし、イエスさまが「唯一の主である神を愛すること、隣人を自分のように愛すること」と答えられたことに感心し、もはやあえて質問する者はありませんでした(12：34)。こうして、受難を前にユダヤ教指導者たちとの一連の問答に、イエスさまはみ言葉をもって終止符を打たれたのです。

## 思い違い

サドカイ派の人々は、両派にとって共通の

規範であったモーセの律法の一つ、レビラート婚(申命記25章5節以降に見られる、兄弟のうち一人が子どもを残さず死んだなら、死んだ者の妻は亡夫の兄弟がめとり、その名を継がなければならないという規定)を利用し、復活への疑問を投げかけたのです。すなわち、七人の兄弟が次々に死んで、女性が皆と結婚したら復活の際その女性は誰の妻になるのかと問い詰め、「復活」が引き起こす「矛盾」をつきつけたのです。

イエスさまは、それを大変な「思い違い」とし、その理由として、「聖書も神の力も知らないから」だと言われます。「思い違いをしている」は、ギリシア語でプラナオー(迷わされている・だまされている)という言葉が使われています。「復活」を人間の思いやこの世の常識で捉え、神の力によることを知らないでいる、とイエスさまは反論します。「復活するときには、めとることも嫁ぐこともなく、天使のようになる」との言葉も、この世の基準秩序ではなく、神が定められた新しい姿をまとった者になることを示唆しています。私たちも死後のことについて人間の考えやイメージを優先し、思い違いしてはいないか問われます。

## 生きている者の神

サドカイ派の人々は、モーセの律法の中に復活についての言及がないことから復活を否定していました。しかし、イエスさまは、モーセが燃える柴の前で神と対面した際の神さまの言葉を示されます。「わたしはアブラハ

ムの神、イサクの神、ヤコブの神である」という神の自己啓示は、創造主である神が、死んでしまった族長たちの神であられるなら、当然彼らを復活させることができることを表しています。また彼らに対する約束は消え去ることはないということ。だから神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神なのです。イエスさまが、「神はこんな石ころからでも、アブラハムの子たちを造り出すことがおできになる」(ルカ 3:8) と語られたように、神は創造の神であり、すべての被造物のいのちの源なのです。そして、その神はモーセに対して「わたしは必ずあなたと共にいる」(出エジプト 3:12) と約束されたように、多様化した今の時代を生きる私たちと共にいてくださる同じ神なのです。

準備のための聖書日課		
28日	㊦	使徒言行録 23:6~10 死者の復活の 望みを抱いて
1日	㊦	ヨハネ6:34~40 終わりの日の 復活を信じて
2日	㊦	申命記25:5~6 亡き兄弟の名を 残すために
3日	㊦	出エジプト記 3:1~6 わたしはあなたの 父の神である
4日	㊦	出エジプト記 3:11~15 わたしは必ず あなたと共にいる
5日	㊦	マルコ12:28~34 愛への集中



## 成人科

● ユダヤ人の死生観に切り込んだイエスさまの言葉が今を生きる私たちに迫ります。東日本大震災をはじめ近年頻発する災害や新型コロナウイルス感染拡大による危機感を通して、死生観を問われる時代に私たちは生きています。「死」は遠い未来の話ではなく、「生」と背中合わせにあると思います。先日、ラジオの「子ども電話相談」番組で、小学校低学年の子どもから「死んだらどうなるの」と、質問が寄せられました。教会や家庭でそのように問われたら、あなたはどうか答えますか。

● サドカイ派の人々は、彼らの時代には常識であった女性蔑視の制度といえるレビラート婚のもと、復活の際起こるであろう矛盾を突いてイエスさまに質問しました。私たちはこの世の常識の延長線で死後の世界を想像しがちです。イエスさまが二度も、「あなたたちは大変な思い違いをしている」と忠告されたのは、「生」と「死」を分けて考えてしまう私たちの間違いに気づかせるためだったのでしょうか。「生」と「死」については、誰もが無関係ではありません。率直に分かち合ってみましょう。どの時代にあっても、神は今を生きる私たちと共におられる神であることをおぼえたいと思います。

# 生きている者と共に

聖書

マルコによる福音書12章18～27節

暗唱  
聖句

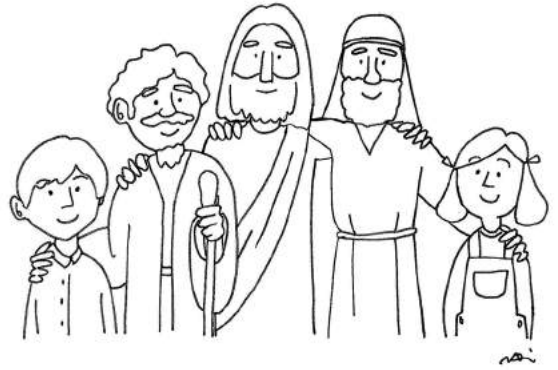
神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神なのだ。  
マルコ 12：27

49課

マルコ

祭司長や律法学者、ファリサイ派の人たちはイエスさまを問い詰めましたが、そのほとんどが、イエスさまを陥れるために考えられた巧妙なものでした。そのたびごとに、イエスさまの知恵ある答えは彼らを驚かせました。そして、入れ替わるように立場の違うサドカイ派の人々がイエスさまのもとやって来て尋ねました。彼らは、律法学者やファリサイ派と対立していた人々でした。彼らはファリサイ派もその権威を認めていたモーセ五書の申命記 25 章にある結婚についての規定を選び、「復活」について質問したのです。ファリサイ派は「死後の世界」も「復活」も信じていましたが、サドカイ派は信じていませんでした。そこでサドカイ派が考えたのが、「七人兄弟の一人が妻をめとり、死んだらその女性は別の兄弟の妻となる規定」を利用した問題でした。次々に兄弟が死んで、妻は別の兄弟の妻になり、皆が死んで、復活したらその女性は誰の妻となるのかという、女性蔑視といえるこじつけ問題でした。

イエスさまはすぐさまその根本的な間違いを指摘しました。それは、復活は人間の常識を超えた、神の力によるもので、この世の基準とはまったく違うということです。復活した者たちは、家を継がなければならないとか、結婚しなければならない、子どもを産まなければならないなどといったこの世のきまり事から解放されるということです。イエスさまにとっての復活は、ファリ



サイ派の、「死んだ後にはこの世にまさる幸福がある」と考える復活の希望とはまったく違ったものでした。そしてイエスさまは、彼らにとって最も大事な聖書の箇所であるモーセの「柴」の書を示し、『わたしはアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である』とあるではないか。神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神なのだ』と言われたのです。それは、その時既に死んでいたアブラハム、イサク、ヤコブが今も生きているということを言っているではありません。そうではなく、神は、彼らを創造し、彼らの一生を導いた神であり、彼らを死者の中から復活させることのできる力ある方であるということです。言い換えれば、「わたしはアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神、そして生きているあなたと共にある神である」ということです。イエスさまは、「あなたたちは大変な思い違いをしている」と、彼らが間違った物差しで神さまや神さまの力を測っていることを教えようとなさいました。

# 生きている者と共に

青少年科



聖書

マルコによる福音書12章18～27節

暗唱  
聖句

神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神なのだ。  
マルコ 12：27

## 聖書から…

「あなたたちは大変な思い違いをしている」。二度にわたるイエスさまの言葉が非常に痛快です。「復活の時に女が7人の内、誰の妻になるか」という質問自体むちゃくちゃなものですが、大変な思い違いとは「復活した後も女性は男性に属する者になる」という男性目線の差別的な教えのことであり、聖書を自分たちの主張のために利用するサドカイ派の人たちの姿です。

彼らは神の言葉も女性の命もないがしろにしています。イエスさまは「復活するときには、めとることも嫁ぐこともなく、天使のようになる」と言います。それは復活した人は「神に属する者になる」ということです。ですから「わたしはアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である」に付け加えれば、「サラの神、リベカの神、レアの神、ラケルの神である」ということでしょう。彼女たちは家制度維持のために大変な苦勞をされました。でもそんな苦勞とは離れ、「神に属する者になること」が「新しい命に生きること（復活）」だと言うのです。それは神以外の言葉から解放されることでもあります。「聖書と神の力」というものは、「個人のいのち」の解放、尊厳の回復、つまり自分が自分らしく生きていくということではないでしょうか。

## 分かち合おう

- サドカイ派の人たちが引き合いに出したレビラート婚の教えには、伝統的なユダヤの家父長制的結婚観がありました（「聖書の学び」参照）。そのような結婚観の元で、今、結婚したいと思う女性はいるでしょうか。日本にも同じように「女性は家を守るもの」という古い理解があります。一人ひとりの命を守り育てていくための「家」が、「文化」と「伝統」によって強化され「制度」となり、次第に「使命」であり「美德」であると置き換えられていきました。イエスさまはその結婚観にも一石を投げ、神に属する者としての対等な立場を示しているように思えます。
- サドカイ派の人たちがそうであったように、私たちも自分の持っている枠組みの中でしか物事を考えることができません。しかしイエスさまに出会っていく時に、私たちの枠組みが崩されていきます。ここでの「復活」とは、「死者の甦り<sup>よみがえ</sup>」というよりも、まさに今「正しい者たち、正しい教え」からないがしろにされている人たちのいのちを回復させることではないでしょうか。いま私たちの身の周りでもないがしろにされている人たちがいます。その人たちと共に生きる為にどうしたらよいでしょうか。

49  
課

3月6日



# 生きている者と共に

聖書 マルコによる福音書12章18～27節

暗唱 聖句 神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神なのだ。  
マルコ 12:27

## 聖書から…

死んだらどうなる？ 復活したらどうなる？ イエスさまの復活を信じる私たちは、私たちにも死後の復活があると考えられているのでしょうか。

復活を信じるファリサイ派の人たちと、復活を信じないサドカイ派の人たちは、いつも言い合いをしていました。復活を信じていないサドカイ派の人が、イエスさまに復活についてたずねました。「夫を7人失った女性は、復活したら誰の妻になるのか」という質問です。どうしてこんな質問をしたのでしょうか？ イエスさまを困らせたかったのでしょうか？ イエスさまは「あなたたちは大変な思い違いをしている」と言って、「神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神なのだ」とお答えしました。たとえ話に出て来るこの女性も神さまのものです。命をつくり出してくださる神さまは、今を生きる私たちの神さまであり、たとえこの体は死んでも、変わらずに永遠の命を共に生きてくださるのです。私たちは神さまに愛されているものとして、復活のイエスさまに会えることを信じたいと思います。

## 活動①

「死んだらどうなるの？  
復活したらどうなるの？」

天国について一緒に考えてみましょう。  
死んだ後のことは実は誰にも分かりません。

でも神さまがいること、復活のイエスさまがいることを知っているなら、恐がることはありません。復活したらどうなるの？絵に描いてみても楽しいですね。

『このあとどうしちやおう』（ヨシタケシンスケ著 ブロンズ新社）を参考にしてもいいですね。自分なりの『このあとどうしちやおう』を描いてみましょう。

## 活動②

## ワークシート

### 間違い探し

「あなたたちは大変な思い違いをしている」

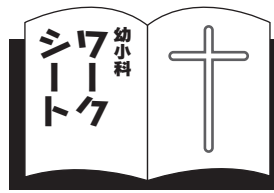
イエスさまと向き合い慰められる女性、周りにはアブラハム、イサク、ヤコブがいます。7人の男性が離れたところで言い争いをしています。二つの絵を見比べて間違いを探しましょう。

間違いは7つあります。

解答

- ① イサクとヤコブの位置が反対
- ② 元夫の人数が違ふ
- ③ 女性の表情が違ふ（泣き顔、笑顔）
- ④ 鳥の数
- ⑤ 花の種類
- ⑥ イエスさまの服装
- ⑦ アブラハムの身長





# 裏切る者と共に

聖書

マルコによる福音書14章10～26節

暗唱  
聖句

杯を取り、感謝の祈りを唱えて、彼らにお渡しになった。  
彼らは皆その杯から飲んだ。マルコ14：23

## ユダ、動く

過越祭が近づき、事態は急展開を迎えます。十二人の一人、イスカリオテのユダがイエスさまを裏切り、ユダヤ教指導者たちに売り渡そうと行動に出たのです。これは、ユダが金銭欲からの動機でイエスさまを裏切ったのではなく、ユダの思い違いからの失望、すなわちイエスさまを民族的指導者として期待していたことへの失望が裏切りにつながったのではないとも考えられます。また、「引き渡す」というギリシア語パラディドマイには、「捕える」という意味もあり、マルコ福音書では受難との関連で使われていることから、ユダの人間的な動機によるというより神の定めを暗示します。

## 過越の食事の席で

除酵祭初日、過越祭の一環である過越の小羊を屠る日、弟子たちは食事の場所についてイエスさまに尋ねました。過越の小羊は必ず神殿で祭司によって屠られたものでなければなりませんので、エルサレムに行く必要がありました。イエスさまは二人の弟子を都に送られました。そこでは、イエスさまがエルサレムに入城された時に、子ロバが用意されていたように、食事の席も備えられていたのです。これも神の定めを感じさせ、受難の出来事も神の備えた道であると捉えるマルコ福音書の特徴が表れています。

夕方、食卓が整い、一同が席に着いて食事をしている時、イエスさまは弟子のうちの一

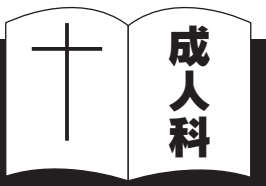
人が裏切ろうとしていることを告知されました。「はっきりしておく」は、直訳すると「アーメン（まことに、確かに）、言う」で、イエスさまの宣告の時のみに使われている言葉です。すると、弟子たちは心を痛めて、「まさかわたしのことでは」と代わる代わる言い始めたのです。おそらく、弟子たちの中にはイエスさまに対する疑いの思いがあったのかもしれませんが。そのことを突かれて、「決してそんなことはあるはずがないです」と言える自信もありませんでした。イエスさまに否定してもらおうと自分のことだけを心配する様子に、このとき既に弟子たちに分裂が始まっていることがうかがえます。そして、イエスさまは「わたしと一緒に鉢に食べ物を浸している者がそれだ」と言われます。その表現には、イエスさまのすぐそばに座るほど親密な仲だった者が裏切り者となったというイエスさまの悲しみが強調されています。これまで従ってきながら、ここにきて失望し、裏切ってしまうことになったユダのイエスさまへの表裏一体となった複雑な感情を感じさせます。さらに著者マルコは、21節で「人の子は聖書に書いてあるとおりに、去って行く」として、こうした裏切りもそれが神の定めであることを暗示しています。裏切る者も、裏切られる者も、この晩、神の用意された食卓の前に座っていたのです。

## 主のパンと杯を受けながら

マルコ福音書と他の共観福音書ではイエスさまの最後の晩餐が過越の食事と同じになっ

ており、主の晩餐の制定としても知られています。弟子の裏切りの宣告という衝撃的な出来事の中で主の晩餐が行われたことを私たちは心に留める必要があります。イエスさまと弟子たちは日々食卓を囲み、その度にイエスさまは賛美の祈りを唱え、パンを裂き、感謝して杯を分かち合っておられました。しかしあの晩、弟子たちはどのような思いでそれを受け取ったことでしょうか。イエスさまが最後の食事の場で宣言された、「これはわたしの体である」「これは、多くの人のために流されるわたしの血、契約の血である」との言葉が私たちにも迫ります。私たちは、あの晩の弟子たちと同じように戸惑いや裏切りも心の内に持ちながら、主の食卓に与っているのではないのでしょうか。

準備のための聖書日課			
7日	㊦	マルコ12:35~37	王を超えるメシア
8日	㊦	マルコ12:38~44	献げて生きる
9日	㊦	出エジプト記 12:1~14	主の過越の祭り
10日	㊦	ヨハネ6:66~71	十二人のひとり は悪魔
11日	㊦	ヨハネ13:21~30	サタンがユダの中に
12日	㊦	マルコ14:3~9	彼女を記念して



## 成人科

● 人間関係の中で、特に信頼している人から裏切られることほど辛く苦しいことはありません。イエスさまは、過越しの食事の席で、弟子の一人の裏切りを予告されました。それは、イエスさまにとってどれほど辛く苦しいことだったでしょう。しかし、その一人の裏切り者からすれば、イエスさまもまた彼を失望させた人だったのです。マルコ福音書ではその後、ユダがイエスさまを売ったことを後悔し、死んでしまうことについては触れていませんが、裏切りはペトロや他の弟子たち全員に及ぶという生々しい現実を伝えます。

福音のために苦労して来た同胞たちから見捨てられることを知った上で、裏切る者と共に分かち合われたパンと杯に「主の晩餐」における主の愛の深さと大きさを覚えます。

- 裏切ることと裏切られること、日常生活でも起こり得ることです。そんな体験はないのでしょうか。その時、思ったこと、感じたことを分かち合うと、少しイエスさまや弟子たちの心情が分かるかも知れません。そして、私たちの弱さを超えて赦してくださる神の愛の深さを、信仰を決心した時のことを思い出しながら分かち合ってみましょう。

# 裏切る者と共に

聖書

マルコによる福音書14章10～26節

暗唱  
聖句

杯を取り、感謝の祈りを唱えて、彼らにお渡しになった。  
彼らは皆その杯から飲んだ。マルコ 14：23

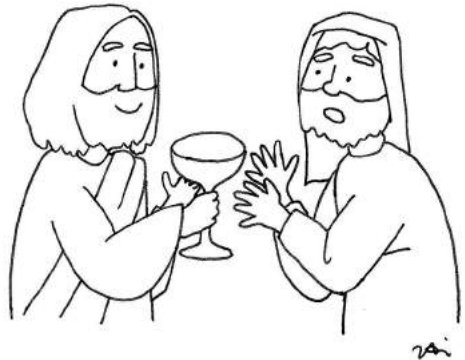
50  
課

3月13日

エルサレム入城以来、イエスさまとユダヤ教指導者たちとの溝は深まるばかりです。それは、イエスさまが原因というより、彼らのねたみや嫉妬によるものでした。彼らは様々な計略を用いてイエスさまを捕えて、なんとか殺そうと考えていました。そのような中、イエスさまはベタニアにある重い皮膚病を患ったシモンの家で、一人の女性から高価な香油の注ぎを受けられました。イエスさまの言葉によれば、それはこれから受ける苦しみに伴う葬りの準備でした。片や、イエスさまと弟子たちとの関係には変化が生じていました。

十二人の弟子の一人、イスカリオテのユダがイエスさまを引き渡そうとして祭司長のところに出かけて行きました。民衆が騒ぐといけなないので祭の間は避けようとしていた指導者たちでしたが思いもよらない機会が巡って来たのです。イエスさまに愛され、師と仰いでいたユダがどうして裏切ったのかは分かりません。しかしその時、ユダは礼金を受け取る約束をただけで、すぐに受け取らなかったことからお金が目的ではなかったことは確かでした。もっと深い理由があったのかも知れません。

整えられた過越の食事の席で、イエスさまは唐突に言われました。「あなたたちのうちの一人がわたしを裏切ろうとしている」、何という衝撃的な言葉でしょう。今まで福音のために労苦を共にしてきた弟子たちは混乱し、ぎしんあんき疑心暗鬼に陥ったことでし



よう。イエスさまは、「はっきり言っておく」と疑いようのない現実を突きつけ、それがユダであることを示されました。それまで強い信頼で結ばれていた弟子たちの関係に亀裂が生じた瞬間でした。

重い沈黙の中、イエスさまはパンを手に取り、賛美の祈りを唱えてそれを裂き、杯を取り感謝の祈りを唱えて弟子たちに渡されました。それは、日々行われていた食前の儀式でしたが、突然、最後の食事の別れの言葉となったのです。「取りなさい。これはわたしの体である」「これは、多くの人のために流されるわたしの契約の血である」そこにはユダも、その後イエスさまを裏切ることになるペトロも、そして弟子たち皆がいました。それは、裏切る者と共に分かち合われた最後の食事となったのです。主の晩餐を受けるに相応しい者とは誰なのか、考えさせられます。そして、イエスさまは復活によって到来する新たな席で、新たな関係による食事の時を約束し、一同は賛美の歌をうたい、オリーブ山に向かったのです。

# 裏切る者と共に



聖書

マルコによる福音書14章10～26節

暗唱  
聖句

杯を取り、感謝の祈りを唱えて、彼らにお渡しになった。  
彼らは皆その杯から飲んだ。マルコ14：23

## 聖書から…

「最後の晩餐」の物語を読んで印象的なのは、イエスさまは裏切る弟子が分かっているのに追い出さず、一緒に食事を分かち合っていることです。つまり、イエスさまは裏切る弟子の存在もその意図も受け止めているわけです。

当事者であるユダはそのイエスさまをどのように見ていたのでしょうか。

彼がイエスさまを裏切った理由は金銭目的とも言われますが、真相は不明です。でもイエスさまを引き渡す意思は彼から出たものでした。裏切りの告知を受けた時、彼は「バレてる」とドキドキしたことでしょう。弟子たちの間で自己弁護や犯人捜しも始まりました。すべてがばれることも覚悟したでしょう。ところが、語り始められたイエスさまの言葉にはユダへの慰めが感じられます。「人の子を裏切る者は不幸だ。生まれなかった方がその者のために良かった」。とは、「わたしのために」ではなく「その者のために」です。イエスさまはユダが負っていた苦しみ、これから負うことになる苦しみに共感したのです。

ユダは裏切り者か、それとも神の定めの手伝いはわかりません。しかし大切なのは、イエスさまはこのユダをもみ許に招きパンを裂き、慈しまれたことなのです。

## 分かち合おう

- ユダと言えば「裏切り者」のレッテルがありますが、本当に裏切り者だったのでしょうか。相手に良かれと思いやったことが、結果的に悪くなってしまうこともあります。他の箇所（マタイ27：5、使徒1：18）では、彼はイエスさまを引き渡しはしましたが、有罪判決に驚き、後悔してお金を返した後、自ら命を絶つという結末があります。著者マルコは彼のその後は何も書いていません。大切なのはユダ個人の事柄や結末ではなく、このユダをありのまま受け入れたイエスさまなのです。イエスさまとユダの気持ちについて話し合ってみましょう。
- 弟子たちは「まさか私のことでは（ないですよ？ 他の人のことですよ？）」と言います。自分は潔白だと言いきれないのはやましさがあるときです。ペトロは「私は決して裏切りません」と言いますが、そうできるとは限りません。自分で自分の正しさを証明することはできません。でもイエスさまはそんな人をただ一方的に主の晩餐に招いてくださっています。私たちもまたこのイエスさまを記念し、イエスさまに従うために主の晩餐を守ります。私たちはこの主の晩餐で、誰と共に何を分かち合っているか話し合ってみましょう。

50課

3月13日

# 裏切る者と共に

聖書

マルコによる福音書14章10～26節

暗唱  
聖句

杯を取り、感謝の祈りを唱えて、彼らにお渡しになった。  
彼らは皆その杯から飲んだ。マルコ 14：23

## 聖書から…

みんなで食事をしている時にイエスさまが「あなたたちのうち一人がわたしを裏切ろうとしている」と言いました。弟子たちはみんなドキッとしました。「わたしではないですよ」「あの人かな」「わたしかも…」、混乱する弟子たちと共に、イエスさまは最後の食事をしました。イエスさまを裏切る弟子も一緒にいます。他にも自分が裏切ってしまうかもと心配している弟子や、お互いを疑う弟子たちもいたでしょう。そのような弟子たちをイエスさまは主の晩餐へ招くのです。私たちもその主の晩餐に招かれています。イエスさまを裏切ってしまうかもしれない、他の弟子たちと仲良くできないかもしれない。それでも「十字架を思い出して、わたしに従いなさい」とイエスさまは私たちを招いてくださっています。

## 活動①

### 「裏切り者は誰だ？」

#### ●準備●トランプ

- ①人数分より一枚少ない枚数を取り、ジョーカーを一枚足します。
- ②トランプを一枚ずつ配ります。
- ③代表者が「裏切り者はあなたですか？」と一人ずつ質問します。
- ④「わたしではありません」と一人ずつ答えます。
- ⑤誰がジョーカーを引いた「裏切り者」かをみんなで当てましょう。

⑥何度か繰り返します。次は自分かもしれない。自分が裏切り者かもしれない。あの人かもしれない。と考えながら、裏切る人も一緒にイエスさまは食事に招いてくださったことをについて考えてみましょう。

## 活動②

## ワークシート

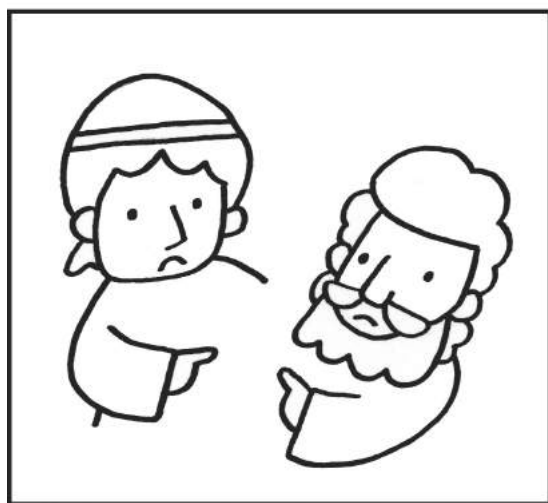
### 「私と共なるイエスさまカードを作ってみよう」

●準備●ワークシートのコピー複数枚、同じ大きさの白カード複数枚、色鉛筆

- ①ワークシートのカードを切り離します。
- ②別に各自で用意した白カードには、各メンバーが自分の日常の様子のイラストを描きます。ご飯を食べている様子やペットと遊んでいる様子、ゲームしている様子やテレビ観ている様子など。
- ③すべてのカードを、裏を向けて場に並べます。
- ④順番にカードを1枚裏返していきましょう。絵カードを引いた人は、絵カードはそのまま場に残します。イエスさまカードを引いた人は、そのままカードをもらいます。すでに場に絵カードがあれば、その絵カード1枚の上にイエスさまカードを重ねて2枚とも自分のカードにできます。だれがたくさんカードを手に入れるでしょうか。

\*どんな弟子とも、どんな私とも、共にいてくださるイエスさまをおぼえましょう。

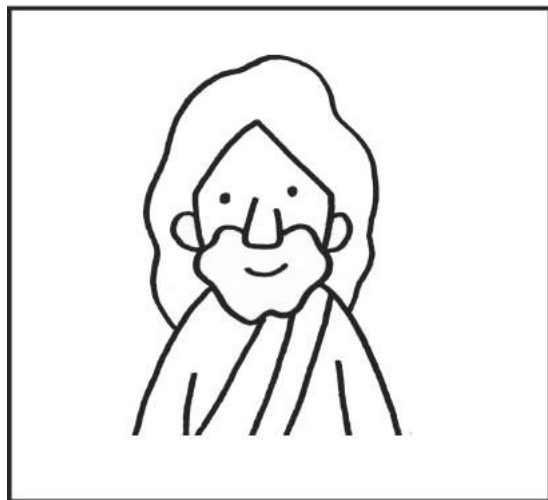
# 私と共なるイエスさまカードを 作ってみよう



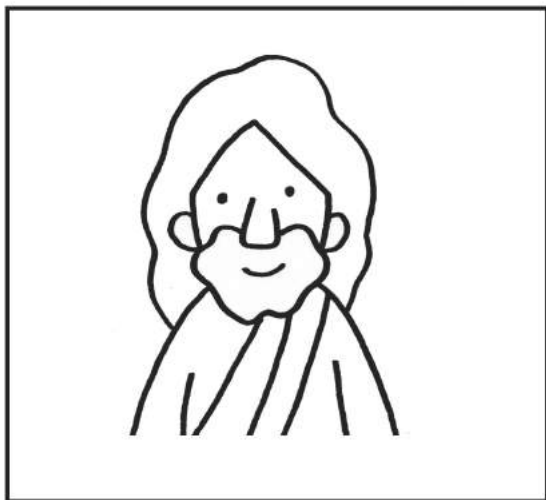
指をさしあう弟子



お金を持つユダ



イエスさま



イエスさま



# 心は燃えていても

聖書

マルコによる福音書14章27～42節

暗唱  
聖句

誘惑に陥らぬよう、目を覚まして祈っていないさい。  
心は燃えても、肉体は弱い。マルコ14：38

## 弟子たちの覚悟

最後の晩餐の後、一行がオリーブ山に向かう途中、イエスさまは弟子たちに言われました。「あなたがたは皆わたしにつまずく」と、それは裏切りを意味します。先立つ晩餐の席では、弟子の一人が裏切ることが告げられ、弟子たちにとってはそれだけでも強い衝撃です。ところが、今度は弟子たち「皆」がイエスさまにつまずくと言うのです。ゼカリヤ書13章7節の「羊飼いを撃て、羊の群れは散らされるがよい」という預言が引き合いに出されますが、弟子たちには受け入れがたい告知です。すぐさまペトロが、それを否定しました。他の弟子たちはどうあれ、自分はずまずかれないと言うのです。しかし、イエスさまはそれさえも退け、「今日、今夜、鶏が二度鳴く前に、三度わたしのことを知らないと言うだろう」と断言されました。死んでも言わないと言い張るペトロや弟子たちでした。結局、イエスさまの予告の通りとなるのですが、「復活した後、あなたがたより先にガリラヤへ行く」と語るイエスさまの言葉に、私たちは希望を持つことができます。

## アッバ、父よ

ゲツセマネ（「油絞り」の意）に来ると、イエスさまは弟子たちに、「わたしが祈っている間、ここに座っていないさい」と命じます。そして、ペトロ、ヤコブ、ヨハネを伴いながら、ひどく恐れもだえ始めて、彼らに言われました。「わたしは死ぬばかりに悲しい。ここを

離れず、目を覚ましていなさい」と。そして、地面にひれ伏し、「できることなら、この苦しみの時が自分から過ぎ去るように」と、祈られました。「なんでもおできになる父」として、全き信頼をよせる神に向かって、イエスさまはこの杯が取りのけられることを切に祈り続けます。しかし、次の瞬間「わたしが願うことではなく、御心に適うことが行われますように」と祈られました。そこには、生身のイエスさまの祈り葛藤する姿があります。

一方弟子たちは、イエスさまに命じられたにもかかわらず、わずか一時も目を覚ましていられず、眠り込んでいました。「心は燃えても、肉体は弱い」と、イエスさまは言われます。「イエスにどう言えばよいのか、分からなかった」（14：40）ほどに、眠気に襲われ、起きてはいられない様子を、人間のどうしようもない弱さが描かれます。どんなに心が燃えていたとしても眠ってしまい、イエスさまと共に祈り続けることができない。それが、弟子たちの姿であり、私たちの現実でもあります。この夜、イエスさまは独り神と向き合っておられたのです。

## 立て、行こう

イエスさまが三度目に戻って来ても、弟子たちは眠っていました。そこでイエスさまは、「もうこれでいい。時が来た」と言われます。岩波訳では、「事は決した。時は来た」としています。「時」はカイロス（神の時）が使われており、イエスさまが過ぎ去るようにと願った「苦しみの時」（14：35）が、神の

み心によって定められたことを表しています。「もうこれでいい」(14:41)とは、イエスさまが祈りの果てに神のみ心を受け入れ、逃れることのできない十字架に向かわれたことを示しているのではないのでしょうか。

「人の子は罪人たちの手に引き渡される」とありますが、犯罪者が裁かれるために引き渡されるのが普通です。本来は人々を「裁く」側のイエスさまが、罪人たちの手に渡されるという逆説が、かえってイエスさまの主権を際立たせます。「立て、行こう、見よ」と、待ち受ける苦難、逃れることのできない現実に向かわれるイエスさまの姿がそこにありました。イエスさまの視線の先には、イスカリオテのユダ、そしてイエスさまの背後にはようやく眠りから覚めたペトロたちがいました。

準備のための聖書日課			
14日	㊦	詩編42:2~6	なぜ、うなだれるのか
15日	㊧	ゼカリヤ13:7~9	羊の群れは散らされる
16日	㊨	マルコ16:1~8	あなたがたより先にガリラヤへ
17日	㊩	ローマ7:13~25	わたしは肉の人
18日	㊪	ローマ8:12~17	アッパ、父よ
19日	㊫	ヨハネ14:25~31	さあ、立て、出かけよう



## 成人科

- 受難を前にしたイエスさまと弟子たちとの間に起こる人間の限界を突き

付けられる出来事が続きます。イエスさまは弟子たちに「あなたがたは皆わたしにつまずく」と断言されますが、ペトロはすかさずそれを否定し、弟子たちもそれに追従します。

私は、信仰告白し教会員になり、教会の約束を守ると誓ったにもかかわらず、礼拝から遠ざかったことがあります。幸い教会から離れてしまうことはありませんでしたが、色々な理由があって、心が離れてしまったのです。しかし、それは私にとって自分の弱さや主の憐れみを知り、

福音の根本を学ぶ体験となりました。そのような経験はないのでしょうか。

- 「たとえ、みんながつまずいても、わたしはつまずきません」と誓っても、イエスさまを否認してしまったペトロ、「目を覚ましていなさい」と命じられても起きていられなかった弟子たちがいました。このように、私たち人間には限界があることを認めざるを得ません。つまずく理由は色々あり、原因の所在も様々です。それにしても、つまずきの体験があって、その後回復に導かれたとしたら、何がその力となり、どのように回復の道(みち)を辿ったのか分かち合ってみましょう。

# 心は燃えていても

聖書

マルコによる福音書14章27～42節

暗唱  
聖句

誘惑に陥らぬよう、目を覚まして祈っていなさい。  
心は燃えても、肉体は弱い。マルコ14:38

51課

3月20日

最後の晩餐の後、一行はオリーブ山に向かいました。その途中、イエスさまは弟子たちに、「あなたがたは皆わたしにつまずく」と言われるのです。それが何を意味するのか弟子たちには分かりました。ペトロは驚いて、すかさず答えました。「たとえ、みんながつまずいても、わたしはつまずきません」仲間の裏切りの予告直後のことでしたから、そんなことがあってはならないというペトロの思いがあったのでしょう。しかし、イエスさまは畳みかけるように、「はっきり言うておくが、あなたは、今日、今夜、鶏が二度鳴く前に、三度わたしのことを知らないと言うだろう」と言われました。何と具体的で、見て来たことのようにイエスさまは断言なさるのでしょう。案の定、ペトロは力を込めて言い張りしました。「たとえ、ご一緒に死なねばならなくなっても、あなたのことを知らないなどは決して申しません」。

そんな決心を胸に、弟子たちはイエスさまと共にゲツセマネに到着しました。これから何が起こるのか、イエスさまはわかまえておられました。その備えのためにイエスさまは弟子たち代表三人を伴って祈りの場に向かいました。イエスさまは、ひどく恐れもだえ始めて彼らに言われます。「わたしは死ぬばかりに悲しい。ここを離れず、目を覚ましていなさい」。イエスさまでさえこれから起こることに不安を感じ、弟子たちに祈りの援護を頼みたかったのでしょ



う。そして、イエスさまは苦難の杯を取りのけることを切望されたかと思うと、「わたしが願うことではなく、み心に適うことが行われますように」と、全き神に委ねる祈りをされたのです。受難の意味を知っておられたイエスさまにしか分からない葛藤と決断の祈りに違いありません。

イエスさまにこれから起こることも、その苦悩も知ることもなく、弟子たちは三度も「目を覚まして祈っていなさい」との命令に応えられず眠り込んでしまいました。つまりきの告知を受けた時の勢いや、一緒に死んでもいいと言い張った決意は何だったのでしょ。イエスさまは三度目に戻って来て、「あなたがたはまだ眠っている。休んでいる。もうこれでいい」と言われました。それは弟子たちに落胆し、彼らの弱さに失望して出た言葉だったのでしょ。そうではなく、それに続く「立て、行こう」との言葉が示すように、彼らの弱さを受け入れ、共に負うイエスさまの決意と、神への従順を表しているのではないでしょか。

# 心は燃えていても



聖書

マルコによる福音書14章27～42節

暗唱  
聖句

誘惑に陥らぬよう、目を覚まして祈っていないさい。  
心は燃えても、肉体は弱い。マルコ14:38

## 聖書から…

これまでどんな時にも堂々としていたイエスさまが恐れ悶えながら祈るなんて、どれほどの恐怖だったのでしょうか。しかし一緒に祈って欲しいと頼まれた弟子たちはそんなイエスさまの心情を察することができず眠りかけてしまいます。

最後の晩餐でぶどう酒を嗜みほろ酔いになっていた状況を見ると無理ありませんが、本当の意味で他人の祈りを自分の祈りとしてすることがどれほど難しいことであるかを考えさせられます。弟子たちが眠ってしまう姿は、たとえ気持ちはあっても状況によっては他者の心に寄り添えないという人間の限界性を感じます。

そして祈りとは究極的には孤独の中で行われるものなのだと感じます。イエスさまは、「この杯を取りのけてください」と心の奥底の言葉を紡いで祈りました。神は沈黙しているように見えます。イエスさまの祈りは聞かれなかったのでしょうか。イエスさまは神に見捨てられたのでしょうか。いいえ「沈黙」という形の応答によって神は静かにイエスさまに伴われ、「み心のままに」という進むべき道に導かれたのです。大切なのは、祈りが願う通りに行くことではなく、私たちには祈れる神がいるということなのです。

## 分かち合おう

- 「祈りが聞かれる」とはどういうことでしょうか。自分の願いが叶えられることでしょうか。自分の祈った通りにならないと祈りは聞かれていないのでしょうか。そうではないと思います。大切なのは、私たちの心の奥底にある思いを打ち明ける場所があるかどうかです。それが祈りです。祈りの通りにならないことは、神が見捨てたということではありません。問題は、私たちがその神の応答を受け止めることができているかということです。「祈り」をどのように考えているか話し合ってみましょう。
- 他人に「祈ってほしい」とお願いしたことはありますか？ 逆に他の人から「祈ってほしい」と頼まれた経験はあるでしょうか。共に祈ることができる人間関係があることはとても大切なことです。でも、その祈りを本当に自分自身の事柄として祈り続けることは難しいことです。やはり自分と他人の間には距離があることを感じます。でも、それでよいのかもしれませんが、イエスさまはそんな祈れない弟子たちをご存知の上で招かれているからです。そしてそんな自分に気づくとき、心に「助けたまえ」と芽生えてくるものが「祈り」なのかもしれません。

51課

3月20日

# 心は燃えていても

聖書

マルコによる福音書14章27～42節

暗唱  
聖句

誘惑に陥らぬよう、目を覚まして祈っていなさい。  
心は燃えても、肉体は弱い。マルコ 14：38

## 聖書から…

イエスさまはオリーブ山に登りながら、もうすぐつかまり殺されると感じていました。とても恐くて、死ぬほどに悲しくて、神さまにお祈りします。ペトロ、ヤコブ、ヨハネを連れて行き、一緒にお祈りしてほしいと頼みました。でも、イエスさまがあんまり長く祈っているので離れていた弟子たちは眠くなって寝てしまいました。近くに居てもイエスさまの恐れや悲しみ、苦しみを知ることができませんでした。イエスさまは、神さまは何でも最善をなされると信じて祈られました。ですから「わたしの願うことではなく、御心に適うことが行われますように」と祈られたのです。

「目を覚まして祈っていなさい」とイエスさまが言われたように、私たちに一緒に祈ってほしいと言っている人たちがいます。恐れや悲しみにつぶされそうな気持ちでお祈りしている人と、最善をなさる神さまを信じて一緒にお祈りしましょう。

## 活動①

### 「目を覚ましていなさい」

\*ハンカチ落としの要領で遊びます。ハンカチ（祈りのバトン）を用意します。

- ①輪になって座ります。祈り人を決めます。
- ②祈り人はみんなの後ろに立って「目を覚まして祈っていなさい」と言います。

③座っている人たちは目を閉じます。

④祈り人が祈りのバトンを誰かの後ろに置きます。

⑤後ろに置かれたと気付いた人は祈り人を追いかけます。

⑥祈り人は空いた席に座ります。座る前に追いつかれたらもう一回。

祈ってほしいという気持ちをバトンのようにそっと置かれたときに、気づいて祈ることができるといいですね。

## 活動②

## ワークシート

### 「一緒に祈ろう」

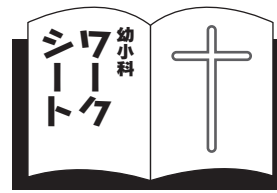
みんなはどんなことをお祈りしていますか？

教会にはどんな祈りたいことがありますか？

祈りたいことを書き出して一緒にお祈りしましょう。

祈りのカードを書いて誰かと交換します。受け取ったカードの祈りを祈りましょう。





お祈りしてほしいこと

1.

---

2.

---

3.

---

みんなのお祈り

1.

---

2.

---

3.

---

51課

3月20日



「わたしの願うことではなく、  
御心に適うことが行われますように。」

イエスさまのお名前によってお祈りします。

アーメン



# 鶏の声を聞くたびに

聖書

マルコによる福音書14章66～72節

暗唱  
聖句

ペトロは…イエスが言われた言葉を思い出して、いきなり泣きだした。  
マルコ 14：72

## 不当な裁判の中で

ついにイエスさまは祭司長、律法学者や長老たちの手によって捕えられ、大祭司のもとで最高法院の裁判にかけられようとしていました。いつの世でも、正しい者を貶める者たちの手口は司法の場を利用し、群衆をそこに扇動し、流れを支配して目的を果たそうとすることです。その陰謀に囲まれる中で、弟子たちは皆、イエスさまを捨てて逃げ去りました。しかし、ペトロは群衆に紛れて裁判が行われる大祭司の屋敷に入り込んでいました。あれほど強くきっぱりとイエスさまに従うと宣言したにもかかわらず、イエスさまから離れ自らの安全を気にしながら、事の成り行きを見つめている自分がいました。いざとなると人は、我が身を守るために大義よりも自分の命を選んでしまうものです。それも一つの人間の性質です。自己嫌悪や後悔、不安が入り混じり、そうでありながらイエスさまのもとへ飛んでいきたい気持ちもあったことでしょう。

祭司長たちと最高法院の全員がイエスさまの死刑ありきでイエスさまに不利な証言を求め、多くの偽証が上げられました。しかしそれらは食い違って決定打とはなりません。そこで人々はイエスさま自身の言葉尻を取ろうと激しく詰問します。しかしイエスさまは、抵抗せず、弁解せず、沈黙を貫かれます。そのようなイエスさまに大祭司は進み出て、「お前はメシアか」と尋ねました。するとイエスさまは「そうです。あなたたちは人の子が全能の神の右に座り、天の雲に囲まれて来るの

を見る」とみ言葉で答えられたのです。それは、詩編(110：1)と、ダニエル書(7：13)の引用で、終末の審判者としての王を意味します。大祭司はそれを聞いて、衣を引き裂きながら死刑を主張し、一同はすぐさまそれを決議しました。彼らにとっては策略の成功でした。しかし、イエスさまにとっては十字架への通過点でした。

## ペトロの離反

ふいに、大祭司の女中の一人が来て、火にあたっているペトロを見て「あなたも、あのナザレのイエスと一緒にいた」とつぶやきました。糾弾する意図があったわけではなく、自分の記憶を確かめただけだったようです。もしかすると、その時否認しなければ、それで収まっていたかもしれません。しかし、心に引け目のあるペトロは必要以上に反応し、否認して出口の方へ出て行きました。すると、鶏が鳴いたのです。不審に思った女中から改めて追及され、ついに人々からも突きつけられ、ペトロは自分でも思いもよらず呪いの言葉さえ口にしながら、「あなたがたの言っているそんな人は知らない」と誓い始めました。いったん嘘をつく、さらに大きな嘘をつかなければなりません。大きな嘘の直後、再び鶏が鳴いたのです。ペトロはとっさに、「鶏が二度鳴く前に、あなたは三度わたしを知らないと言うだろう」と言われたイエスさまの言葉を思い出しました。ペトロは気付いたのです。自分はただ単にイエスさまの受難の予告を否認しただけではなく、イエスさま自身

を否定し、イエスさま自身から離反したのだと。それがどれほど大きな裏切りであり、罪深いことであったか、鶏の声が気づかせてくれたのです。ペトロはいきなり泣き出してしまいました。その悲しみが、涙がどれほど痛切なものであり、彼の心を砕く出来事であったか。それは彼が後に、復活後のイエスさまに出会い、愛され赦された者であることを知って、イエスさまへの応答として死をも恐れぬ伝道者となって行ったところに見ることができます。それ以来、ペトロは朝を迎え、鶏の声を聞くたびに心の傷の痛みを覚えたに違いありません。そして、同時にペトロは、日々新たなる主告白のために鶏の声を心に刻んだのではないのでしょうか。

準備のための聖書日課			
21日	㊦	マルコ14:43~52	まるで強盗にでも向かうように
22日	㊧	マルコ14:53~65	死刑にするための裁判
23日	㊨	ダニエル7:11~14	天の雲に乗る人の子のような者
24日	㊩	マタイ26:69~75	言葉遣いで分かる
25日	㊪	ルカ22:54~62	主のまなざしのなかで
26日	㊫	ヨハネ18:15~18	ペトロともう一人の弟子



## 成人科

● 大祭司の中庭で、ペトロは女中たちの言葉を何度も否定しました。それは「自己保身」、あらゆる現場で私たちが自分の身を守るために行う態度であったと言えます。そのこと自体、自己防衛本能によるもので、悪いことではありません。しかし、それが自己中心、責任転嫁であれば身勝手なことで、許されるものではありません。初めは小さなことでも、「自己保身」から出たことが大変な問題になってしまうこともよくあることです。「自己保身」に走ってしまう私たち人間の弱さについて考えてみたいものです。

● 私たちの内にある「自己保身」の性質を考えると、一方的にペトロを責めることはできません。ペトロがイエスさまの言葉を思い出して、いきなり泣き出したのは、約束や誓いを破ったことよりも、イエスさまとの関係を断ってしまった、倫理道徳とは違った罪の自覚にあったと思われる。「あなたは三度わたしを知らないと言うだろう」と言われたイエスさまの言葉は断罪ではなく、ペトロの弱さという現実を受け入れ、赦すという究極の守りを感じさせられます。そこに、神から赦され守られている安心に根差す、自己保身からの解放はないか考えてみましょう。



# 鶏の声を聞くたびに

聖書

マルコによる福音書14章66～72節

暗唱  
聖句

ペトロは…イエスが言われた言葉を思い出して、いきなり泣きだした。  
マルコ14:72

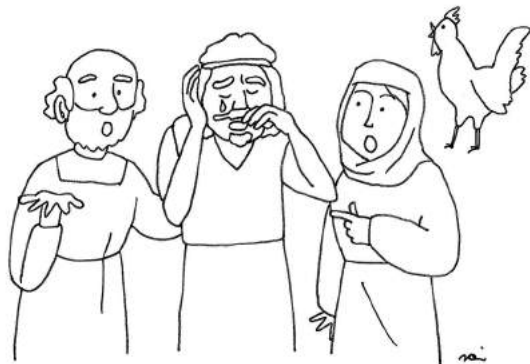
52  
課

3  
月  
27  
日

皆さんは人を裏切ったことがあるでしょうか？誰でも、自分はまっとうに落ち度なく生きていると信じたいものです。ペトロもイエスさまと共に福音伝道が続けてきた今、自分が人を裏切ったり、嘘つきになったりしないと思っていました。それに、ちょっとやそっとの試練があっても、自分の信念を曲げないで乗り越えることができると信じていました。

ところが、人々のために正しいことをしてきたと信じていた自分たちが周りの、特に宗教指導者たちや上流階級の人たちから疎んじられ、敵対者とされていることに気が付き始めたのです。また、ユダヤ人が待ち望んでいた、国を救ってくれる王の姿とイエスさまの姿に大きな隔たりがあることも明らかになって来ました。イエスさまはついにユダの裏切りもあり、祭司長や律法学者たち、長老たちから遣わされた群衆に捕らえられてしまい、最高法院で裁かれることになってしまったのです。

「死ぬまで一緒」と約束した弟子たちは皆、イエスさまを捨てて逃げてしまいましたが、ペトロだけは、後悔や責任感や後ろめたさもあったのか、裁判が行われる大祭司の庭に潜り込んでいました。ところが、女中の一人がペトロに見覚えがあり記憶を確かめるように、「あなたも、あのナザレのイエスと一緒にいた」とつぶやいたのです。言い当てられてしまったペトロは嘘をついてしまいました。「あなたが何のことを言っ



ているのか、分からないし、見当もつかない」と否定し、出口まで逃げ出したのです。すると、鶏が鳴きました。ペトロがあまりに強く否定したものですから女中は確信して「この人は、イエスの仲間だ」と言いふらしてしまったのです。証言と否定が三回も続いて、ついにペトロはイエスさまへの呪いの言葉さえ口にしながら「知らない」と誓ったのです。すると再び鶏が鳴きました。

人は、約束を守る者でありたいものです。しかし私たちは、利害がからんだり、被害が自分にも及ぶ時、そのつもりでなくても簡単に約束を破ったり裏切ったりするものです。ペトロはハッと、イエスさまの予告を思い出し、いきなり泣き出しました。何という切ない涙でしょう。それは、イエスさまご自身を否定し、離反したことへの拭い去ることのできない後悔の涙でした。それ以来、来る朝ごとに鶏の声はペトロにその罪を思い出させ、赦してくださったイエスさまに感謝しながら生きる深い祈りをペトロにもたらしたのではないのでしょうか。

# 鶏の声を聞きたびに

青少年科



聖書

マルコによる福音書14章66～72節

暗唱  
聖句

ペトロは…イエスが言われた言葉を思い出して、いきなり泣きだした。  
マルコ14:72

## 聖書から…

ペトロはどのような気持ちで大祭司の屋敷に来たのでしょうか。イエスさまを心配する思いでしょうか。それともイエスさまを守り切れなかった自責の念でしょうか。どのように助けたらよいかという算段でしょうか。色々な思いが交錯して心の中はいっぱいだったと思います。もしかして「死ぬまで一緒」という言葉を果たすためにここに来たのかもしれない。

そんなペトロがふと我に返り、自分の置かれている立場を理解した瞬間が女中の一言でした。その刹那、彼の心に恐怖が押し寄せ、彼は自分の身を守るために「イエスを知らない」と三回も否認してしまいました。心の底から出た言葉とは思いませんが、彼自身そんなことを口にするとは思っていなかったでしょう。彼が激しく泣いたのは、自分の言葉に責任を持つことさえできない生身の自分の弱い姿に気付いてしまったからかもしれません。ペトロはその後復活のイエス・キリストと出会い、罪赦され、新たな歩みへと出かけていきました。でも、この体験はまさに彼にとって鶏の声を聴きたびに思い返したことでしょう。彼にとっての本当の始まりの出来事は、こんな自分さえ愛してくださっているイエスさまとの出会いであったように思えます。

## 分かち合おう

- 「あなたも、あのナザレのイエスと一緒にいた」と言われたとき、何故ペトロは「はい、そうです」と言えなかったのでしょうか。本当のことを言えずに嘘をついてしまったのはなんでだと思いますか。本当のことを話すのは勇気がいることです。実は私も昔学校の友だちに「おまえ、教会行っているのか？」と聞かれ、なんだか変な目で見られるのが怖くて咄嗟に「違う」と言ってしまったことがあります。一度ついてしまった嘘は心に大きな傷となることがあります。本当のことを話すためにはどうしたらよいのでしょうか。
- 遠藤周作の小説『沈黙』のキチジローは、神さまを信じて迫害に負けることない強い信仰で歩みたいと思っても、襲い掛かる恐怖に負け、転んで（キリスト教信仰を捨てること）しまいます。そのたびに司祭のところにやって来て悔い改めをしますが、また同じことを繰り返します。私たちには「理想的な自分」と「認めたくない弱い自分」の両面性があります。理想的な信仰者でいたいと思いますが、イエスさまは弱い自分でさえ受け入れ憐れんでくださいます。この関係から新しい歩みへと立ち上がらせていくことを感じます。

52課

3月27日

# 鶏の声を聞くたびに

聖書 マルコによる福音書14章66～72節

暗唱 聖句 ペトロは…イエスが言われた言葉を思い出して、いきなり泣きだした。  
マルコ 14:72

## 聖書から…

「ぜったい！」って言ったことがありますか？ ペトロは一番弟子として、ぜったいにイエスさまを裏切らない自信がありました。「たとえ、みんながつまずいても、わたしはつまずきません」（14:29）とみんなの前で言うほどに自信がありました。イエスさまが捕まってみんなが逃げて、イエスさまが心配で離れてついていきました。

ところが突然「あなたも、あのナザレのイエスと一緒にいた」と言われて、ペトロはドキッとしました。とっさに「何を言っているのか分からない」と、イエスさまを知らないふりをしてしまいました。3度も知らないと言った時に鶏が鳴きました。あの時、イエスさまがおっしゃったとおりになりました。鶏の鳴き声を聞いて、イエスさまの言葉を思い出したペトロは泣き出しました。

自分の信仰に自信のあったペトロは、イエスさまを裏切ってしまう自分の弱さを思い知りました。自分の罪を知った時に、イエスさまの赦しを知ったのです。ペトロは鶏の声を聞くたびに、イエスさまへの感謝の想いがわきあふれたことでしょう。

## 活動①

「みんながつまずいても、わたしは大丈夫」

リーダーは1分でタイマーが鳴るようにセットします。

「みんながつまずいても、わたしは大丈夫」とみんなで掛け声を言って、片足立ちをします。1分間倒れずにいられるでしょうか。

イエスさまを信じる気持ちが、時には折れてしまうことがあるかもしれません。そんな私たちの弱さを知って赦してくださるイエスさまの愛を感謝します。

## 活動②

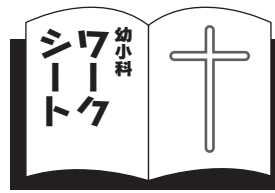
## ワークシート

「ペトロとにわとりのやじろべえ」

●準備●紙粘土、ペットボトル、竹串2本、つまようじ1本（竹串とつまようじは、取扱い注意）

- ①やじろべえの真ん中に置く紙粘土を丸めて穴を開け、つまようじと竹串をさします。左右のバランスが取れるように穴を開ける位置や角度に注意しましょう。
- ②左右に付ける丸めた紙粘土に穴を開け、竹串にさします。
- ③ペットボトルのキャップの上でバランスを保てるか確認しましょう。
- ④真ん中の丸めた紙粘土にワークシートのにわとりの絵を貼り、左右の紙粘土には自信満々のペトロと、泣き顔のペトロを貼ります。

\*にわとりの声を聞いてイエスさまの言葉を思い出したペトロはどんな気持ちになったでしょうか。遊びながら考えてみましょう。



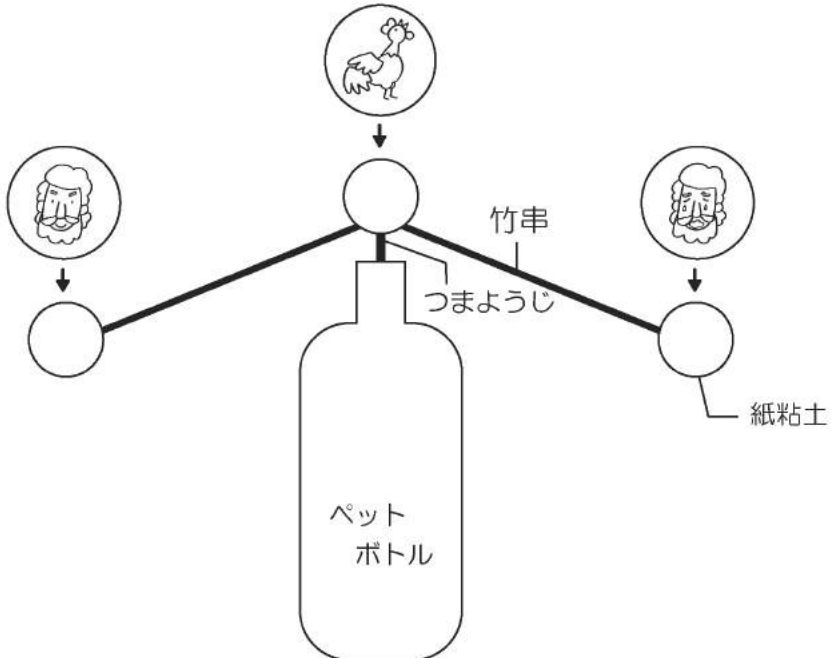
自信満々のペットロ



泣いているペットロ



にわとり



## わたしの



「ここ」  
人差指で前下を指す



「わたし」  
人差指で自分を指差す



「神」(指文字「か」)  
中指に親指を当てた3指

## 家は、



「家」  
両手指先を合わせ  
三角屋根を作る



「すべて」  
両掌下向き  
指先前方に伸ばし



下に向かって  
円を描くように

## 国の



「国」  
親指と4指を突き合せ



左右に開きながら  
指を閉じる

## 人の



「人々」  
親・小指を立てた両手を



揺らしながら左右に離す



「ための」  
左手指を丸めて作った輪に



右人差指を当てる

祈りの

家と

呼ばれる



「祈り」



「家」  
両手指先を合わせ  
三角屋根を作る



「言う」  
人差指を口元から

べきである。



前方に動かす



「べき」(必要)  
両手の指先を

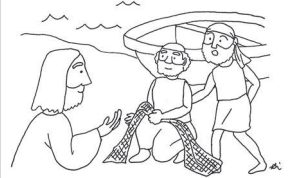


胸に引寄せる

# 暗唱聖句 カード

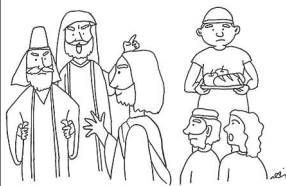
## 新共同訳

- 線で切り取って使用してください。
- ホームページからカラー印刷ができます。
- <http://www.bapren.com/>



イエスは、「わたしについて来なさい。人間をとる漁師にしよう」と言われた。マルコ 1 : 17

41課 1月9日



わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招くためである。マルコ 2 : 17

42課 1月16日



神の御心を行う人こそ、わたしの兄弟、姉妹、また母なのだ。マルコ 3 : 35

43課 1月23日



そして、パンの屑と魚の残りを集めると、十二の籠にいっぱいになった。マルコ 6 : 43

44課 1月30日



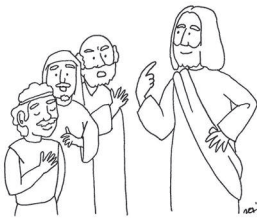
主は、従う人に目を注ぎ助けを求め、叫びに耳を傾けてくださる。詩編 34 : 16

45課 2月6日



その日、その時は、だれも知らない。…父だけがご存知である。マルコ 13 : 32

46課 2月13日



そこでイエスがお尋ねになった。「それでは、あなたがたはわたしを何者だと言うのか」マルコ 8 : 29

47課 2月20日



信じます。信仰のないわたしを助けてください。マルコ 9 : 24

48課 2月27日



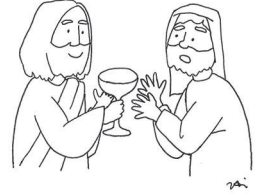
わたしの家は、すべての国の人の祈りの家と呼ばれるべきである。マルコ 11 : 17

49課 3月6日



神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神なのだ。マルコ 12 : 27

50課 3月13日



杯を取り、感謝の祈りを唱えて、彼らにお渡しになった。彼らは皆その杯から飲んだ。マルコ 14 : 23

51課 3月20日



誘惑に陥らぬよう、目を覚まして祈っていないさい。心は燃えても、肉体は弱い。マルコ 14 : 38

52課 3月27日

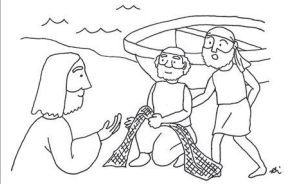


ペトロは…イエスが言われた言葉を思い出して、いきなり泣きだした。マルコ 14 : 72

# 暗唱聖句 カード 口語訳

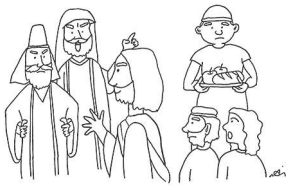
- 線で切り取って使用してください。
- ホームページからカラー印刷ができます。
- <http://www.bapren.com/>

40課 1月2日



イエスは彼らに言われた、「わたしについてきなさい。あなたがたを、人間をとる漁師にしてあげよう」  
マルコ 1 : 17

41課 1月9日



わたしがきたのは、義人を招くためではなく、罪人を招くためである。  
マルコ 2 : 17

42課 1月16日



神のみこころを行う者はだれでも、わたしの兄弟、また姉妹、また母なのである。  
マルコ 3 : 35

43課 1月23日



そこで、パンくずや魚の残りを集めると、十二のかごにいっぱいになった。  
マルコ 6 : 43

44課 1月30日



主の目は正しい人をかえりみ、その耳は彼らの叫びに傾く。  
詩編 34 : 15

45課 2月6日



その日、その時は、だれも知らない。…父だけが知っておられる。  
マルコ 13 : 32

46課 2月13日



そこでイエスは彼らに尋ねられた、「それでは、あなたがたはわたしをだれと言うのか」  
マルコ 8 : 29

47課 2月20日



信じます。不信仰なわたしを、お助けください。  
マルコ 9 : 24

48課 2月27日



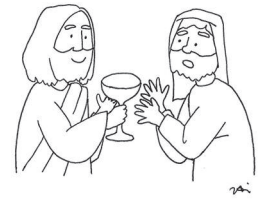
わたしの家は、すべての国民の祈の家となえられるべきである  
マルコ 11 : 17

49課 3月6日



神は死んだ者の神ではなく、生きています者の神である。  
マルコ 12 : 27

50課 3月13日



杯を取り、感謝して彼らに与えられると、一同はその杯から飲んだ。  
マルコ 14 : 23

51課 3月20日



誘惑に陥らないように、目をさまして祈っていない。心は熱しているが、肉体が弱いのである。  
マルコ 14 : 38

52課 3月27日



ペトロは…イエスの言葉を思い出し、そして思いかえして泣きつづけた。  
マルコ 14 : 72



# 聖書教育

## 特集

ペンテコステメッセージ

奥村敏夫

憲法改正について考える

林 健一

## 連載

時代を生きる教会：  
命どっ宝の日をおぼえて

吉岐基子

今、信仰を告白するということ

伊藤世里江

ご意見、ご感想をお待ちしております。

FAX ● 048-883-1092 Eメール ● seishokyouiku@bapren.jp (編集担当)

## 聖書教育

● 2021年11月20日発行・発売 ● 定価 1,200円 (税込)

発行人 中田 義直

発行 日本バプテスト連盟

〒 336-0017 埼玉県さいたま市南区南浦和 1-2-4

TEL : 048-883-1091 FAX : 048-883-1092

日本バプテスト連盟 HP <https://www.bapren.jp/>

聖書教育 HP <https://www.bapren.com/>

ご注文は連盟販売管理室まで hanbai-kanri@bapren.jp

郵便振替口座 00150-9-192579

印刷 ニューライフミニストリーズ (新生宣教団)

● 内容についての編集責任は日本バプテスト連盟にあります。

● ワーク・教材以外の複製はご遠慮ください。

● 聖書は日本聖書協会新共同訳を使用しています。

©2021 日本バプテスト連盟

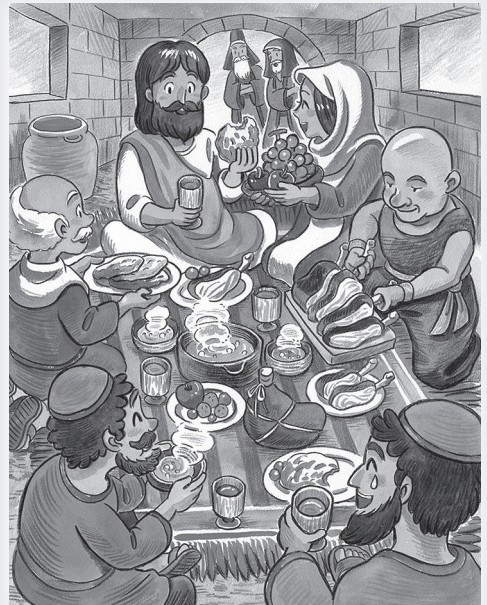
● 乱丁落丁はお取り替えいたします。日本バプテスト連盟販売管理室までご連絡ください。

● 表紙 三浦あや

● みんなで聴く聖書のおはなしカット 香月 藍

● レイアウト JC ユニット

● 幼小科ワークシート 吉崎 愛



表紙「罪人を招くために」